



共通デスクトップ環境 ToolTalk メッセージの概要

Sun Microsystems, Inc.
901 San Antonio Road
Palo Alto, CA 94303
U.S.A. 650-960-1300

Part Number 806-2978-10
2000年3月

Copyright 2000 Sun Microsystems, Inc. 901 San Antonio Road, Palo Alto, California 94303-4900 U.S.A. All rights reserved.

本製品およびそれに関連する文書は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。サン・マイクロシステムズ株式会社の書面による事前の許可なく、本製品および関連する文書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。フォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

RESTRICTED RIGHTS: Use, duplication, or disclosure by the U.S. Government is subject to restrictions of FAR 52.227-14(g)(2)(6/87) and FAR 52.227-19(6/87), or DFAR 252.227-7015(b)(6/95) and DFAR 227.7202-3(a).

本製品に含まれる HG 明朝 L と HG ゴシック B は、株式会社リコーがリコービイマジクス株式会社からライセンス供与されたタイプフェイスマスタをもとに作成されたものです。平成明朝体 W3 は、株式会社リコーが財団法人 日本規格協会 文字フォント開発・普及センターからライセンス供与されたタイプフェイスマスタをもとに作成されたものです。また、HG 明朝 L と HG ゴシック B の補助漢字部分は、平成明朝体 W3 の補助漢字を使用しています。なお、フォントとして無断複製することは禁止されています。

Sun, Sun Microsystems, docs.sun.com, AnswerBook, AnswerBook2 は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。

サンロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャに基づくものです。

OPENLOOK、OpenBoot、JLE は、サン・マイクロシステムズ株式会社の登録商標です。

Wnn は、京都大学、株式会社アステック、オムロン株式会社で共同開発されたソフトウェアです。

Wnn6 は、オムロン株式会社で開発されたソフトウェアです。(Copyright OMRON Co., Ltd. 1999 All Rights Reserved.)

「ATOK」は、株式会社ジャストシステムの登録商標です。

「ATOK8」は株式会社ジャストシステムの著作物であり、「ATOK8」にかかる著作権その他の権利は、すべて株式会社ジャストシステムに帰属します。

「ATOK Server/ATOK12」は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、「ATOK Server/ATOK12」にかかる著作権その他の権利は、株式会社ジャストシステムおよび各権利者に帰属します。

本製品に含まれる郵便番号辞書 (7 桁/5 桁) は郵政省が公開したデータを元に制作された物です (一部データの加工を行なっています)。

本製品に含まれるフェイスマーク辞書は、株式会社ビレッジセンターの許諾のもと、同社が発行する『インターネット・パソコン通信フェイスマークガイド'98』に添付のものを使用しています。© 1997 ビレッジセンター

Unicode は、Unicode, Inc. の商標です。

本書で参照されている製品やサービスに関しては、該当する会社または組織に直接お問い合わせください。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

DtComboBox ウィジェットと DtSpinBox ウィジェットのプログラムおよびドキュメントは、Interleaf, Inc. から提供されたものです。(© 1993 Interleaf, Inc.)

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われないものとします。

本製品が、外国為替および外国貿易管理法 (外為法) に定められる戦略物資等 (貨物または役務) に該当する場合、本製品を輸出または日本国外へ持ち出す際には、サン・マイクロシステムズ株式会社の事前の書面による承諾を得ることのほか、外為法および関連法規に基づく輸出手続き、また場合によっては、米国商務省または米国所轄官庁の許可を得ることが必要です。

原典: *Common Desktop Environment: ToolTalk Messaging Overview*

Part No: 806-2916-10

Revision A



目次

はじめに 9

1. ToolTalk サービスの紹介 15

ToolTalk サービスが解決できる業務上の問題 16

 ツール互換性 16

 制御統合 16

 ネットワーク透過イベント 17

 自動ツール起動機能 17

 分散オブジェクト・システム 17

 固定表示オブジェクト 18

 ToolTalk サービスが業務上の問題を解決する方法を示すシナリオ 18

アプリケーションの ToolTalk メッセージの使用方法 23

 ToolTalk メッセージの送信 23

 メッセージ・パターン 24

 ToolTalk メッセージの受信 25

ToolTalk メッセージの配信 25

 プロセス指向メッセージ方式 25

 オブジェクト指向メッセージ方式 25

 メッセージ配信の判別 26

ToolTalk サービスを使用するためのアプリケーションの変更 27

- 2. **ToolTalk** メッセージの使用法 29
 - ToolTalk 機能のアプリケーションへの通知 29
 - メッセージ・ツールキットの使用と ToolTalk コマンドの組み込み 29
 - ToolTalk ライブラリの使用 30
 - コーディングを開始する前に 30
 - イベントとオペレーションとの違い 31
 - シナリオの開発 32
 - 通信用アプリケーションの準備 34
 - ptype ファイルの作成 34
 - 各 ToolTalk 対応アプリケーションが実行する必要があるタスク 36
 - ToolTalk 対応エディタ・アプリケーションが実行する必要があるタスク 37
 - ToolTalk 対応エディタ・アプリケーションが実行できるオプションのタスク 39
- 3. **TTSnoop** の使用によるメッセージおよびパターンのデバッグ 41
 - TTSnoop について 41
 - TTSnoop はどこにあるか 42
 - TTSnoop の起動 42
 - メッセージの作成および送信 43
 - パターンの作成および登録 44
 - メッセージ・コンポーネントの表示 44
 - 作成済みメッセージの送信 44
 - メッセージの受信 44
 - メッセージ受信の停止 45
- 4. **ToolTalk** トレースの使い方 47
 - ToolTalk トレースへのアクセス 47
 - トレースのコントロール 48
 - libtt トレースのコントロール 48
 - クライアント側トレースのコントロール 48

ToolTalk セッション内のメッセージ・トラフィックのトレース	49
サーバによる ToolTalk 呼び出しとメッセージのトレース	51
トレースされた関数の形式	53
例	54
ToolTalk トレースのための設定	57
A. メッセージ・ツールキット	59
ToolTalk メッセージ・ツールキットの一般的な説明	59
ToolTalk の規約	62
アプリケーション記述時のメッセージ・ツールキットの使用	63
ToolTalk メッセージ・ツールキット	64
tttdt_close	64
tttdt_file_event	64
tttdt_file_join	66
tttdt_file_notice	68
tttdt_file_quit	69
tttdt_file_request	70
tttdt_Get_Modified	72
tttdt_message_accept	72
tttdt_open	76
tttdt_Revert	77
tttdt_Save	78
tttdt_sender_imprint_on	80
tttdt_session_join	81
tttdt_session_quit	85
tttdt_subcontract_manage	86
ttmedia_Deposit	87
ttmedia_load	88
ttmedia_load_reply	91

	ttmedia_ptype_declare	92
	tttk_block_while	95
	tttk_message_abandon	95
	tttk_message_create	96
	tttk_message_destroy	97
	tttk_message_fail	97
	tttk_message_receive	98
	tttk_message_reject	98
	tttk_op_string	99
	tttk_Xt_input_handler	99
B.	CoEd デモンストレーション・プログラム	101
	CoEd ptype ファイル	101
	CoEd.C ファイル	102
	Coeditor.C ファイル	105
C.	新規の ToolTalk 関数	121
	tt_error	121
	tt_file_netfile	122
	tt_host_file_netfile	123
	tt_host_netfile_file	124
	tt_message_print	125
	tt_netfile_file	125
	tt_pattern_print	127
D.	例	129
	Ttdt_contract_cb の例	129
	Ttdt_file_cb の例	131
	Ttmedia_load_msg_cb の例	132
	Ttmedia_load_pat_cb の例	133
	Ttmedia_ptype_declare 関数の ptype シグニチャーの例	134

Xt 入力処理関数の例 135

索引 137

はじめに

このマニュアルでは、共通デスクトップ環境のコンポーネント、コマンド、および ToolTalk™ サービスのエラー・メッセージについて記述しています。



注意 - 一般的な ToolTalk サービスの機能についてのより詳細な情報は、このマニュアルの対象外です。つまり、ToolTalk API、コマンド、共通デスクトップ環境対応の ToolTalk サービスなど、このリリースには特に関連のない ToolTalk の機能については説明していません。これらの情報については、ToolTalk のマニュアルページおよび『*ToolTalk ユーザーズガイド*』を参照してください。

対象読者

このマニュアルは、ToolTalk サービスを使用して共通デスクトップ環境で他のアプリケーションと連携するアプリケーションを作成し保守する開発者を対象としています。このマニュアルでは、読者が ToolTalk サービスとその機能、UNIX オペレーティング・システムのコマンド、システム管理者のコマンド、およびシステム用語についての知識を持っていると想定しています。

内容の紹介

このマニュアルは、次のように構成されています。

第 1 章

ToolTalk サービスの動作、アプリケーションが提供した情報を使って ToolTalk サービスがメッセージを配信する方法、アプリケーションが ToolTalk サービスを使用する方法、およびアプリケーションと ToolTalk のコンポーネントについて説明します。

第 2 章

アプリケーションを作成するのに必要となる共通デスクトップ環境下での ToolTalk サービスの使用方法を説明します。他の ToolTalk 対応の共通デスクトップ環境準拠のアプリケーションと連携するためにアプリケーションに組み込む必要のある ToolTalk ツールキット・メッセージの種類についても説明します。

第 3 章

カスタム構築の ToolTalk メッセージを作成および送信する方法と、ToolTalk メッセージの一部またはすべてを選択して監視する方法についても説明します。

第 4 章

ToolTalk パターンを `ttsession` にある各メッセージと一致させ配信する方法について説明します。

付録 A

メッセージ・ツールキットの一部であるアプリケーション・プログラム・インタフェース (API 関数) について説明します。

付録 B

ToolTalk デモ・プログラム `CoEd` の `ptype`、ヘッダおよび `.c` ファイルの ToolTalk に関連のある部分を示します。

付録 C

ローカル・パスと正規パスの間にファイル名をマップする ToolTalk 関数について説明します。

関連マニュアル

このマニュアルには、ToolTalk とその機能についての詳細な情報は載っていません。ToolTalk プロダクトの基本マニュアル (『*ToolTalk ユーザーズガイド*』と

ToolTalk のマニュアルページ) の他に、次の ToolTalk の関連マニュアルにも、このマニュアルには載っていない ToolTalk の機能についての詳細な情報が載っています。

- 『*The ToolTalk Service - An Inter-Operability Solution*』 (SunSoft Press/PTR Prentice Hall, ISBN 013-088717-X)

このマニュアルでは、ToolTalk とその機能について詳細に説明しています。また、ToolTalk が移植されたすべてのプラットフォームで使用可能です。一般の書店または PTR Prentice Hall から直接お求めになれます。

このマニュアルは日本語版が出版されています。

『*The ToolTalk サービス リファレンスマニュアル*』 (サンソフト監修 データリンク訳 アスキー出版局)

- 『*ToolTalk and Open Protocols*』 Astrid M. Julianne、Brian Holtz 共著 (SunSoft Press/PTR Prentice Hall, ISBN 013-031055-7)

このマニュアルは、他のアプリケーションと通信するためにメッセージ・サービスを使用するアプリケーションのためにオープン・プロトコルを作成および開発する方法について説明しています。このマニュアルで説明している一般原理は、ツールを簡単に交換するためにユーザが必要とする柔軟性をアプリケーションに提供します。一般の書店または PTR Prentice Hall から直接お求めになれます。

- 『*ToolTalk Message Sets*』

- 『*ToolTalk Desktop Services Message Sets*』

これらの規格は、POSIX または X11 環境にあるツールに適用されます。これらの環境の標準メッセージの他に、デスクトップの規格は ToolTalk 内部クライアント規格のすべてに適用されるデータ型とエラー・コードを定義します。

- 『*ToolTalk Document and Media Exchange Message Set*』

ツールを任意のメディアのコンテナ、またはそのようなコンテナから駆動されるメディア・プレイヤー/エディタにします。

- 『*CASE Inter-Operability Message Set*』

Sun、DEC、および SGI による、CASE セットアップのための抽象的なフレームワーク・ニュートラル・メッセージ・インタフェースを定義するオープン規格です。HP の CASE Communique にマージされ、HP の SoftBench Broadcast Message Server フレームワーク用のメッセージ・インタフェースを定義し、ANSI X3H6 に共同ドラフトとして提出されたものです。X3H6 標準

のドラフトに関する情報については、/pub/X3H6 の *ftp.netcom.com* から取り出すことができます。または下記のところに連絡をとることもできます。

X3 Secretariat
Computer and Business Equipment Manufactures Assoc
1250 Eye St NW
Washington DC 20005-3922

Telephone: (202) 737-8888 (press '1' twice)

Fax: (202) 638-4922 or (202) 628-2829

ToolTalk のニュースグループ

ToolTalk のニュースグループは次のとおりです。

alt.soft-sys.tooltalk

Sun のマニュアルの注文方法

専門書を扱うインターネットの書店 *Fatbrain.com* から、米国 Sun Microsystems™, Inc. (以降、Sun™ とします) のマニュアルをご注文いただけます。

マニュアルのリストと注文方法については、<http://www1.fatbrain.com/documentation/sun> の Sun Documentation Center をご覧ください。

表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用します。

表 P-1 表記上の規則

字体または記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 system%
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	system% su password:
AaBbCc123	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、rm <i>filename</i> と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『コードマネージャ・ユーザーズガイド』を参照してください。
「 」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第 5 章「衝突の回避」を参照してください。 この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	sun% grep `^#define \ XV_VERSION_STRING'

ただし AnswerBook2™ では、ユーザーが入力する文字と画面上のコンピュータ出力は区別して表示されません。

コード例は次のように表示されます。

■ C シェルプロンプト

```
system% command y|n [filename]
```

■ Bourne シェルおよび Korn シェルのプロンプト

```
system$ command y|n [filename]
```

■ スーパーユーザーのプロンプト

```
system# command y|n [filename]
```

[] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

一般規則

- このマニュアルでは、英語環境での画面イメージを使っています。このため、実際に日本語環境で表示される画面イメージとこのマニュアルで使っている画面イメージが異なる場合があります。本文中で画面イメージを説明する場合には、日本語のメニュー、ボタン名などの項目名と英語の項目名が、適宜併記されています。
- このマニュアルでは、「IA」という用語は、Intel 32 ビットのプロセッサアーキテクチャを意味します。これには、Pentium、Pentium Pro、Pentium II、Pentium II Xeon、Celeron、Pentium III、Pentium III Xeon の各プロセッサ、および AMD、Cyrix が提供する互換マイクロプロセッサチップが含まれます。

ToolTalk サービスの紹介

独自に開発されたアプリケーションが同時に動作することを要求するコンピュータ・ユーザが増えてきているため、相互運用はソフトウェア開発者にとって重要なテーマになってきています。お互いの機能を共同で使用することにより、相互運用アプリケーションは、単一のアプリケーションが提供するには難しい機能をユーザに提供します。ToolTalk サービスは、個人やワーク・グループで利用される相互運用アプリケーションの開発を簡単に行えるように設計されています。

ToolTalk サービスを使用すると、独立したアプリケーションが互いに直接認識していなくても通信できます。アプリケーションは ToolTalk メッセージを作成し、送信することで相互に通信します。ToolTalk サービスは、これらのメッセージを受信し、受信先を決定してから、そのメッセージを適切なアプリケーションに配信します。この通信の様子を図 1-1 に示します。

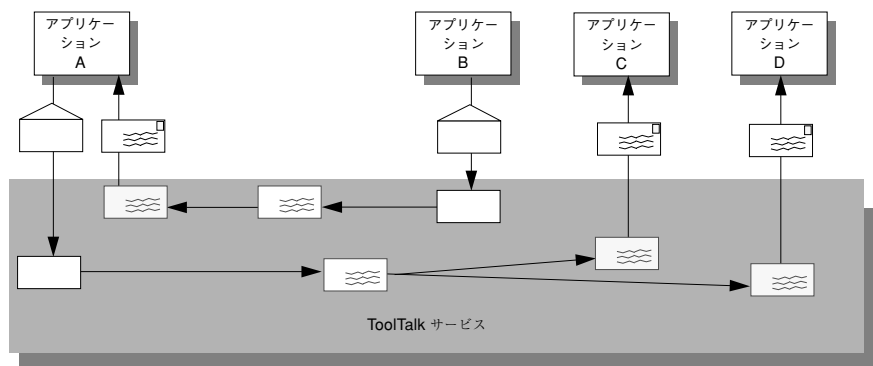


図 1-1 ToolTalk サービスを使ったアプリケーション

ToolTalk サービスが解決できる業務上の問題

この節では、ToolTalk サービスが解決する相互運用に関する問題について説明します。ToolTalk サービスは、アプリケーションが次のようなことを必要とする場合に使用するのに適切な技術です。

- ツール互換性
- 制御統合
- ごく一般的なサーバ(たとえばXサーバ)では所有しておらず、予想可能なリスナの集合がないネットワーク透過イベント
- 自動ツール起動機能
- 広範囲で使用可能な分散オブジェクトシステム
- 固定表示オブジェクト

もちろん、相互運用の問題に対して ToolTalk サービスを使用するのは適切でない場合もあります。しかし、アプリケーションが両方の問題(つまり、ToolTalk サービスが解決するようになっている相互運用に関する問題と ToolTalk サービスが解決するのではない問題)の解決を必要としている場合は、ToolTalk サービスを他の技術と組み合わせて使用できます。

ツール互換性

プラグ・アンド・プレイ機能を必要とする場合は、ToolTalk サービスを使用してください。プラグ・アンド・プレイという語は、ツールを同じプロトコルを提供する他のツールと交換可能であることを意味します。つまり、ToolTalk によって与えられるプロトコルをまねするツールをコンピューティング環境に配置(プラグ)し、プロトコルが示す関数を実行(プレイ)できます。ツールを変更することなく、お互いに特定の組み込み知識を持っていなくてもツールを併用できます。

制御統合

アプリケーションが制御統合を要求する場合、ToolTalk サービスを使用してください。制御統合という語は、ユーザの直接介入がなくても共通の目的に向かって一緒に動作するツールのグループを示します。ToolTalk サービスを使うと、簡単に柔

軟性のある機能により特定のツール・インスタンスか不特定のサービス・プロバイダに対して任意の要求を発行する制御統合が可能になります。

ネットワーク透過イベント

アプリケーションがネットワーク透過イベントの生成や受信を必要とする場合は、ToolTalk サービスを使用してください。従来のイベント機構 (シグナルやウィンドウ・システム・イベントなど) を使用するには、特別な環境を必要とします。たとえば、プロセスやウィンドウ ID を認識していることなどです。ToolTalk サービスにより、イベントが参照するファイルや、イベントを適用できるネットワーク上のプロセスのグループに関してイベントは自然に記述されます。ToolTalk サービスは、ネットワーク上のいたる所にある配信対象プロセスにイベント (通知と呼ぶ) を配信します。

自動ツール起動機能

アプリケーションがネットワーク透過な自動起動機能を必要とする場合は、ToolTalk サービスを使用してください。ToolTalk サービスは、メッセージがネットワークから送信されると、ツールを起動させるメッセージを記述させます。ToolTalk 自動起動機能の使用は簡単で、従来の `inetd(1)` 機能ほどホストに固有のものではありません。

分散オブジェクト・システム

さまざまなプラットフォームにまたがって使用可能である分散オブジェクト・システムでアプリケーションを作成する必要がある場合は、ToolTalk を使用してください。ToolTalk のオブジェクト・システムは、一般的な UNIX プラットフォームにあるアプリケーションで使用できます。次のアプリケーションでも使用できます。

- シングル・スレッドまたはマルチ・スレッドである
- コマンド行またはグラフィカル・ユーザ・インタフェースを持っている
- 独自のイベント・ループ、またはウィンドウ・システムのツールキットのイベント・ループを使用している

注・ ToolTalk のオブジェクト指向メッセージ・インタフェース用にコーディングされたプログラムは、ソースコードを変更をしなければ CORBA 準拠のシステムに移植できません。

固定表示オブジェクト

アプリケーションが UNIX ファイル・システムでオブジェクトを目立たないように配置する必要がある場合は、ToolTalk サービスを使用してください。

ToolTalk サービスが業務上の問題を解決する方法を示すシナリオ

この節にあるシナリオは、ToolTalk サービスを利用することによって、業務上の問題をどのように解決できるかを示しています。これらのシナリオで使用するメッセージ・プロトコルは架空のものです。

ToolTalk デスクトップ・サービス・メッセージ・セットの使用

ToolTalk デスクトップ・サービス・メッセージ・セットを使用することにより、アプリケーションは、ユーザの介入がなくても他のアプリケーションを統合およびコントロールできます。この節では、デスクトップ・サービス・メッセージ・セットの実行方法を示す2つのシナリオ (18ページの「スマート・デスクトップ」と20ページの「統合ツールセット」) について説明します。

スマート・デスクトップ

注・この節のシナリオは、ユーザの要求を翻訳するアプリケーション・レベルのプログラムで ToolTalk サービスを使用する方法を示すためのものです。共通デスクトップ環境プロダクトにより ToolTalk サービスにユーザの要求を翻訳させる方法を示すためのものではありません。

グラフィカル・ユーザ・インタフェース (GUI) のフロント・エンドに対するユーザの共通した要求は、データ・ファイルがアプリケーションに気づく (または「知っている」) ようにできることにあります。これを行うには、アプリケーション・レベルのプログラムがユーザの要求を翻訳する必要があります。このアプリケーション

ン・レベルのプログラム (スマート・デスクトップという) には、アップル社の Macintosh ファインダ、マイクロソフト社の Windows ファイル・マネージャ、共通デスクトップ環境のファイル・マネージャなどがあります。スマート・デスクトップの主な共通要件は、次のとおりです。

1. ファイルを取得する
2. アプリケーションを決定する
3. アプリケーションを起動する

ToolTalk サービスは、ツールのクラスが特定のデータ型を編集できるようにすることによって柔軟性が増します。次のシナリオでは、デスクトップ・サービス・メッセージ・セットをエンドユーザに対して透過的なスマート・デスクトップとして実行する方法を説明します。

1. ダイアンが [ファイルマネージャ] アイコンをダブルクリックします。
ファイル・マネージャが開き、ダイアンの現在のディレクトリ内のファイルを表示します。
2. ダイアンは、データ・ファイルのアイコンをダブルクリックします。
 - a. ファイル・マネージャは、アイコンで表現されているファイルの表示を要求します。また、表示メッセージ内のファイル・タイプを符号化します。
 - b. **ToolTalk** セッション・マネージャは、登録されたアプリケーション (この場合はアイコン・エディタ) に表示メッセージ内のパターンを照合して、ダイアンのデスクトップ上で実行中のアプリケーションのインスタンスを見つけます。

注 - ToolTalk セッション・マネージャがアプリケーションの実行中のインスタンスを見つけられない場合は、静的に定義した `pctype` をチェックし、メッセージ内のパターンに最も一致するアプリケーションを起動します。一致する `pctype` がないと、ファイル・マネージャに異常終了を返します。

 - c. アイコン・エディタは表示メッセージを受け取り、自分のアイコン化を解除し、自分を一番上に表示します。
3. ダイアンは、ファイルを手動で編集します。

統合ツールセット

デスクトップ・サービス・メッセージ・セットを実行できるもう1つの重要なアプリケーションは、統合ツールセットです。これらの環境は、垂直のアプリケーション (CASE ソフトウェア開発者用ツールセットなど) または水平の環境 (複合ドキュメントなど) に適用できます。その両方のアプリケーションの共通点は、総合的な解決法が1つの特定のタスクをうまく実行するように設計されている専門のアプリケーションから構築されたという前提があることです。統合ツールセット・アプリケーションには、テキスト・エディタ、描画パッケージ、ビデオ・ディスプレイ・ツール、オーディオ・ディスプレイ・ツール、コンパイラのフロント・エンド、デバッガなどがあります。統合ツールセット環境には、相互に呼び出して対話し、ユーザからの要求を処理するアプリケーションが必要です。たとえば、ビデオを表示するには、エディタがビデオ・ディスプレイ・プログラムを呼び出します。完成したコードのブロックを確認するには、エディタがコンパイラを呼び出します。

次のシナリオでは、デスクトップ・サービス・メッセージ・セットを統合ツールセットとして実行する方法を説明します。

1. ブルースはエディタを使用して複合ドキュメントを扱う作業をしています。
ソースコード・テキストの一部を変更することにします。
2. ブルースは、ソースコード・テキストをダブルクリックします。
 - a. ドキュメント・エディタは、まずソースコードが表すテキストを判別し、その後そのソースコードがどのファイルに入っているかを判別します。
 - b. ドキュメント・エディタは、ファイル名をメッセージのパラメータとして使用し、編集メッセージ要求を送信します。
 - c. **ToolTalk** セッション・マネージャは、登録されたアプリケーション (この場合はソースコード・エディタ) に編集メッセージ内のパターンを照合して、ブルースのデスクトップ上で実行中のアプリケーションのインスタンスを見つけます。

注・ToolTalk セッション・マネージャがアプリケーションの実行中のインスタンスを見つけられない場合は、静的に定義した **ptype** をチェックし、メッセージ内のパターンに最も一致するアプリケーションを起動します。一致する **ptype** がないと、ドキュメント・エディタ・アプリケーションに異常終了を返します。

- d. ソースコード・エディタが編集メッセージ要求を受け取ります。
- e. ソースコード・エディタは、ソースコード・ファイルが構成コントロールを受けていると判別し、ファイルをチェックするためのメッセージを送信します。
- f. そのメッセージをソースコード制御アプリケーションが受け取り、要求されたファイルの読み取り書き込み用コピーを作成します。その後、ファイル名をソースコード・エディタに戻します。
- g. ソースコード・エディタは、ソース・ファイルが入っているウィンドウを開きます。

3. ブルースは、ソースコード・テキストを編集します。

ToolTalk ドキュメント・メディア交換メッセージ・セットの使用

ToolTalk ドキュメント・メディア交換メッセージ・セットは、非常に柔軟性があり、強力です。この節では、次のような ToolTalk ドキュメント・メディア交換メッセージ・セットの3つの使用方法について説明します。

- マルチメディアのオーサリング・アプリケーションへの統合
- 既存のアプリケーションへのマルチメディア拡張機能の追加
- メディア変換機能の追加によるXのカット&ペースト機能の拡張

マルチメディア機能の統合

マルチメディア機能をアプリケーションに統合することによって、アプリケーションのエンド・ユーザは、さまざまなメディアの型をそれらのドキュメントに埋め込むことができます。

通常、メディア・オブジェクトを表すアイコンは、ドキュメントに埋め込まれます。埋め込まれたオブジェクトを選択すると、ToolTalk サービスは自動的に適切な外部メディア・アプリケーションを起動し、オブジェクトは次のシナリオで説明するように処理されます。

1. ダニエルがマルチメディア・オブジェクトが入っているドキュメントを開きます。

2. ウィンドウがさまざまなメディアの種類 (音声、画像、グラフィックなど) を表す複数のアイコンでドキュメントを表示します。
3. ダニエルは、**[音声]** アイコンをダブルクリックします。
音声アプリケーション (プレイヤーと呼ぶ) が起動され、録音済みの音声再生されます。)
4. 録音状態を編集するために、ダニエルはアイコンを **1** 回クリックして選択し、**3** 番目のマウス・ボタンを使用して **[編集]** メニューを表示します。
編集アプリケーションが起動され、ダニエルはメディア・オブジェクトを編集します。

既存のアプリケーションへのマルチメディア拡張機能の追加

ToolTalk ドキュメント・メディア交換メッセージ・セットによって、アプリケーションは他のマルチメディア・アプリケーションを使用して、その機能または性能を拡張することもできます。たとえば、次のシナリオで示すように、カレンダー・マネージャを拡張し、オーディオ・ツールを使って、音声ファイルをアポイントメントの覚え書きとして再生することもできます。

1. シェルビーは、自分のカレンダー・マネージャを開き、アポイントメントを設定します。
2. シェルビーが **[音声応答]** ボタンをクリックすると、オーディオ・ツールが起動します。
3. シェルビーは、たとえば「レポートを持ってくる」といったようなメッセージを記録します。

シェルビーがアポイントの覚え書きを実行すると、カレンダー・マネージャはオーディオ・ツールを起動し、シェルビーが録音した覚え書きを再生します。

X のカット&ペースト機能の拡張

ToolTalk ドキュメント・メディア変換メッセージ・セットは、拡張可能なオープン・エンドの変換機能をサポートできます。次のシナリオは、拡張可能なマルチメディアのカット&ペースト機能の動作を示します。

1. マリアがメディア型が異なる 2 つのドキュメントを開きます。
2. マリアがドキュメント **A** の一部分を選択し、標準の **X Window System** のカット機能を使用して、その部分をカットします。
3. マリアは、そのカットした部分をドキュメント **B** にペーストします。
 - a. ドキュメント **B** は、カットしたデータの転送についてドキュメント **A** と交渉します。
 - b. ドキュメント **A** が提供するデータのどの型もドキュメント **B** が認識しない場合、ドキュメント **B** はタグ付きメディア型を送信するようドキュメント **A** に要求します。ドキュメント **B** は、タグ付きメディア型を使用して、そのメディア型を理解可能なメディア型へ変換するように要求する **ToolTalk** メッセージを送ります。
 - c. 登録されている変換ユーティリティはその要求を受けて、変換後のバージョンのメディア型をドキュメント **B** へ返します。
 - d. 変換されたデータのドキュメント **B** へのペーストが実行されます。

アプリケーションの **ToolTalk** メッセージの使用 方法

アプリケーションは、**ToolTalk** メッセージを作成、送信、および受信することによって、他のアプリケーションと通信します。送信側は、メッセージを作成、書き込み、および送信します。**ToolTalk** サービスは受信側を判別し、そのメッセージを受信側に配信します。受信側はメッセージを検出してメッセージ内の情報をチェックし、メッセージを破棄するか、オペレーションを実行してその結果を応答します。

ToolTalk メッセージの送信

ToolTalk メッセージの構造は簡単で、アドレス、サブジェクト、および配信情報のフィールドを含みます。**ToolTalk** メッセージを送信するため、アプリケーションは

空のメッセージを取得し、メッセージ属性を書き込んだ後、メッセージを送信します。送信を行うアプリケーションは、次の情報を提供する必要があります。

- 通知用メッセージか要求用メッセージか(つまり、受信側がメッセージに回答する必要があるかどうか)
- 受信側と送信側は、どのような処理対象を共有しているか(たとえば、受信側は特定のユーザ・セッションで実行されているものか、または特定のファイルを処理対象としているものか)

メッセージ配信の範囲を限定するために、送信側アプリケーションはメッセージ内にさらに情報を指定できます。

メッセージ・パターン

ToolTalk の重要な特徴は、送信側が受信側について何も認識していなくてもかまわないことです。これは、メッセージを受信したいアプリケーション側が、受け取りたいメッセージの種類を明示的に示すからです。この情報は、メッセージ・パターンとして ToolTalk サービスに登録されます。

アプリケーションは、そのインストール時または実行時にメッセージ・パターンを ToolTalk サービスに指定できます。メッセージ・パターンは、メッセージと同じ方法で作成します。つまり、どちらの場合も同じ型の情報を使用します。アプリケーションは受信したいそれぞれの型のメッセージについて、空のメッセージ・パターンを取得し、属性を書き込み、そのパターンを ToolTalk サービスに登録します。これらのメッセージ・パターンは通常、アプリケーションが相互に使用することにしたメッセージ・プロトコルと一致します。アプリケーションは、個々の使用に応じてさらにパターンを追加できます。

ToolTalk サービスは、送信側アプリケーションからメッセージを受信すると、メッセージ内の情報と登録されているパターンとを比較します。一致するものが見つかり、ToolTalk サービスは、受信側アプリケーションすべてにメッセージのコピーを配信します。

アプリケーションは受信を希望するメッセージを記述したパターンごとに、メッセージを処理または監視できるかどうかを宣言しています。多数のアプリケーションがメッセージを監視できますが、メッセージを処理できるアプリケーションは 1 つだけです。これは、要求されたオペレーションが確実に 1 回だけ実行されるようにするためです。ToolTalk サービスが要求に対するハンドラを見つけだせなかった場合は、そのメッセージを送信側アプリケーションに返し、配信が失敗したことを示します。

ToolTalk メッセージの受信

ToolTalk サービスは、メッセージを特定のプロセスに配信する必要があると判断すると、メッセージのコピーを作成し、受信待ちメッセージがあることをそのプロセスに通知します。受信側アプリケーションが実行中でない場合、ToolTalk サービスは、アプリケーションの起動方法に関する指示 (インストール時にアプリケーションが指定したもの) を検索します。

プロセスは、メッセージを検索し、その内容をチェックします。

- オペレーションが実行されたという情報がメッセージに含まれている場合、プロセスはその情報を読み取ってから、メッセージを破棄します。
- オペレーションの実行要求がメッセージに含まれている場合、プロセスはそのオペレーションを実行し、元のメッセージへの応答という形でオペレーションの結果を返します。応答が送信されると、プロセスは元のメッセージを破棄します。

ToolTalk メッセージの配信

ToolTalk サービスは、メッセージを配布する 2 つの方式を提供します。プロセス指向メッセージ方式とオブジェクト指向メッセージ方式です。

プロセス指向メッセージ方式

プロセス指向メッセージとは、プロセスにアドレス指定されたメッセージです。プロセス指向メッセージを作成するアプリケーションは、指定されたプロセスか特定の型のプロセスのどちらかにそのメッセージをアドレス指定します。プロセス指向メッセージ方式は、既存のアプリケーションが他のアプリケーションと通信するのに便利な方法です。プロセス指向メッセージ方式をサポートするための修正は簡単で、通常は実行するのにもあまり時間はかかりません。

オブジェクト指向メッセージ方式

オブジェクト指向メッセージは、アプリケーションが管理するオブジェクトにアドレス指定されます。オブジェクト指向メッセージを作成するアプリケーションは、指定されたオブジェクトか特定の型のオブジェクトのどちらかにそのメッセージをアドレス指定します。オブジェクト指向メッセージ方式は、現在オブジェクトを

使用しているアプリケーション、またはオブジェクトを対象として設計されたアプリケーションに対して特に便利です。既存のアプリケーションがオブジェクト指向でない場合は、ToolTalk サービスを使うと、アプリケーションがアプリケーションのデータの一部をオブジェクトとして識別するので、これらのオブジェクトに関する通信ができるようになります。

注 - ToolTalk オブジェクト指向メッセージ・インタフェース用にコーディングされたプログラムは、ソースコードを変更しなければ CORBA 準拠のシステムに移植できません。

メッセージ配信の判別

メッセージを受信するグループを判別するために、メッセージの配信範囲を指定します。配信範囲を指定することにより、メッセージの配信を特定のセッションまたはファイルに限定します。

セッション

セッションとは、同じ ToolTalk メッセージ・サーバのインスタンスを持つプロセスのグループのことです。プロセスが ToolTalk サービスとの通信を開始すると、デフォルトのセッションが配置され(または、セッションが存在していない場合は作成され)、プロセスにはプロセス識別子 (*procid*) が割り当てられます。デフォルト・セッションは、環境変数(「プロセス・ツリー・セッション」と呼ぶ)、または X デイスプレイ(「X セッション」と呼ぶ)によって配置されます。

セッションの概念は、メッセージの配信において重要です。送信側は、あるセッションをメッセージの配信範囲にできます。ToolTalk サービスは、現在のセッションを参照するメッセージ・パターンを持つすべてのプロセスにメッセージを配信します。現在のセッション識別子 (*sessid*) でメッセージ・パターンを更新するときは、アプリケーションはそのセッションを結合します。

ファイル

このマニュアルでは、アプリケーションの処理対象であるデータを入れるコンテナのことをファイルと呼びます。

ファイルの概念は、メッセージの配信において重要です。送信側は、あるファイルをメッセージの配信範囲にできます。また、ToolTalk サービスは、プロセスのデフォ

ト・セッションに関係なく、そのファイルを参照するメッセージ・パターンを持つすべてのプロセスにメッセージを配信します。現在のファイルのパス名でメッセージ・パターンを更新するときは、アプリケーションはそのファイルを結合します。

また、1つのセッション内にあるファイルをメッセージの配信範囲とすることもできます。ToolTalk サービスは、そのメッセージ・パターン内にあるファイルとセッションの両方を参照するすべてのプロセスにメッセージを配信します。

注 - ファイルの配信範囲指定機能を使用できるのは、NFS™ ファイル・システムと UFS ファイル・システムだけです。

ToolTalk サービスを使用するためのアプリケーションの変更

ToolTalk サービスを使用できるようにアプリケーションを変更する前に、ToolTalk メッセージ・プロトコルを定義(または配置)する必要があります。メッセージ・プロトコルとは、アプリケーションが実行を認めたオペレーションについて記述した ToolTalk メッセージの集合です。メッセージ・プロトコル仕様の内容は、メッセージの設定およびアプリケーションがメッセージを受信したときの動作です。

ToolTalk サービスを使用するために、アプリケーションは ToolTalk アプリケーション・プログラミング・インタフェース (API) から ToolTalk 関数を呼び出します。ToolTalk API には、ToolTalk サービスに登録する機能、メッセージ・パターンを作成する機能、メッセージを送信する機能、メッセージを受信する機能、メッセージ情報をチェックする機能などがあります。ToolTalk サービスを使用できるようにアプリケーションを変更するには、まずプログラムに ToolTalk API のヘッダ・ファイルを組み込まなければなりません。また、次のことを実現するためにアプリケーションを変更する必要があります。

- ToolTalk サービスを初期化し、セッションに参加する
- メッセージ・パターンを ToolTalk サービスに登録する
- メッセージを送信および受信する
- メッセージ・パターンを登録解除し、ToolTalk セッションを終了する

ToolTalk メッセージの使用方法

注・この章のコーディング例は、CoEd という名前の ToolTalk デモ・プログラムの一部です。このプログラムのヘッダ・ファイルと .c ファイルに ToolTalk 関連のコードを組み込む方法を示すソースコードのリストについては、付録 B を参照してください。

ToolTalk 機能のアプリケーションへの通知

アプリケーションは、ToolTalk サービスとメッセージ・ツールキットが提供する相互運用機能を利用する前に、ToolTalk ライブラリとツールキットがある場所を認識しておく必要があります。

メッセージ・ツールキットの使用と ToolTalk コマンドの組み込み

ToolTalk サービスを使用するために、アプリケーションは ToolTalk API から ToolTalk 関数を呼び出します。メッセージ・ツールキットは、ToolTalk サービスへの登録、メッセージ・パターンの作成、メッセージの送信、メッセージの受信、およびメッセージ情報のチェックを行うための関数を提供します。ToolTalk サービスとツールキットを使用できるようにアプリケーションを変更するには、適切なヘッダ・ファイルをアプリケーションの .h ファイルに組み込まなければなりません。

```
#include <Tt/tt_c.h>      // ToolTalk Header File
#include <Tt/tttk.h>     // Messaging Toolkit Header file
```

アプリケーションは、その .c ファイルにある新規の ToolTalk コマンドについても認識しておく必要があります。この情報はアプリケーションの .h ファイルにも格納してください。

例 2-1 は、CoEditor.h ファイルにヘッダ・ファイル情報を組み込む方法を示しています。

例 2-1 メッセージ情報の組み込み

```
#ifndef CoEditor_h
#define CoEditor_h

#include <X11/Intrinsic.h>
#include <Tt/tt_c.h> // ToolTalk Header
#include <Tt/tttk.h> // Messaging Toolkit Header
```

ToolTalk ライブラリの使用

アプリケーションが ToolTalk ライブラリを使用するように、アプリケーションの makefile を変更する必要があります。このためには、次のように `-ltt` オプションを追加します。

```
LOCAL_LIBRARIES = -ltt $(XAWLIB) $(XMULIB) $(XTOOLLIB) $(XLIB)
```

コーディングを開始する前に

メッセージ・ツールキット機能をアプリケーションに組み込む前に、アプリケーションのツールが他のツールと一緒に動作する方法を決定する必要があります。考慮すべき基本的な内容は以下のとおりです。

1. これらのツールはどのように同時に動作するか
2. これらのツールはどのようなオペレーションを実行できるか
3. 他のツールにどのようなオペレーションを実行するように要求できるか
4. 他のツールを配信対象にできるこれらのツールはどのようなイベントを生成するか (これらのツールはどの型のメッセージを送信するか)
5. 他のツールによって生成されたイベントの中でこれらのツールの配信対象となるイベントはどれか (これらのツールはどの型のメッセージを受信するか)

これらの質問に的確に答えるには、イベントとオペレーションの間の違いと、ToolTalk サービスがお互いに関連のあるメッセージを処理する方法を理解する必要があります。

イベントとオペレーションとの違い

イベントは、何か起きたことを通知するものです。イベントは、簡単に言えばニュース速報です。送信側のプロセスは、他のプロセスがイベントが起きたことを聞くかどうかと、アクションがイベントの結果として起こるかどうかについて正式な予想を持っていません。プロセスが ToolTalk サービスを使用して、配信対象のプロセスにイベントが発生したことを知らせる場合、通知を送信します。送信側プロセスは応答を期待しないため、イベントは失敗できません。

オペレーションは、問い合わせまたはアクションです。要求側プロセスは、オペレーションが実行されるように問い合わせまたは要求を行います。要求側プロセスは結果が返されることを予想し、問い合わせまたはアクションのステータスを通知するように要求します。プロセスが ToolTalk サービスを使用して、他のツールにオペレーションを実行するように依頼する場合、要求を送信します。ToolTalk サービスは配信対象のプロセスに要求を配信し、送信側プロセスに要求のステータスを通知します。

通知の送信

アプリケーションが ToolTalk の通知を送信する場合、応答は受信せず、ツールがその通知に注意を払うかどうかについて通知を受けることもありません。通知をイベントの発生に応じて正確なレポートにすることが重要です。

たとえば、ツールがデスクトップ・サービス・メッセージの `Modified` を送信する場合、聞き手側のツールを指定の方法で反応させることができます。しかしツールは、他のツールがそのメッセージに反応するかどうか気にしたり、通知を受ける必要はありません。次のイベントをレポートするだけです。

```
THE_USER_HAS_MADE_CHANGES_TO_THIS.
```

要求の送信

アプリケーションが ToolTalk の要求を送信する場合、1つのツールが指示されたオペレーションを実行する、または問い合わせに答え、応答メッセージを返すことを期待します。たとえば、ツールがデスクトップ・サービス・メッセージの `Get_Modified` を送信する場合、メッセージが配信され、アクションが実行されたという通知が期待できます。ToolTalk サービスでは必ず、プロセスの受信によって応答が返されるか、送信側に要求の失敗が通知されます。

次の3つの方法で要求を識別できます。

1. 異常終了できるツールによって要求されるオペレーションを識別する

2. 他のツール用に実行できるオペレーションを識別する
3. 他のツールに実行させるオペレーションを識別する

これらのオペレーションを識別するための良い方法は、ツールが実行するまたは実行を完了したイベントとオペレーションの順序について概説するシナリオを開発することです。

シナリオの開発

シナリオは、ツールが実行および実行を完了したイベントとオペレーションの順序について概説しています。たとえば、次のシナリオは、ToolTalk デモ・プログラム CoEd が実行および実行を完了したイベントについて概説しています。

1. ファイル・マネージャのドキュメント・アイコンをダブルクリックします。

ファイルをエディタで開きます。エディタを実行中でない場合はシステムによって起動されます。

ドキュメントに対して別のツールが保留中のテキストに変更を行うと、その別のツールが変更したテキストを保存するか、最後に保存されたバージョンのドキュメントに戻るか尋ねられます。

2. テキストを挿入します。
3. ドキュメントを保存します。

別のツールがそのドキュメントに保留中の変更点を持っている場合、ドキュメントを変更するか尋ねられます。

4. エディタを終了します。

テキストに保存されていない変更がある場合、ファイルを終了する前にその変更を保存するか、破棄するか尋ねられます。

シナリオがいったん実行されると、基本的な質問に答えることができます。

ツールを同時に動作させる方法

- ファイル・マネージャは、CoEd が編集用のドキュメントを開くように要求します。
- CoEd の各インスタンスは、その他の配信対象のインスタンスにドキュメントの状態に対して行われる変更を通知します。

これらのツールはどのようなオペレーションを実行できるか

- CoEd の各インスタンスは、インスタンス自身とその状態に関する質問（「ステータスは？」など）に答えることができます。
- CoEd の各インスタンスには、次のようなオペレーションを実行する機能があります。
 - アイコン化とアイコン化解除
 - 重なり順の変更
 - ドキュメントの編集
 - ドキュメントの表示
 - 終了

他のツールにどのようなオペレーションを実行するように要求できるか

- ファイル・マネージャは、CoEd が編集用のドキュメントを開くように要求する必要があります。
- CoEd のインスタンスは、CoEd の別のインスタンスに対し、開いているドキュメントの変更を保存するように要求できます。
- CoEd のインスタンスは、CoEd の別のインスタンスに対し、開いているドキュメントの最後に保存されたバージョンに戻るように要求できます。

他のツールを配信対象にできるこれらのツールはどのようなイベントを生成するか

- ドキュメントを開いています。
- ドキュメントを変更しています。
- ドキュメントは最後に保存されたバージョンの内容に戻っています。
- ドキュメントを保存しています。
- CoEd のインスタンスは終了しています。

他のツールによって生成されたイベントの中でこれらのツールの配信対象となるイベントはどれか

- ドキュメントを開いています。

- ドキュメントを変更しています。
- ドキュメントは最後に保存されたバージョンの内容に戻っています。
- ドキュメントを保存しています。
- CoEd のインスタンスは終了しています。

通信用アプリケーションの準備

ToolTalk サービスは、アプリケーション統合用の完全な関数セットを提供します。ToolTalk メッセージ・ツールキットが提供する機能を使用して、アプリケーションは ToolTalk 準拠の他のアプリケーションと「通信」できます。この節では、同じプロトコルに基づく他の ToolTalk 対応アプリケーションと通信できるように、アプリケーションに組み込む必要がある ToolTalk 関数の追加方法について説明します。

ptype ファイルの作成

ToolTalk 型機構は、ToolTalk サービス・ルート・メッセージに役立つように設計されています。ツールが ptype を宣言すると、そこにリストされているメッセージ・パターンが自動的に登録されます。ToolTalk サービスは、受信するメッセージとこれらの登録されたパターンを一致させます。これらの静的メッセージ・パターンは、ツールが ToolTalk サービスとの通信を終了するまで有効です。

ToolTalk 型データベースは、本リリースに付いているツール用の ptype をすでにインストールしてあります。次のようにして、ToolTalk 型データベースからインストールされた ptype のリストを取り出すことができます。

```
% tt_type_comp -d user|system|network -P
```

ptype の名前は、ソース形式で出力されます。

他のツールすべて（つまり、本リリースには含まれていないツール）に対して、最初に ptype ファイルを作成してアプリケーションの ptype を定義し、ToolTalk 型コンパイラ tt_type_comp で、ptype をコンパイルする必要があります。ptype を定義するには、次の情報をファイルに入れる必要があります。

- プロセス型識別子 (ptid)
- オプションの開始文字列

ToolTalk サービスは、必要に応じてこのコマンドを実行し、プログラムを実行するプロセスを開始します。

■ シグニチャー

プログラムが受信する TT_PROCEDURE アドレス指定メッセージを記述しています。監視されるメッセージは、処理されるメッセージとは別に記述します。

ptype ファイルを作成するには、どのテキスト・エディタ (vi、emacs、dtpad など) でも使用できます。例 2-2 は、CoEd アプリケーション用の ptype ファイルから的一部分です。

例 2-2 CoEd ptype ファイル

```
ptype DT_CoEd {          /* Process type identifier */
  start "CoEd";          /* Start string */
  handle:                 /* Receiving process */
  /*
   * Display ISO_Latin_1
   */
  session      Display( in ISO_Latin_1 contents) => start opnum = 1;
                                                         /* Signature */

  /* NOTE: A signature is divided
   * into two parts by the => as follows:
   * Part 1 specifies how the message is to be matched;
   * Part 2 specifies what is to be taken when
   * a match occurs.
   */
}
```

ptype ファイルを作成したら、ptype をインストールします。このためには、ToolTalk 型コンパイラを実行します。コマンド行に次のように入力してください。

```
% tt_type_comp CoEd.ptype
```

CoEd.ptype は、CoEd ptype ファイル名です。

現在のセッションにおける既存の ptype に対するテスト

ToolTalk サービスは、指定の ptype がすでに現在のセッションに登録されているかどうか、テストする単純関数を提供します。

```
// Test for existing ptype registered in current session
tt_ptype_exists(const char *ptid)
```

ptid は登録用にテストするセッションの識別子です。

コンパイルされた **ptype** ファイルと現在実行中の **ttsession** のマージ

ToolTalk サービスは、コンパイルされた ToolTalk 型ファイルを現在実行中の `ttsession` にマージする関数を提供します。

```
// Merge new compiled ptypes into currently running ttsession
tt_session_types_load(current_session, compiled_types_file)
```

上記の `current_session` は、現在のデフォルトの ToolTalk セッションです。`compiled_types_file` はコンパイルされた ToolTalk 型ファイル名です。この関数は、新しい型を追加し、同じ名前の既存の型と置換します。その他の既存の型は変更されません。

各 ToolTalk 対応アプリケーションが実行する必要があるタスク

各 ToolTalk 対応アプリケーションが実行する必要があるタスクは多数あります。たとえば次のとおりです。

- ツールキットの初期化
- ToolTalk セッションへの参加とパターンの登録
- ToolTalk サービスをそのイベント・ループへ追加

この節では、これらのタスクを実行できるようにアプリケーションに組み込む必要がある ToolTalk のコーディング例を取り上げます。

注 - この節で使用されているコーディングの一部分は、`CoEd.c` ファイルから引用しています。このファイルには、アプリケーションが実行しなければならない一般コマンドが入っています。このコマンドは、特定のアプリケーションに固有のものではありません。詳細なソースコードについては、付録 B を参照してください。

ツールキットの初期化

アプリケーションはツールキットを初期化し、ToolTalk の初期セッションに登録する必要があります。そのためには、最初にプロセス識別子 (`procid`) を取得します。次のコーディングの一部分は、`procid` の取得方法とツールキットの初期化方法を示します。

```
// Obtain process identifier
int myTtFd;
```

```
// Initialize toolkit and create a ToolTalk communication endpoint
char *myProcID = ttdt_open( &myTtFd, ToolName, "SunSoft", "%I", 1 );
```



注意 - アプリケーションは、他の呼び出しが行われる前に必ず `ttdt_open` を呼び出さなければなりません。そうしない場合、エラーが発生します。

ToolTalk セッションへの参加とメッセージ・パターンの登録

アプリケーションはメッセージを受信する前に、ToolTalk セッションに参加し、一致するメッセージ・パターンを登録する必要があります。

```
// Join a ToolTalk session and register patterns and default callbacks
sessPats = ttdt_session_join( 0, 0, session_shell, this, 1 );
```

イベント・ループへの ToolTalk サービスの追加

アプリケーションは、ToolTalk サービスをそのイベント・ループに追加することも行わなければなりません。

```
// Process ToolTalk events for Xt Clients
XtAppAddInput( myContext, myTtFd, (XtPointer)XtInputReadMask,
               tk_Xt_input_handler, myProcID );
```

ToolTalk 対応エディタ・アプリケーションが実行する必要があるタスク

前述の 36 ページの「各 ToolTalk 対応アプリケーションが実行する必要があるタスク」で説明しているタスクの他に、ToolTalk 対応エディタ・アプリケーションは次のタスクも実行する必要があります。

- `ptype` の宣言
- 開始文字列メッセージの処理
- メディア・コールバックのパス
- メッセージの無視
- 要求完了時の応答

この節では、これらの追加タスクを実行できるようにエディタ・アプリケーションに組み込む必要がある ToolTalk のコーディング例を取り上げます。

注・この節で使用しているコーディングの一部分は、CoEditor.C ファイルから引用しています。このファイルには、エディタ・アプリケーション用の特定コマンドが入っています。詳細なソースコードについては、付録 B を参照してください。

メディア・ロード・パターン・コールバックの記述

ToolTalk 関数を組み込むためにエディタ・アプリケーションをコーディングする前に、実行しなければならない手順が 1 つあります。この手順は、メディア・ロード・パターン・コールバック・ルーチンを記述する必要があるということです。たとえば、次のようになります。

```
Tt_message
CoEditor::loadISOLatin1_(
    Tt_message      msg,
    void            *pWidget,
    Ttttk_op        op,
    Tt_status       diagnosis,
    unsigned char   *contents,
    int             len,
    char            *file,
    char            *docname
)
```

このコールバックは、実行時にメディア・ロード関数に渡されます。

ptype の宣言

型情報は (アプリケーションのインストール時に) 1 回だけしか指定されないの
で、アプリケーションを起動するたびにその ptype を宣言する必要があります。

メディア・ロード・パターン・コールバックのパス

前述したメディア・ロード・パターン・コールバック・ルーチンは実行時に渡されます。コールバックは、アプリケーションがセッションに参加するときに登録されます。ツールが要求を処理することになると、コールバック・メッセージが送信されます。ファイルが参加する、あるいはメッセージが無視される場合にも、コールバック・メッセージは送信されます。

```
// Join the session and register patterns and callbacks
sessPats = ttdt_session_join( 0, 0, session_shell, this, 1 );

// Accept responsibility to handle a request
_contractPats = ttdt_message_accept(msg, CoEditor::_contractCB_);
```

```

shell, this, 1, 1 );

// Optional task: Join a file (Can be called recursively)
if ( _filePats == 0 ) { _filePats = ttdt_file_join( _file, TT_SCOPE_NONE, 1,
CoEditor::_fileCB_, this );
}

// Fail a message
ttdt_message_fail( msg, TT_DESKTOP_ENODATA, 0, 1 );

```

要求完了時の応答

アプリケーションはオペレーションの要求を完了した後、送信側アプリケーションに
 応答しなければなりません。次のメッセージは、テキストの編集された内容を送
 信側に返します。

```

// Reply to media load pattern callback
// with edited contents of text
ttdt_media_load_reply( _contract, (unsigned char *)contents, len, 1 );

```

ToolTalk 対応エディタ・アプリケーションが実行でき るオプションのタスク

前述の 37 ページの「ToolTalk 対応エディタ・アプリケーションが実行する必要があ
 るタスク」で説明しているタスクの他に、エディタ・アプリケーションはその他
 のオプションのタスクも実行できます。オプションのタスクには、他のエディタと
 の調整を取るためにデスクトップ・ファイル・インタフェースを使用するものなど
 があります。この節では、これらのオプションのタスクを実行できるようにエディ
 タ・アプリケーションに組み込む必要がある ToolTalk のコーディング例をいくつか
 取り上げています。

注・この節で使用しているコーディングの一部分は、CoEditor.C ファイルから引
 用しています。このファイルには、エディタ・アプリケーション用の特定コマンド
 が入っています。詳細なソースコードについては、付録 B を参照してください。

変更、復元、または保存オペレーションの要求

次のコーディングの一部分は、保留中の変更があるかどうかファイルに尋ねている
 ものです。

```

// Does the file have any changes pending?
_modifiedByOther = ttdt_Get_Modified( _contract, _file, TT_BOTH,
10 * timeOutFactor );

```

次のコーディングの一部分は、ファイルを最後のバージョンの内容に復元します。

```
// Revert file to last version
status = ttdt_Revert(_contract, _file, TT_BOTH, 10 * timeOutFactor );
```

次のコーディングの一部分は、ファイルに対して保留中の変更を保存します。

```
// Save pending changes
status = ttdt_Save( _contract, _file, TT_BOTH, 10 * timeOutFactor );
```

ファイルの変更、復元、または保存時の通知

次のコーディングの一部分は、アプリケーションがファイルに対して保留中の変更を持っていることを配信対象のツールに通知します。

```
// File has been modified
ttdt_file_event( _contract, TTDT_MODIFIED, _filePats, 1 );
```

次のコーディングの一部分は、アプリケーションがファイルを最後に保存されたバージョンの内容に復元してあることを配信対象のツールに通知します。

```
// File has been reverted to last version
ttdt_file_event( _contract, TTDT_REVERTED, _filePats, 1 );
```

次のコーディングの一部分は、アプリケーションがファイルに対して保留中の変更を保存してあることを配信対象のツールに通知します。

```
// File has been saved
ttdt_file_event( _contract, TTDT_SAVED, _filePats, 1 );
```

ファイルの終了

次のコーディングの一部分は、ファイルに関する ToolTalk イベントの配信対象を登録解除し、パターンを破棄します。

```
// Unregister interest in ToolTalk events and destroy patterns
status = ttdt_file_quit( _filePats, 1 );
_filePats = 0;
```


TTSnoop の使用によるメッセージおよびパターンのデバッグ

TTSnoop は、カスタム構築の ToolTalk メッセージを作成して送信するためのツールです。ToolTalk メッセージのどれか、またはすべてを選択的に監視するツールとして TTSnoop を使用することもできます。

TTSnoop について

TTSnoop は便利な対話型ツールで、これにより ToolTalk の概念と API 呼び出しをデモンストレーションの実行と同様よく知ることができます。さらに、TTSnoop はアプリケーションの開発中には貴重なデバッグ・ツールです。

TTSnoop を使用して、1 つ以上のパターンと一致するメッセージを監視できます。一致したメッセージが表示されると、エントリと一致したパターン名も表示されます。

スクロール可能なリストにメッセージおよびパターンを追加、編集、または削除できます。TTSnoop により、複数のパターンとメッセージの定義を保存したり、ファイルから読み込むことができます。また、アプリケーション (たとえば、DeskSet™ ツール) のカテゴリに特有のパターンとメッセージを定義、保存、および再び読み込んだり、メッセージとパターンをユーザ定義名に関連付けることもできます。

TTSnoop はどこにあるか

TTSnoop プログラムは、ディレクトリ `/usr/dt/bin/ttsnoop` にあります。

TTSnoop の起動

プログラムを起動するには、コマンド行に次のコマンドを入力します。

```
ttsnoop [ -t ]
```

`-t` オプションは、特定のパターンまたはメッセージの作成に使用する ToolTalk API 関数を表示するようにします。表 3-1 では、TTSnoop の起動時に表示されるボタンについて説明しています。

表 3-1 TTSnoop ボタン

ボタン	説明
Start	このボタンは、メッセージの受信を起動する場合にクリックします。TTSnoop は、登録したパターンに一致する着信メッセージを表示します。
Stop	このボタンは、メッセージの受信を停止する場合にクリックします。
Clear	このボタンは、ウィンドウを閉じる場合をクリックします。
About TTSnoop	このボタンは、TTSnoop についての一般的なヘルプを見る場合をクリックします。
Display	このボタンは、チェックボックスのパネルを表示して、TTSnoop デイスプレイのサブウィンドウ上で特定の ToolTalk メッセージ・コンポーネントを強調表示する場合にクリックします。
Messages	このボタンは、ToolTalk メッセージの作成、格納、送信を可能にするパネルを表示する場合にクリックします。

表 3-1 TTSnoop ボタン 続く

ボタン	説明
Patterns	このボタンは、ToolTalk パターンの構成、登録を可能にするパネルを表示する場合にクリックします。
Send Messages	このボタンは、メッセージ・ディスプレイを使用して格納していたメッセージを送信する場合にクリックします。

注 - 各ボタンおよび設定についてのヘルプを見るには、そのボタンまたは設定の上にマウスを置いて、キーボードの F1 キーまたは Help キーを押します。

メッセージの作成および送信

メイン表示ウィンドウで [Messages] ボタンをクリックすると、表 3-2 に示す選択肢を含む表示パネルが表示されます。

表 3-2 [Messages] ボタン表示ウィンドウのオプション

ボタン	説明
Add Message	このボタンは、現在のメッセージ設定を格納する場合にクリックします。メッセージが格納されてしまうと、メイン表示ウィンドウ上の [Send Message] ボタンを使用して、これらのメッセージの再呼び出しおよび送信を実行できます。
Edit Contexts	このボタンは、送信メッセージ・コンテキストを追加、変更、または削除する場合にクリックします。表示される表示ウィンドウによって、メッセージと共に送信するコンテキストを編集できます。
Send Message	このボタンは、新規に作成したメッセージを送信する場合にクリックします。

パターンの作成および登録

メイン表示ウィンドウの [Patterns] ボタンをクリックすると、表示パネルが表示されます。

パターンを登録するには、[Apply] ボタンをクリックします。パターンが登録されると、デバッグ・ツールとして TTSnoop を使用して、他のアプリケーションがどのようなメッセージを送信しているのかを監視できます。

パターン内の受信メッセージ・コンテキストを追加、変更、または削除するには、[Edit Receive Contexts] ボタンをクリックします。表示されたウィンドウにより、パターンと共に登録するコンテキストを編集できます。

メッセージ・コンポーネントの表示

メイン表示ウィンドウ上の [Display] ボタンをクリックすると、チェックボックスの表示パネルが表示されます。

チェックボックスを選択して [Apply] ボタンをクリックすると、指定された ToolTalk メッセージ・コンポーネントは、別の選択を行ったり変更を適用したりするまで表示されます。

作成済みメッセージの送信

メイン表示ウィンドウ上の [Send Message] ボタンをクリックすると、メッセージ・ディスプレイを使用して作成し格納したメッセージの 1 つを送信できます。

メッセージの受信

メイン表示ウィンドウ上の [Start] ボタンをクリックすると、TTSnoop は登録したパターンに一致する着信メッセージを表示します。

メッセージ受信の停止

メイン表示ウィンドウ上の [Stop] ボタンをクリックすると、TTSnoop はメッセージの受信を停止します。

ToolTalk トレースの使い方

ToolTalk `ttsession` トレースは、ToolTalk パターンを `ttsession` にある各メッセージと一致させ配信する方法を示します。本リリースの ToolTalk トレースは次のことを行います。

- 単一クライアントの ToolTalk との対話を表示します。この機能により、実行者は 1 つのクライアントだけをトレースできます。
- `ttsession` トレースを、たとえばメッセージ型、送信者、または受信者ごとといったフィルタに通します。

ToolTalk トレースへのアクセス

本リリースで新規のコマンドである `tttrace` は、主に ToolTalk トレースへのアクセスに使用します。このコマンドは、用途やコマンド行インタフェースの点で `truss` コマンドに似ています。このコマンドにより、3 種類の ToolTalk トレースをコントロールできます。`tttrace` コマンドには、サーバ・モードとクライアント・モードの 2 つの基本モードがあります。

- サーバ・モードでは、`Session_Trace` 要求を送信することによって、指定されたセッションのトレースを指示します。
- クライアント・モードでは、`tttrace` は環境変数を設定し、コマンド行に指定された ToolTalk クライアント・コマンドを実行します。実行されたクライアントの環境変数は、クライアント・メッセージとクライアント API 呼び出しをトレースするかどうかとその方法を `libtt` に指示します。

注 - ttrace は、旧バージョンのサーバや、libtt の旧バージョンを使用するクライアントとの下位互換性はありません。ttrace は、旧バージョンのサーバを検出して診断すると、libtt の旧バージョンを使用するクライアント上で何も通知せずに異常終了します。

トレースのコントロール

libtt トレースのコントロール

libtt トレースの動作をコントロールする方法の 1 つは、環境変数 `$TT_TRACE_SCRIPT` を設定することです。

注 - libtt のトレースは、変数の値が正確ではない場合や一貫性がない場合は異常終了します。

クライアント側トレースのコントロール

`tt_trace_control` 呼び出しは、内部フラグを設定または消去して、すべてのクライアント側トレースをコントロールします。この呼び出しを使用して、コード内の問題の領域をトレースします。この呼び出しの形式は次のとおりです。

```
int tt_trace_control(int option)
```

オプションの値として 0 を指定するとトレースをオフにし、1 を指定するとトレースをオンにします。-1 を指定すると、トレースのオンとオフを切り替えます。トレースがオンの場合は、トレースの範囲を `TT_TRACE_SCRIPT` 変数かトレースファイルでコントロールします。この呼び出しは、トレース・フラグの以前の設定を返します。

ToolTalk セッション内のメッセージ・トラフィックのトレース

Session_Trace 要求は、ttsession がそれ自身を処理するために登録する ToolTalk 要求です。つまり、ttsession は Session_Trace 要求のハンドラです。この要求は、どの ToolTalk クライアントでも送信できます。お勧めできる方法ではありませんが、この要求を処理するために他の ToolTalk クライアントを登録できます。

注 - この方法ではトレースは行われません。

この要求の構文は次のとおりです

```
[file] Session_Trace( in boolean on,  
                    in boolean follow  
                    [in attribute toPrint  
                    |in state toTrace  
                    |in op toTrace  
                    |in handler_ptype toTrace  
                    |in sender_ptype toTrace] [...] );
```

Session_Trace 要求は、配信範囲指定されたセッションでのメッセージ・トレースをオンまたはオフにします。

- トレースがオンで、要求のファイル属性が設定されている場合、後続のトレース出力は属性が名前を付けたファイルに付け加えられます。
- トレースがオンで、ファイル属性が設定されていない場合、トレースは現在のトレースを続行します。

デフォルトの場合、デーモン・モードでは tttession を実行中のホストのコンソールが出力先になります。ジョブ・コントロール・モードでは、ttsession の標準エラーが出力先になります。表 4-1 は、この要求の必須およびオプションの引き数を示しています。

表 4-1 Session_Trace 引き数

引き数		説明
<code>boolean on</code>	必須	トレースをオンまたはオフにします。 <code>toTrace</code> 引き数がなく <code>on</code> が <code>true</code> の場合は、前のトレース設定が復元されます。
<code>boolean follow</code>	必須	起動したクライアントのクライアント側トレースをオンにします。
<code>attribute toPrint</code>	オプション	<p>トレースされた各メッセージの属性を出力します。有効な属性は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>none</code> - トレースされたメッセージの記述を 1 行だけ出力 (デフォルト) ■ <code>all</code> - トレースされたメッセージの属性全部を出力
<code>state toTrace</code>	オプション	<p>メッセージをトレースするための状態です。<code>tt_c.h</code> に定義されている <code>Tt_states</code> の他に有効な状態は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>edge</code> - 初期の状態 (<code>TT_SENT</code>) と最後の状態 (<code>TT_HANDLED</code>、<code>TT_FAILED</code>) を入力しているメッセージ ■ <code>deliver</code> - すべての状態の変更と、すべてのクライアントの配信 ■ <code>dispatch</code> - <code>deliver</code> 状態および一致するように考慮されたすべてのパターン (デフォルト)
<code>op toTrace</code>	オプション	<p>表示されたメッセージ属性の値として <code>toTrace</code> を持っているトレース・メッセージです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 要求には、<code>toTrace</code> 引き数を任意の数だけ含めることができる ■ <code>toTrace</code> にはシェルのワイルドカード文字も指定できる ■ 指定のメッセージ属性に対して <code>toTrace</code> 引き数がない場合、トレースからメッセージを除外する属性の値も存在しない
<code>sender_ptype toTrace</code>	オプション	
<code>handler_ptype toTrace</code>	オプション	

現在のセッション・トレースの動作は、この要求が失敗しない場合のみ変更されます。失敗した場合には、応答の `tt_message_status` は表 4-2 で説明されているエラーの 1 つに設定されます。

表 4-2 Session_Trace 要求が返すエラー・メッセージ

エラー	説明
TT_ERR_NO_MATCH	要求に対するハンドラを見つけることができません。
TT_ERR_APPFIRST + EACCES	ttsession がトレース・ファイルを開くまたは作成するためのアクセス権を持っていません。
TT_ERR_APPFIRST + EISDIR	トレース・ファイルがディレクトリです。
TT_ERR_APPFIRST + ENOSPC	ターゲット・ファイル・システムにトレース・ファイルの作成に十分なスペースがありません。
TT_ERR_APPFIRST + EEXIST	トレースがすでに別のファイルで行われています。ttsession は、応答のファイル属性を再設定して既存のトレース・ファイルの名前を付けます。別のファイルへのトレースを行うには、最初に現在のトレース・ファイルへのトレースをオフにします。

サーバによる ToolTalk 呼び出しとメッセージのトレース

ttrace 関数は、指定の ToolTalk セッションのためにサーバによりメッセージ・トラフィックをトレースするか、ToolTalk クライアント・トレースをオンにしてコマンドを実行します。セッションとコマンドの両方とも指定されない場合は、デフォルトのセッションがトレースされます。デフォルトでは、ttrace が終了するとトレースも終了します。この関数の構文は次のとおりです。

```
ttrace [-oFCa] [-o outfile ] -S session | command]
ttrace [-e script | -f scriptfile ] [-S session | command]
```

表 4-3 では、ttrace オプションについて説明します。

表 4-3 tttrace オプション

オプション	説明
-0	セッション内のメッセージ・トレースをオフにするか、メッセージ・トレースを行わないで (つまり呼び出しのトレースだけを行なって) 指定のコマンドを実行します。
-F	指定のコマンドによってフォークされた、または <code>ttsession</code> によりセッション内で続けて起動されたすべての子を追跡します。通常、指定のコマンドだけか <code>ttsession</code> インスタンスがトレースされます。 <code>-F</code> オプションが指定されている場合、プロセス ID がトレース出力の各行に表示され、どのプロセスが生成したかを示します。
-C	ToolTalk API へのクライアント呼び出しをトレースしないようにします。デフォルトでは呼び出しをトレースします。
-a	トレースされたメッセージのすべての属性、引き数、およびコンテキスト・スロットを出力します。デフォルトでは、トレース出力へメッセージを出力するには単一行だけを使用します。
-o <i>outfile</i>	トレース出力に使用されるファイルです。セッション・トレースの場合、出力先は <code>tttrace</code> の標準出力です。
-S <i>session</i>	トレースするセッションです。デフォルトではデフォルト・セッション、つまり <code>tt_open</code> が通知するセッションです。
<i>command</i>	起動し、トレースを行う ToolTalk クライアント・コマンドです。
-e <i>script</i>	<code>tttrace</code> 設定として使用されるスクリプトです。
-f <i>scriptfile</i>	<code>tttrace</code> 設定を読み取るファイルです。

`tttrace` は、`ttsession` へのメッセージ・インタフェースと `TT_TRACE_SCRIPT` 環境変数を使用する ToolTalk クライアントとして実行できるようになっています。この変数が設定されると、トレース・スクリプトに指定されているようにクライアント側トレースをオンにすることを `libtt` に通知します。値の最初の文字が「.」か「/」の場合、その値は使用するトレース・スクリプトが入っているファイルのパス名として認識されます。その他の文字の場合は、インライン・トレース・スクリプトとして認識されます。

トレースされた関数の形式

次は、トレースされた ToolTalk 関数の例です。

```
[pid] function_name (params) = return_value (Tt_status)
```

メッセージ要約形式

-a オプションは、次のように 1 行のメッセージ要約の後にメッセージ属性を出力します。

```
Tt_state Tt_paradigm Tt_class (Tt_disposition in Tt_scope) : status == Tt_status
```

状態変更形式

状態の変更は次の形式で示されます。

```
old_state => new_state.
```

メッセージ配信形式

配信は次のように示されます。

```
Tt_message => procid recipient_procid
```

表 4-4 は、ディスパッチ・トレース中に受信するメッセージについて説明しています。

表 4-4 デイスパッチ・トレース用の理由

メッセージ	説明
tt_message_send	送信するメッセージです。
tt_message_reject	メッセージが拒否されました。
tt_message_fail	メッセージが無視されました。
tt_message_reply	メッセージへの応答です。
tt_session_join	参加するセッションです。
tt_file_join	参加するファイルです。

表 4-4 デイスパッチ・トレース用の理由 続く

メッセージ	説明
<code>tt_message_reply</code>	クライアントが指定の関数を呼び出しました。
<code>tt_message_send_on_exit</code>	<code>ttsession</code> は、 <code>tt_close</code> を呼び出す前に切り離されたクライアントに対して <code>on_exit</code> メッセージをディスパッチしています。
<code>tt_message_accept</code>	<code>ttsession</code> は、 <code>ptype</code> が起動されている間にブロックされたメッセージをディスパッチしています。起動されたクライアントは、 <code>ptype</code> がブロック解除されることを示す <code>tt_message_accept</code> か <code>tt_message_reply</code> のどちらかを呼び出します。
<code>TT_ERR_PTYPE_START</code>	<code>ptype</code> インスタンスがメッセージの受信のために起動されましたが、起動コマンドは <code>ttsession</code> に接続される前に終了しました。
<code>TT_ERR_PROCID</code>	<code>ttsession</code> はこの要求に応じて動作中であったクライアントとの接続を切りました。
<code>ttsession -> ttsession</code>	別のセッションが、このセッションに対してメッセージの受信者を見つけるように求めています。
<code>ttsession <- ttsession</code>	別のセッションが、このセッションで発信したメッセージの更新 (たとえば失敗すること) を求めています。

形式の照合

ディスパッチがトレースされているとき、照合は次の形式のうちの 1 つで示されます。

```
Tt_message & Tt_pattern {
Tt_message & ptype ptid {
Tt_message & otype otid {
```

パターンまたはシグニチャーが次の形式で出力されます。

```
} == match_score; [/* mismatch_reason */]
```

例

この節では、`tttrace` 関数の使用例を取り上げます。

パターンの登録とパターンとの一致通知の送信

パターンを登録し、そのパターンに一致するという通知を送信するには、次のように入力します。

```
% tttrace -a myclientprogram
```

例 4-1 は、その結果を示します。

例 4-1 パターンの登録と通知の送信

```
tt_open() = 0x51708=="7.jOHMM X 129.144.153.55 0" (TT_OK)
tt_fd() = 11 (TT_OK)
tt_pattern_create() = 0x50318 (TT_OK)
tt_pattern_category_set(0x50318, TT_OBSERVE) = 0 (TT_OK)
tt_pattern_scope_add(0x50318, TT_SESSION) = 0 (TT_OK)
tt_pattern_op_add(0x50318, 0x2f308=="Hello World") = 0 (TT_OK)
tt_default_session() = 0x519e0=="X 129.144.153.55 0" (TT_OK)
tt_pattern_session_add(0x50318, 0x519e0=="X 129.144.153.55 0") = 0 (TT_OK)
tt_pattern_register(0x50318) = 0 (TT_OK)
tt_message_create() = 0x51af0 (TT_OK)
tt_message_class_set(0x51af0, TT_NOTICE) = 0 (TT_OK)
tt_message_address_set(0x51af0, TT_PROCEDURE) = 0 (TT_OK)
tt_message_scope_set(0x51af0, TT_SESSION) = 0 (TT_OK)
tt_message_op_set(0x51af0, 0x2f308=="Hello World") = 0 (TT_OK)
tt_message_send(0x51af0)      ...
    TT_CREATED => TT_SENT:
    TT_SENT TT_PROCEDURE TT_NOTICE (TT_DISCARD in TT_SESSION): 0 == TT_OK
    id:          0 7.jOHMM X 129.144.153.55 0
    op:          Hello World
    session:     X 129.144.153.55 0
    sender:     7.jOHMM X 129.144.153.55 0
= 0 (TT_OK)
tt_message_receive()      ...
    Tt_message => procid <7.jOHMM X 129.144.153.55 0>
    TT_SENT TT_PROCEDURE TT_NOTICE (TT_DISCARD in TT_SESSION): 0 == TT_OK
    id:          0 7.jOHMM X 129.144.153.55 0
    op:          Hello World
    session:     X 129.144.153.55 0
    sender:     7.jOHMM X 129.144.153.55 0
    pattern:    0:7.jOHMM X 129.144.153.55 0
= 0x51af0 (TT_OK)
```

ttsession によるメッセージ・フローの表示を見るには、次のように入力します。

```
% tttrace -a
```

ttsession による *myclientprogram* のメッセージ・フローの表示は、例 4-2 のとおりです。

例 4-2 tttsession によるトレースの表示

```
tt_message_reply:
    TT_SENT => TT_HANDLED:
    TT_HANDLED TT_PROCEDURE TT_REQUEST (TT_DISCARD in TT_SESSION): 0 == TT_OK
```

```

id:      0 2.jOHMM X 129.144.153.55 0
op:      Session_Trace
args:    TT_IN string: "> /tmp/traceAAAA002oL; version 1; states"[...]
session:X 129.144.153.55 0
sender:  2.jOHMM X 129.144.153.55 0
pattern:0:X 129.144.153.55 0
handler:0.jOHMM X 129.144.153.55 0
Tt_message => procid <2.jOHMM X 129.144.153.55 0>
tt_message_send:
TT_CREATED TT_PROCEDURE TT_NOTICE (TT_DISCARD in TT_SESSION): 0 == TT_OK
id:      0 7.jOHMM X 129.144.153.55 0
op:      Hello World
session:X 129.144.153.55 0
sender:  7.jOHMM X 129.144.153.55 0
TT_CREATED => TT_SENT:
TT_SENT TT_PROCEDURE TT_NOTICE (TT_DISCARD in TT_SESSION): 0 == TT_OK
id:      0 7.jOHMM X 129.144.153.55 0
op:      Hello World
session:X 129.144.153.55 0
sender:  7.j HMM X 129.144.153.55 0
Tt_message & Tt_pattern {
id:      0:7.jOHMM X 129.144.153.55 0
category:TT_OBSERVE
scopes:  TT_SESSION
sessions:X 129.144.153.55 0
ops:     Hello World
} == 3;
Tt_message => procid <7.jOHMM X 129.144.153.55 0>

```

注・トレースされた最初のメッセージは、ほとんどの場合 ttrace が送信した要求への ttsession による応答になります。

メッセージ・フローのトレース

特定の、デフォルトではないセッション内のメッセージ・フローをトレースするには、次のように入力します。

```
% ttrace -S "01 15303 1342177284 1 0 13691 129.144.153.55 2"
```

"01 15303 1342177284 1 0 13691 129.144.153.55 2" は、デフォルトではない特定のトレースされるセッションです。

ToolTalk トレースのための設定

ttrace スクリプトには、ToolTalk 呼び出しとメッセージをコントロールする設定があります。ttrace スクリプトは、セミコロンか復帰改行で区切られたコマンドから成ります。重複している値が設定に指定されると、最後の値が使用されます。

表 4-5 では、これらのコマンドについて説明します。

表 4-5 tttrace スクリプト・コマンド

コマンド	説明
version n	使用されている tttracefile コマンド構文のバージョンです。現在のバージョンは 1 です。
follow [off on]	トレースされたクライアントによってフォークされた、またはトレースされたセッションで続けて起動されたすべての子についても追跡するかどうかを設定します。デフォルトは off です。
[> >>] outfile	トレース出力に使用されるファイルです。デフォルトでは、トレースの出力先は標準エラーです。> と >> の通常のシェル解釈が適用されます。
functions [all none func...]	トレースする ToolTalk API 関数です。func には、シェル・ワイルドカード文字が入ります。デフォルトは all です。
attributes [all none]	none (デフォルト) は、トレース出力にメッセージを出力するときに単一行だけを使用することを意味します。all は、トレースされたメッセージの属性、引き数、コンテキスト・スロットすべてを出力することを意味します。

表 4-5 tttrace スクリプト・コマンド 続く

コマンド	説明
<pre>states [none edge deliver dispatch Tt_states]...</pre>	<p>メッセージをトレースするための状態です。tt_c.h に定義されている Tt_states の他に有効な状態は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ none - メッセージのトレースをすべて使用不可能にする ■ edge - 最初の状態 (TT_SENT) と最後の状態 (TT_HANDLED、TT_FAILED) を入力しているメッセージ ■ deliver - すべての状態の変更と、すべてのクライアントの配信 ■ dispatch - 配信および一致するように考慮されたすべてのパターン (デフォルト)
<pre>ops toTrace... sender_ptypes toTrace... handler_ptypes toTrace...</pre>	<p>表示されたメッセージ属性の値として <i>toTrace</i> を持っているトレース・メッセージです。<i>toTrace</i> にはシェル・ワイルドカード文字が入ります。指定のメッセージ属性に対して指定されている <i>toTrace</i> 引き数がない場合、その属性の値でメッセージをトレースから除外するものはありません。</p>

メッセージ・ツールキット

ToolTalk メッセージ・ツールキットは、ToolTalk アプリケーション・プログラミング・インタフェース (API) のハイレベルなインタフェースです。同じメッセージ・プロトコルに準拠する他のアプリケーションとの最適な相互運用のための基本的な ToolTalk のメッセージと機能をアプリケーションへ簡単に統合できるよう共通の定義と規約を提供します。

ToolTalk メッセージ・ツールキットのメッセージの大部分は、標準 ToolTalk メッセージ・セットに含まれています。メッセージ・ツールキットの関数は別々にコーディングする必要があるいくつかのタスクを透過的に処理します。たとえば、`tttdt_file_join()` 関数はパターンを登録し、指定された配信範囲にある指定のファイルへの Deleted、Reverted、Moved、および Saved 通知を監視します。コールバック・メッセージも呼び出します。

ToolTalk メッセージ・ツールキットの一般的な説明

相互運用は、別々に開発されたアプリケーションを同時に実行する場合には重要なテーマです。相互運用アプリケーションの開発者は、ツールキットのメッセージを一致させています。つまり、プロトコルは小型の十分に定義されたインタフェースを形成します。このインタフェースは、アプリケーションの自律性を最大限にします。

ToolTalk メッセージ・ツールキットは、アプリケーションの相互運用において重要であり、メッセージに対する完全なサポートを提供します。メッセージ・プロトコル仕様は、メッセージの設定とアプリケーションがメッセージを受信したときの動

作を含んでいます。これらのメッセージは、アプリケーションの機能を利用するために既存のアプリケーションに対して更新できます。共有している情報を送信、受信、および使用するために既存のアプリケーションにこれらのメッセージを簡単に追加できます。

ToolTalk メッセージ規約に準拠しているツールは、意味が異なる場合同じ ToolTalk 構文を使用しません。同じ意味の場合は異なる ToolTalk 構文を使用するのでツール間の通信に失敗することはありません。プロトコルが監視されている場合、互いに影響を及ぼすことなく連携するアプリケーションを変更したり置き換えたりすることもできます。

メッセージ・ツールキットのメッセージの大部分は、標準 ToolTalk メッセージ・セットに含まれています。標準 ToolTalk メッセージ・セットの詳細は、ToolTalk のマニュアルページを参照してください。表 A-1 に、この章で説明する関数の一覧を示します。これらの関数は、ToolTalk メッセージ・ツールキットの一部を構成します。

表 A-1 ToolTalk メッセージ・ツールキット関数

関数	説明
<code>ttdt_close()</code>	ToolTalk 通信終端を破棄します。
<code>ttdt_file_event()</code>	ファイルに関するイベントを通知します。
<code>ttdt_file_join()</code>	ファイルに関する ToolTalk イベントを監視できるように登録します。
<code>ttdt_file_notice()</code>	ファイルに関する標準 ToolTalk 通知を作成して送信します。
<code>ttdt_file_quit()</code>	ファイルに関する ToolTalk イベントにおける配信対象を登録解除します。
<code>ttdt_file_request()</code>	ファイルに関する標準 ToolTalk 要求を作成して送信します。
<code>ttdt_Get_Modified()</code>	ファイルに変更内容を保留している ToolTalk クライアントがないかどうかを問い合わせます。
<code>ttdt_message_accept()</code>	ToolTalk 要求の処理を引き受けます。

表 A-1 ToolTalk メッセージ・ツールキット関数 続く

関数	説明
<code>ttdt_open()</code>	ToolTalk 通信終端を作成します。
<code>ttdt_Revert()</code>	ファイルの内容を最後に保存した内容に戻すよう ToolTalk クライアントに要求します。
<code>ttdt_Save()</code>	ToolTalk クライアントがファイルを保存するよう要求します。
<code>ttdt_sender_imprint_on()</code>	ツールに指定の ToolTalk ツールの動作や特性をエミュレートさせます。
<code>ttdt_session_join()</code>	ToolTalk セッションに参加し、多くの標準デスクトップ・メッセージのパターンとデフォルトのコールバックを登録します。
<code>ttdt_session_quit()</code>	セッションに参加した時に登録したパターンとデフォルトのコールバックをすべて登録解除し、ToolTalk セッションを終了します。
<code>ttdt_subcontract_manage()</code>	未処理の要求を管理します。
<code>ttmedia_Deposit()</code>	ドキュメントにチェックポイントを設定するための Deposit 要求を送信します。
<code>ttmedia_load()</code>	ドキュメントの表示、編集、作成のための Media Exchange 要求を作成して送信します。
<code>ttmedia_load_reply()</code>	Display 要求、Edit 要求、または Compose 要求に返信します。
<code>ttmedia_ptype_declare()</code>	Media Exchange メディア・エディタの ptype を宣言します。
<code>tttk_block_while()</code>	返信などの待機中にプログラムをブロックします。
<code>tttk_message_abandon()</code>	メッセージを無視または拒否してから破棄します。

表 A-1 ToolTalk メッセージ・ツールキット関数 続く

関数	説明
<code>tttpk_message_create()</code>	メッセージ規約に準拠しているメッセージを作成します。
<code>tttpk_message_fail()</code>	メッセージを無視します。
<code>tttpk_message_receive()</code>	次の ToolTalk メッセージを取り出します。
<code>tttpk_message_reject()</code>	メッセージを拒否します。
<code>tttpk_op_string()</code>	オペレーションに対する文字列を返します。
<code>tttpk_string_op()</code>	文字列に対するオペレーションを返します。
<code>tttpk_Xt_input_handler()</code>	Xt クライアントのための ToolTalk イベントを処理します。

ToolTalk の規約

ツールキットのメッセージ規約の大部分は、標準 ToolTalk メッセージ・セットの記述で構成されます。この節では、特定の標準メッセージ・セットには関係ない規約について説明します。

表 A-2 メッセージ・ツールキット規約

フィールド	説明
fileAttrib	メッセージのファイル属性を設定できるかどうか、または設定する必要があるかどうかを示します。ToolTalk サービスには、各メッセージがファイルを参照し、名前が付いているファイルでは「配信対象である」クライアントにメッセージを配信できる機能（「ファイル配信範囲指定機能」と呼ぶ）があります。
opName	オペレーション名またはイベント名（「op」ともいう）です。重要なのは、ツールが異なっても意味が同じものに対しては同じ opName を使用することです。メッセージが標準のものではない場合、その opName は一意でなければなりません。たとえば、opName に Company_Product (Acme_HoarkTool_Hoark_My_Frammistat など) という接頭辞を付けます。
requiredArgs	メッセージに必ず含まれていなければならない引き数です。
optionalArgs	メッセージに含まれることもある特別引き数です。メッセージ内のオプション引き数は、指定の順序で必須の引き数の後ろに指定しなければなりません。
vtype argumentName	特定の引き数についての記述です。vtype は、メッセージ引き数に含まれるデータの種類を表す文字列で、プログラマが定義します。ToolTalk サービスは、送信メッセージ・インスタンスと登録されているメッセージ・パターンとを照合する場合にだけ vtype を使用します。各 vtype は、規約により一般的な単一の既知のデータ型に対応づけなければなりません。

アプリケーション記述時のメッセージ・ツールキットの使用

ツールキットを使用するには、ToolTalk メッセージ・ツールキットのヘッダ・ファイルを組み込みます。

```
#include <Tt/tttk.h>
```

ToolTalk メッセージ・ツールキット

この節では、ToolTalk メッセージ・ツールキットの一部である関数について説明します。

ttdt_close

```
Tt_status  ttdt_close( const char *   procid,
                      const char *   new_procid,
                      int              sendStopped );
```

ttdt_close() 関数は、ToolTalk 通信終端を破棄します。この関数は、ToolTalk 関数 tt_close() を呼び出します。

- procid の値が != 0 の場合、この関数は次を呼び出します。

```
tt_default_procid_set( procid )
```

- new_procid の値が != 0 の場合、この関数は次を呼び出します。

```
tt_default_procid_set( new_procid )
```

- sendStopped パラメータが設定されている場合、この関数は Stopped 通知を送信します。

ttdt_close() 関数は、ToolTalk 関数 tt_default_procid_set() および tt_close() が返すどのようなエラーも返す可能性があります。Sending 通知が失敗した場合、エラーは伝達されません。

ttdt_file_event

```
Tt_status  ttdt_file_event( Tt_message  context,
                             Tttk_op      event,
                             Tt_pattern *  patterns,
                             int           send );
```

ttdt_file_event() 関数は、ToolTalk サービスを介してファイルに関するイベントを通知します。この関数は、指定されたファイルに関係のあるイベントを知らせる ToolTalk メッセージを作成し、必要に応じて送信します。このファイル

は、patterns の作成時に ttdt_file_join() 関数に渡されたパス名で示されま
す。

- 表 A-3 では、event パラメータの値に対応する通知内容を示します。

表 A-3 event パラメータの通知内容

通知される event	通知内容
TTDT_MODIFIED	ttdt_file_join() 関数に渡された配信範囲を登録し、 Get_Modified 要求、Save 要求、Revert 要求を処理する配信対象ツ ールイベントを通知します。
TTDT_SAVED, TTDT_REVERTED	Get_Modified 要求、Save 要求、Revert 要求のハンドラ・パターンを 登録解除します。 send パラメータが設定された場合、配信範囲に応じて Saved 通知か Reverted 通知を送信します。

- send パラメータを設定すると、配信範囲に Modified 通知を送信します。
- context パラメータがゼロ以外の値のとき、このルーチンによって作成される
メッセージはスロット名が ENV_ で始まるすべてのコンテキストを継承します。

表 A-4 では、この関数が返す可能性のあるエラーの一覧を示します。

表 A-4 ttdt_file_event が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_DESKTOP_EINVAL	イベント通知が無効です。有効なイベント通知 は、TTDT_MODIFIED、TTD_TSAVED、TTDT_REVERTED で す。
TT_ERR_POINTER	patterns パラメータが NULL です。
TT_ERR_OVERFLOW	ToolTalk サービスが受信したメッセージの数が、正しく処 理可能なアクティブ・メッセージの最大数 (2000) に達しま した。
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスを使用できません。ToolTalk サービス は、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試み ます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールさ れていないか正しくインストールされていないかのどちら かを示します。

表 A-4 ttdt_file_event が返す可能性のあるエラー 続く

ttdt_file_join

```
Tt_message ( *Ttdt_file_cb)( Tt_message    msg,
                             Tttk_op      op,
                             char *      pathname,
                             void *      clientdata,
                             int         same_euid_egid,
                             int         same_procid );

Tt_pattern * ttdt_file_join( const char *  pathname,
                             Tt_scope    the_scope,
                             int         join,
                             Ttdt_file_cb cb,
                             void *      clientdata );
```

ttdt_file_join() 関数は、指定のファイルに関する ToolTalk イベントを監視できるように登録します。Deleted、Modified、Reverted、Moved、Saved の 5 種類の通知を監視するように配信範囲に登録します。

- コールバック・メッセージ引き数 Ttdt_file_cb は、表 A-5 に示すパラメータを取ります。

表 A-5 Ttdt_file_cb が取るパラメータ

パラメータ	説明
message	送信中のメッセージ
op	要求されているオペレーション
pathname	メッセージに関連付けられたファイルのパス名 このコピーは、ToolTalk 関数 tt_free() で解放できます。
clientdata	メッセージに含まれているクライアント・データ
same_euid_egid	送信側を識別するフラグ この値が true の場合は、送信側の信頼性は高いです。
same_procid	送信側を識別するフラグ この値が true の場合は、送信側の procid は受信側と同じです。

表 A-5 `Ttdt_file_cb` が取るパラメータ 続く

- `the_scope` パラメータの値がゼロ (つまり `TT_SCOPE_NONE`) の場合、ファイルの配信範囲はデフォルト (`TT_BOTH`) に設定されます。しかし、たとえば ToolTalk データベース・サーバ `rpc.ttdbserver` が `pathname` を所有するファイル・サーバにインストールされていない場合、ファイル配信範囲は `TT_FILE_IN_SESSION` に設定されます。

`ttdt_file_join()` 関数は `the_scope` の値および `pathname` のコピーとを `Tt_patterns` 型の戻り値に関連付けることで、`ttdt_file_quit()` 関数がパターンにアクセスすることを可能にします。呼び出し側は、`ttdt_file_join()` 呼び出しが返ると、`pathname` を変更または解放できます。

- `join` パラメータの値が `true` の場合、この関数は次を呼び出します。

```
tt_file_join( pathname )
```

この関数は、`NULL` で終了する `Tt_pattern` 型の配列を返します。この配列を破棄するには、`ttdt_file_quit()` 関数を使用します。エラーが返される場合、返された配列は `tt_ptr_error` で解読できるエラー・ポインタです。表 A-6 は、`ttdt_file_join()` 関数が返す可能性のあるエラーの一覧です。

表 A-6 `ttdt_file_join` が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
<code>TT_ERR_NOMP</code>	<code>ttsession</code> プロセスが存在しません。ToolTalk サービスは、 <code>ttsession</code> が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
<code>TT_ERR_DBAVAIL</code>	ToolTalk サービスが、このオペレーションに必要な ToolTalk データベースにアクセスできませんでした。
<code>TT_ERR_DBEXIST</code>	ToolTalk サービスが、指定された ToolTalk データベースを予期した場所で見つけることができませんでした。
<code>TT_ERR_PATH</code>	ToolTalk サービスが、指定されたファイル・パス名でディレクトリを読み取ることができませんでした。
<code>TT_ERR_NOMEM</code>	オペレーションを実行するのに十分なメモリがありません。

ttdt_file_notice

```
Tt_message ttdt_file_notice( Tt_message    context,  
                             Tttk_op      op,  
                             T_scope      scope,  
                             const char *  pathname,  
                             int          send_and_destroy );
```

ttdt_file_notice() 関数は、ファイルに関する標準 ToolTalk 通知を作成し、必要に応じて送信します。Created、Deleted、Moved、Reverted、Saved、Modified の 6 種類の標準ファイル通知を作成するには、この関数を使用します。

注 - ttdt_file_event() 関数は、ttdt_file_notice() 関数よりもハイレベルなインタフェースです。Moved 通知以外のすべての通知を送信する場合は、この関数を使用するようにしてください。

- context パラメータがゼロ以外の値のとき、このルーチンによって作成されるメッセージは、スロット名が ENV_ で始まるすべてのコンテキストを継承します。
- この関数は指定の op パラメータと scope パラメータで通知を作成し、そのファイル属性を pathname パラメータに設定します。
- send_and_destroy パラメータを設定すると、この関数はメッセージを送信してから破棄します。

send_and_destroy パラメータの値が false の場合、作成されたメッセージが返されます。send_and_destroy パラメータの値が true の場合、ゼロが返されます。

エラーが発生すると、エラー・ポインタが返されます。Tt_status を調べるには、tt_ptr_error を使用します。表 A-7 では、この関数が返す可能性のあるエラーについて説明します。

表 A-7 ttdt_file_notice が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスが存在しません。ToolTalk サービスは、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
TT_ERR_PROCID	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。
TT_ERR_NOMEM	オペレーションを実行するのに十分なメモリがありません。
TT_ERR_OVERFLOW	ToolTalk サービスが受信したメッセージの数が、正しく処理可能なアクティブ・メッセージの最大数 (2000) に達しました。
TT_ERR_DBAVAIL	ToolTalk サービスが、このオペレーションに必要な ToolTalk データベースにアクセスできませんでした。
TT_ERR_DBEXIST	ToolTalk サービスが、指定された ToolTalk データベースを予期した場所で見つけることができませんでした。
TT_DESKTOP_EINVAL	オペレーションが移動され、send_and_destroy パラメータの値が true です。
TT_ERR_POINTER	パス名が NULL か、ToolTalk エラー・ポインタでした。

ttdt_file_quit

```
Tt_status ttdt_file_quit( Tt_pattern * patterns,
                          int quit );
```

ttdt_file_quit() 関数は、ファイルの ToolTalk イベントにおける配信対象を登録解除します。この関数はパターンを破棄します。quit パラメータが設定されると、この関数は次を呼び出します。

```
tt_file_quit( pathname )
```

patterns の作成時に `ttdt_file_join()` 関数に渡したパス名における配信対象を登録解除する場合にこの関数を使用します。表 A-8 に、この関数が返す可能性のあるエラーの一覧を示します。

表 A-8 `ttdt_file_quit` が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
TT_ERR_PROCID	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。
TT_ERR_DBAVAIL	ToolTalk サービスが、このオペレーションに必要な ToolTalk データベースにアクセスできませんでした。
TT_ERR_DBEXIST	ToolTalk サービスが、指定された ToolTalk データベースを予期した場所で見つけることができませんでした。
TT_ERR_POINTER	パターンが NULL か、無効です。

ttdt_file_request

```
Tt_message      ttdt_file_request(  Tt_message      context,
                          Tttk_op                op,
                          Tt_scope                scope,
                          const char              pathname,
                          Ttdt_file_cb           cb,
                          void                    client_data,
                          int                      send_and_destroy );
```

`ttdt_file_request()` 関数は、標準デスクトップのファイルに対する配信範囲指定要求 (Get_Modified、Save、Revert など) を作成し、必要に応じて送信します。

注 - この関数は、`ttdt_Get_Modified()` 関数、`ttdt_Save()` 関数、`ttdt_Revert()` 関数よりもローレベルのインタフェースです。要求を作成してから送信し、その応答に応じてブロックします。

`ttddt_file_request()` 関数は、指定の `op` と `scope` で要求を作成し、そのファイル属性を `pathname` に設定します。デスクトップ・メッセージ規約に従い、`TT_IN` と `vtype File` のまだ設定されていない `Tt_mode` 型引き数が要求に追加されます。指定のオペレーションが `TTDT_GET_MODIFIED()` の場合は、`TT_OUT` と `vtype Boolean` のまだ設定されていない `Tt_mode` 型引き数も要求に追加されます。

`context` パラメータがゼロ以外の値のとき、このルーチンによって作成される要求は、スロット名が `ENV_` で始まるすべてのコンテキストを `context` から継承します。

この関数は、作成された要求のメッセージ・コールバックとして `cb` をインストールし、クライアント・データが確実にコールバックに渡されるようにします。`send` が `true` の場合、この関数はハンドルを返す前に要求を送信します。

この関数は正常終了時に、作成された `Tt_message` を返します。エラーが発生すると、エラー・ポインタが返されます。`Tt_status` を調べるには、`tt_ptr_error` を使用します。表 A-9 には、この関数が返す可能性のあるエラーの一覧を示します。

表 A-9 `ttddt_file_request` が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
<code>TT_ERR_NOMP</code>	<code>ttsession</code> プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、 <code>ttsession</code> が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
<code>TT_ERR_PROCID</code>	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。
<code>TT_ERR_NOMEM</code>	オペレーションを実行するのに十分なメモリがありません。
<code>TT_ERR_OVERFLOW</code>	ToolTalk サービスが受信したメッセージの数が、正しく処理可能なアクティブ・メッセージの最大数 (2000) に達しました。
<code>TT_ERR_DBAVAIL</code>	ToolTalk サービスが、このオペレーションに必要な ToolTalk データベースにアクセスできませんでした。
<code>TT_ERR_DBEXIST</code>	ToolTalk サービスが、指定された ToolTalk データベースを予期した場所で見つけることができませんでした。
<code>TT_ERR_POINTER</code>	パス名が <code>NULL</code> か、無効です。

表 A-9 ttdt_file_request が返す可能性のあるエラー 続く

ttdt_Get_Modified

```
int ttdt_Get_Modified( Tt_message context,
                      const char * pathname,
                      Tt_scope the_scope,
                      XtAppContext app2run,
                      int ms_timeout );
```

ttdt_Get_Modified() 関数は、ファイルに変更内容を保留している ToolTalk クライアントがないかどうか問い合わせます。この関数は、Get_Modified 要求を送信して応答を待ちます。

- context パラメータがゼロ以外の値のとき、このルーチンによって作成されるメッセージは、スロット名が ENV_ で始まるすべてのコンテキストを継承します。
- Get_Modified 要求は、固定表示を行うつもり of pathname に変更内容を保留している ToolTalk クライアントがないかどうか問い合わせます。
- the_scope パラメータは、Get_Modified 要求が送信される配信範囲を示します。このパラメータの値がゼロ (つまり TT_SCOPE_NONE) の場合、ファイルの配信範囲はデフォルト (TT_BOTH) に設定されます。しかし、たとえば ToolTalk データベース・サーバ rpc.ttdbserver が pathname を所有するファイル・サーバにインストールされていない場合、ファイル配信範囲は TT_FILE_IN_SESSION に設定されます。
- app2run パラメータと ms_timeout パラメータは、この関数が送信する Get_Modified 要求への応答をブロックするために、ttdt_block_while() 関数に渡されます。

Get_Modified 要求が指定のタイムアウト時間内に肯定応答を受信すると、ttdt_Get_Modified() 関数はゼロ以外を返します。そうでない場合は、ゼロを返します。この呼び出しはエラーを返しません。

ttdt_message_accept

```
Tt_pattern * ttdt_message_accept( Tt_message contract,
                                  Ttdt_contract_cb cb,
```



```

void *      clientdata,
Widget     shell,
int        accept,
int        sendStatus );

```

tttdt_message_accept() 関数は、ToolTalk 要求を処理することを受け入れます。ツールは、要求の処理 (つまり、無視したり拒否すること) を受け入れる場合にこの関数を呼び出します。

Tttdt_contract_cb 引き数は、表 A-10 に示すパラメータを取ります。

表 A-10 Tttdt_contract_cb 引き数が取るパラメータ

パラメータ	説明
Tt_message msg	送信状態にある要求 クライアント・プログラムは、この要求を無視または拒否する、あるいはメッセージに応答します。
Tttdt_op op	着信中の要求のオペレーション
Widget shell	tttdt_message_accept() 関数に渡すシェル
void *clientdata	tttdt_message_accept() 関数に渡すクライアント・データ
Tt_message contract	tttdt_message_accept() 関数に渡すコントラクト

メッセージ msg を正常に処理すると、コールバックはゼロを返します。そうでない場合は、Tt_message に送られた tt_error_pointer を返します。

メッセージ msg を処理しない場合、コールバックはメッセージを返し、TT_CALLBACK_CONTINUE ルーチンを呼び出しスタックに渡してメッセージを他のコールバックに提供するか、メッセージを tt_message_receive() 呼び出しに返します。

tttdt_message_accept() 関数は、ハンドラを宛先とする要求 (表 A-11 を参照してください) をデフォルト・セッションで登録します。

表 A-11 ttdt_message_accept が登録する要求

要求	処理方法
Get_Geometry, Set_Geometry	shell パラメータが NULL でない場合、これらの要求は透過的に処理されます。shell パラメータが NULL で、cb パラメータが NULL でない場合は、これらの要求はコールバック・ルーチンに渡されます。それ以外の場合は、これらの要求はエラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Get_Iconified, Set_Iconified	shell パラメータが NULL でない場合、これらの要求は透過的に処理されます。shell パラメータが NULL で、cb パラメータが NULL でない場合は、これらの要求はコールバック・ルーチンに渡されます。それ以外の場合は、これらの要求はエラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Get_Mapped, Set_Mapped	shell パラメータが NULL でない場合、これらの要求は透過的に処理されます。shell パラメータが NULL で、cb パラメータが NULL でない場合は、これらの要求はコールバック・ルーチンに渡されます。それ以外の場合は、これらの要求はエラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Raise	shell パラメータが NULL でない場合、この要求は透過的に処理されます。shell パラメータが NULL で、cb パラメータが NULL でない場合は、この要求はコールバック・ルーチンに渡されます。それ以外の場合は、この要求はエラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Lower	shell パラメータが NULL でない場合、この要求は透過的に処理されます。shell パラメータが NULL で、cb パラメータが NULL でない場合は、この要求はコールバック・ルーチンに渡されます。それ以外の場合は、この要求はエラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Get_XInfo, Set_XInfo	shell パラメータが NULL でない場合、これらの要求は透過的に処理されます。shell パラメータが NULL で、cb パラメータが NULL でない場合は、これらの要求はコールバック・ルーチンに渡されます。それ以外の場合は、これらの要求はエラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Pause	cb パラメータが NULL でない場合、この要求はコールバック・ルーチンに渡されます。cp パラメータが NULL の場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Resume	cb パラメータが NULL でない場合、この要求はコールバック・ルーチンに渡されます。cp パラメータが NULL の場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。

表 A-11 ttdt_message_accept が登録する要求 続く

要求	処理方法
Quit	cb パラメータが NULL でない場合、この要求はコールバック・ルーチンに渡されます。cp パラメータが NULL の場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Get_Status	cb パラメータが NULL でない場合、この要求はコールバック・ルーチンに渡されます。cp パラメータが NULL の場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。

contract 引き数が TT_WRN_START_MESSAGE メッセージ・ステータスの時、メッセージはツールを起動します。

注 - 起動したツールは、その ptype にすでにディスパッチされている他のメッセージを受信するため、コントラクトを受け入れる前に使用したい配信範囲に参加する必要があります。そうしないと、ツールは動作中にその ptype の宣言を解除しなければなりません。ツールがどの配信範囲にも参加していないと、ディスパッチされたメッセージによって ptype の他のインスタンスが起動されます。

```
tt_message_accept( contract )
```

sendStatus 引き数が true の場合、ttdt_open() 関数に渡されたパラメータ (存在する場合) を使用して、ttdt_message_accept() 関数は要求側に Status 通知を送信します。

この関数は、NULL で終了する Tt_pattern 型の配列を返します。この配列を破棄する場合は、ttdk_patterns_destroy() 関数を使用します。エラーが返される場合、返された配列は tt_ptr_error で解釈されるエラー・ポインタになります。表 A-12 は、ttdt_message_accept() 関数が返す可能性のあるエラーの一覧です。

表 A-12 ttdt_message_accept が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
TT_ERR_POINTER	渡されたポインタが、このオペレーションに適した型のオブジェクトを指していません。たとえば、文字列が必要なときにポインタは整数を指している場合などです。
TT_ERR_UNIMP	デフォルト・セッションの ttdt_message_accept() は、tt_message_accept() 関数をサポートしていないバージョン (1.0 または 1.0.1) です。

注 - contract 引き数のメッセージ・ステータスが TT_WRN_START_MESSAGE の場合、ツールの ptype に対して送信されるメッセージは、contract が拒否、応答、または無視されるまでブロックされます。

ttdt_open

```
char * ttdt_open( int *          ttfid,
                 const char *   toolname,
                 const char *   vendor,
                 const char *   version,
                 int             sendStarted );
```

ttdt_open() 関数は、ToolTalk 通信終端を作成します。この関数は、tt_open() 関数と tt_fd() 関数を呼び出します。ttdt_open() 関数は、toolname、vendor、version と作成された procid とを関連付けます。新しい procid のデフォルト・コンテキストを environ(5) から初期化します。sendStarted 引き数が設定された場合は、Started 通知を送信します。

ttdt_open() 関数は、tt_free() 関数で解放できる文字列に、作成された procid を返します。

この関数は、tt_open() 関数および tt_fd() 関数で発生したどのようなエラーも返すことができます。Started 通知が失敗した場合、エラーは伝達されません。

ttdt_Revert

```
Tt_status      ttdt_Revert(  Tt_message      context,
                          const char *      pathname,
                          Tt_scope        the_scope,
                          XtAppContext    app2run,
                          int              ms_timeout );
```

ttdt_Revert() 関数は、ファイル内容を元に戻すように ToolTalk クライアントに要求します。この関数は、Revert 要求を the_scope に送信し、応答を待ちます。Revert 要求は、pathname に保留中の変更を破棄するように、処理中である ToolTalk クライアントに求めます。

- context パラメータがゼロ以外の値のとき、このルーチンによって作成されるメッセージは、スロット名が ENV_ で始まるすべてのコンテキストを継承します。
- the_scope パラメータの値がゼロ (つまり TT_SCOPE_NONE) の場合、ファイルの配信範囲はデフォルト (TT_BOTH) に設定されます。しかし、たとえば ToolTalk データベース・サーバ rpc.ttdbserver が pathname を所有するファイル・サーバにインストールされていない場合、ファイル配信範囲は TT_FILE_IN_SESSION に設定されます。
- app2run パラメータと ms_timeout パラメータは、この関数が送信する Revert 要求への応答をブロックするために、tttk_block_while() 関数に渡されます。

要求が指定のタイムアウト時間内に肯定応答を受信すると、ttdt_Revert() 関数は TT_OK を返します。そうでない場合は、失敗した応答に対する tt_message_status の戻り値、または表 A-13 に示すエラーのいずれかを返します。

表 A-13 ttdt_Revert が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
TT_ERR_PROCID	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。

表 A-13 ttdt_Revert が返す可能性のあるエラー 続く

エラーの値	説明
TT_ERR_NOMEM	オペレーションを実行するのに十分なメモリがありません。
TT_ERR_OVERFLOW	ToolTalk サービスが受信したメッセージの数が、正しく処理可能なアクティブ・メッセージの最大数 (2000) に達しました。
TT_ERR_DBAVAIL	ToolTalk サービスが、このオペレーションに必要な ToolTalk データベースにアクセスできませんでした。
TT_ERR_DBEXIST	ToolTalk サービスが、指定された ToolTalk データベースを予期した場所で見つけることができませんでした。
TT_DESKTOP_ETIMEOUT	指定されたタイムアウト時間内に応答を受信しませんでした。
TT_DESKTOP_EPROTO	要求が無視されました。しかしハンドラは、特定のエラー・ステータスの代わりに失敗した応答に対する <code>tt_message_status</code> の戻り値を <code>TT_OK</code> に設定します。
TT_ERR_POINTER	パス名が <code>NULL</code> か、ToolTalk エラー・ポインタです。

ttdt_Save

```
Tt_status  ttdt_Save(  Tt_message  context,
                      const char *  pathname,
                      Tt_scope      the_scope,
                      XtAppContext  app2run,
                      int            ms_timeout );
```

`ttdt_Save()` 関数はファイルを保存するように ToolTalk クライアントに要求します。この関数は、Save 要求を `the_scope` に送信し、応答を待ちます。Save 要求は、`pathname` に保留中の変更を破棄するように、処理中である ToolTalk クライアントに求めます。

- `context` パラメータがゼロ以外の値のとき、このルーチンによって作成されるメッセージは、スロット名が `ENV_` で始まるすべてのコンテキストを継承します。

- `the_scope` パラメータの値がゼロ (つまり `TT_SCOPE_NONE`) の場合、ファイルの配信範囲はデフォルト (`TT_BOTH`) に設定されます。しかし、たとえば ToolTalk データベース・サーバ `rpc.ttdbserver` が `pathname` を所有するファイル・サーバにインストールされていない場合、ファイル配信範囲は `TT_FILE_IN_SESSION` に設定されます。

- `app2run` パラメータと `ms_timeout` パラメータは、この関数が送信する Save 要求への応答をブロックするために、`tttk_block_while()` 関数に渡されます。

要求が指定のタイムアウト時間内に肯定応答を受信すると、`tttdt_Save()` 関数は `TT_OK` を返します。そうでない場合は、失敗した応答に対する `tt_message_status` の戻り値、または表 A-14 に示すエラーのいずれかを返します。

表 A-14 `tttdt_Save` が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
<code>TT_ERR_NOMP</code>	<code>ttsession</code> プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、 <code>ttsession</code> が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか、正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
<code>TT_ERR_PROCID</code>	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。
<code>TT_ERR_NOMEM</code>	オペレーションを実行するのに十分なメモリがありません。
<code>TT_ERR_OVERFLOW</code>	ToolTalk サービスが受信したメッセージの数が、正しく処理可能なアクティブ・メッセージの最大数 (2000) に達しました。
<code>TT_ERR_DBAVAIL</code>	ToolTalk サービスが、このオペレーションに必要な ToolTalk データベースにアクセスできませんでした。
<code>TT_ERR_DBEXIST</code>	ToolTalk サービスが、指定された ToolTalk データベースを予期した場所で見つけることができませんでした。
<code>TT_DESKTOP_ETIMEOUT</code>	指定されたタイムアウト時間内に応答を受信しませんでした。

表 A-14 ttdt_Save が返す可能性のあるエラー 続く

エラーの値	説明
TT_DESKTOP_EPROTO	要求が無視されました。しかし、ハンドラは、特定のエラー・ステータスの代わりに失敗した応答に対する tt_message_status の戻り値を TT_OK に設定します。
TT_ERR_POINTER	パス名が NULL か、ToolTalk エラー・ポインタです。

ttdt_sender_imprint_on

```
Tt_status ttdt_sender_imprint_on(    const char *   handler,
                                     Tt_message      contract,
                                     char **          display,
                                     int *           width,
                                     int *           height,
                                     int *           xoffset,
                                     int *           yoffset,
                                     XtAppContext    app2run,
                                     int             ms_timeout);
```

ttdt_sender_imprint_on() 関数を呼び出すと、呼び出し側ツール (以下、ツール B とします) で別のツール (以下ツール A とします) の動作と特定の特性が採用されます。ツール B は、ツール A の X11 ディスプレイ、ロケール、現在の作業ディレクトリを採用します。さらに、自身を正しい位置に置くためにツール A の X11 ジオメトリを取得します。

display パラメータが NULL の場合、環境変数 \$DISPLAY はツール A のディスプレイに設定されます。display パラメータが NULL でない場合、ツール A のディスプレイがこのパラメータに返されます。戻り値は、ToolTalk の tt_free() 関数で解放できる文字列です。

この関数は、Get_Geometry 要求をツール A に送信します。ツール A がジオメトリ・パラメータに対して値を返さない場合は、次のようになります。

- width パラメータに対して値が返されない場合、-1 を設定します。
- height パラメータに対して値が返されない場合、-1 を設定します。
- xoffset パラメータに対して値が返されない場合、INT_MAX を設定します。
- yoffset パラメータに対して値が返されない場合、INT_MAX を設定します。

ttdt_sender_imprint_on() 関数の width パラメータ、height パラメータ、xoffset パラメータ、および yoffset パラメータすべてに NULL を設定すると、Get_Geometry 要求はツール A に送信されません。

app2run パラメータと ms_timeout パラメータは、この関数が送信する Get_Geometry 要求への応答をブロックするために、tttk_block_while() 関数に渡されます。

表 A-15 は、この関数が返す可能性のあるエラーの一覧です。

表 A-15 ttdt_sender_imprint_on が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_DESKTOP_ETIMEDOUT	指定されたタイムアウト時間内に送信された要求の一部が完了しませんでした。
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか、正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
TT_ERR_PROCID	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。
TT_ERR_NOMEM	オペレーションを実行するのに十分なメモリがありません。
TT_ERR_OVERFLOW	ToolTalk サービスが受信したメッセージの数が、正しく処理可能なアクティブ・メッセージの最大数 (2000) に達しました。

ttdt_session_join

```
Tt_message ( *Ttdt_contract_cb) ( Tt_message      msg,
void *      clientdata
Tt_message  contract );
Tt_pattern * ttdt_session_join ( const char *    sessid,
Ttdt_session_cb cb,
Widget        shell,
void *        clientdata,
int           join);
```

ttdt_session_join() 関数は、「デスクトップの良き市民」として ToolTalk セッションに参加します。つまり、セッション `sessid` への参加時に多くの標準デスクトップ・メッセージ・インタフェースのパターンとデフォルト・コールバックを登録します。表 A-16 は、この関数が現在登録しているメッセージ・インタフェースの一覧です。

表 A-16 ttdt_session_join が登録している標準メッセージ

要求	処理方法
Get_Environment, Set_Environment	これらのメッセージは透過的に処理されます。
Get_Locale, Set_Locale	これらのメッセージは透過的に処理されます。
Get_Situation, Set_Situation	これらのメッセージは透過的に処理されます。
Signal	このメッセージは透過的に処理されます。
Get_Sysinfo	このメッセージは透過的に処理されます。
Get_Geometry, Set_Geometry	shell パラメータの値が NULL でなく、シェルが実体化された <i>mappedWhenManaged applicationShellWidget</i> の場合は、これらのメッセージは透過的に処理されます。シェルが <i>mappedWhenManaged applicationShellWidget</i> でない場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Get_Iconified, Get_Iconified	shell パラメータの値が NULL でなく、シェルが実体化された <i>mappedWhenManaged applicationShellWidget</i> の場合は、これらのメッセージは透過的に処理されます。シェルが <i>mappedWhenManaged applicationShellWidget</i> でない場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Get_Mapped, Set_Mapped	shell パラメータの値が NULL でなく、シェルが実体化された <i>mappedWhenManaged applicationShellWidget</i> の場合は、これらのメッセージは透過的に処理されます。シェルが <i>mappedWhenManaged applicationShellWidget</i> でない場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。

表 A-16 ttdt_session_join が登録している標準メッセージ 続く

要求	処理方法
Raise	shell パラメータの値が NULL でなく、シェルが実体化された <i>mappedWhenManaged applicationShellWidget</i> の場合は、これらのメッセージは透過的に処理されます。シェルが <i>mappedWhenManaged applicationShellWidget</i> でない場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Lower	shell パラメータの値が NULL でなく、シェルが実体化された <i>mappedWhenManaged applicationShellWidget</i> の場合は、これらのメッセージは透過的に処理されます。シェルが <i>mappedWhenManaged applicationShellWidget</i> でない場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Get_XInfo	shell パラメータの値が NULL でない場合、これらのメッセージは透過的に処理されます。shell パラメータの値が NULL の場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Set_XInfo	shell パラメータの値が NULL でなく、シェルが実体化された <i>mappedWhenManaged applicationShellWidget</i> の場合は、これらのメッセージは透過的に処理されます。シェルが <i>mappedWhenManaged applicationShellWidget</i> でない場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Pause	cb パラメータが NULL でない場合は、このメッセージはコールバックに渡されます。cb パラメータが NULL の場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Resume	cb パラメータが NULL でない場合は、このメッセージはコールバックに渡されます。cb パラメータが NULL の場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Quit	cb パラメータが NULL でない場合は、このメッセージはコールバックに渡されます。cb パラメータが NULL の場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Get_Status	cb パラメータが NULL でない場合は、このメッセージはコールバックに渡されます。cb パラメータが NULL の場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。
Do_Command	cb パラメータが NULL でない場合は、このメッセージはコールバックに渡されます。cb パラメータが NULL の場合は、エラー TT_DESKTOP_ENOTSUP とともに異常終了します。

sessid パラメータが NULL の場合は、デフォルト・セッションに参加します。

join パラメータが設定されている場合は、指定のセッションに参加します。

Ttdt_contract_cb メッセージは、表 A-17 に示すパラメータを取ります。コールバックはメッセージを処理しない場合は、メッセージを返します。メッセージを処理する場合は、ゼロあるいは Tt_message に送られたエラー・ポインタを返します。

表 A-17 Ttdt_session_cb が取るパラメータ

パラメータ	説明
Tt_message msg	送信状態にある要求。クライアント・プログラムは、この要求を無視または拒否するか、メッセージに回答します。 注 - 処理後にメッセージ msg を破棄してください。
void *clientdata	ttdt_session_join() または ttdt_message_accept() 関数のどちらかに渡されるクライアント・データ
Tt_messagecontract	ttdt_message_accept() 関数に渡されるコントラクト。コールバックが ttdt_session_join() 関数によってインストールされると、contract パラメータの値は必ずゼロになります。

ttdt_session_join() 関数は、NULL で終了する Tt_pattern 型の配列を返します。この配列は、ttdt_session_quit() 関数に渡され破棄できます。エラーが発生すると、返された配列はエラー・ポインタになります。Tt_status を調べるには、tt_ptr_error を使用します。表 A-18 は、返される可能性のあるエラーの一覧です。

表 A-18 ttdt_session_join が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか、正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
TT_ERR_PROCID	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。

表 A-18 ttdt_session_join が返す可能性のあるエラー 続く

エラーの値	説明
TT_ERR_SESSION	旧式、または無効な ToolTalk セッションが指定されました。
TT_ERR_POINTER	渡されたポインタが、このオペレーションに適した型のオブジェクトを指していません。たとえば、文字列が必要なときにポインタは整数を指している場合などです。
TT_ERR_NOMEM	オペレーションを実行するのに十分なメモリがありません。

ttdt_session_quit

```
Tt_status ttdt_session_quit( const char * sessid,
                             Tt_pattern * sess_pats,
                             int quit );
```

ttdt_session_quit() 関数は、「デスクトップの良き市民」として ToolTalk セッションを終了します。つまり、セッションへの参加時に登録したすべてのパターンとデフォルト・コールバックを登録解除します。

この関数は、sess_pats で指定されたすべてのパターンを破棄します。quit パラメータが設定されると、セッション sessid を終了します。sessid パラメータが NULL の場合は、デフォルト・セッションを終了します。

表 A-19 は、この関数が返す可能性のあるエラーの一覧です。

表 A-19 ttdt_session_quit が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか、正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
TT_ERR_PROCID	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。

表 A-19 ttdt_session_quit が返す可能性のあるエラー 続く

エラーの値	説明
TT_ERR_SESSION	旧式、または無効な ToolTalk セッションが指定されました。
TT_ERR_POINTER	渡されたポインタが、このオペレーションに適した型のオブジェクトを指していません。たとえば、文字列が必要なときにポインタは整数を指している場合などです。

ttdt_subcontract_manage

```
Tt_pattern *ttdt_subcontract_manage( Tt_message contract,
                                       Ttdt_contract_cb cb,
                                       Widget shell,
                                       void * clientdata);
```

ttdt_subcontract_manage() 関数は、未処理の要求を管理します。この関数が呼び出されると、要求側ツールは要求を処理しているツールとの間で行われるデスクトップ上の標準的な対話を管理できます。この関数は、TT_HANDLER を宛先とする Get_Geometry 要求と Get_XInfo 要求、および Status 通知のための登録をデフォルト・セッションで行います。

shell パラメータが NULL の場合は、要求または通知が cb パラメータに渡されます。shell パラメータが NULL でない場合は、要求は透過的に処理されます。

ttdt_subcontract_manage() 関数は、NULL で終了する Tt_pattern 型の配列を返します。この配列は、ttdt_session_quit() 関数に渡して破棄できます。エラーが発生すると、返された配列はエラー・ポインタになります。Tt_status を調べるには、tt_ptr_error を使用します。表 A-20 は、返される可能性のあるエラーの一覧です。

表 A-20 ttdt_subcontract_manage が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_ERR_NOMEM	オペレーションを実行するのに十分なメモリがありません。
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか、正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
TT_ERR_PROCID	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。
TT_ERR_POINTER	subcontract パラメータが有効な Tt_message ではありません。
TT_ERR_EINVAL	shell パラメータと cb パラメータの両方が NULL です。

ttmedia_Deposit

```
Tt_status  ttmedia_Deposit(  Tt_message      load_contract,
                             const char *          buffer_id,
                             const char *          media_type,
                             const unsigned char * new_contents,
                             int                   new_len,
                             const char *          pathname,
                             XtAppContext         app2run,
                             int                   ms_timeout );
```

ttmedia_Deposit 関数は Deposit 要求を送信して、Edit、Compose、Open などの Media Exchange load_contract 要求の変換対象であったドキュメントにチェックポイントを設定します。

この関数は Deposit 要求を作成して送信し、その要求が成功したか失敗したかを返します。

- load_contract は、このエディタがドキュメントを読み込むことを要求します。
- buffer_id は、ドキュメントが Open 要求により読み込まれた場合に、このエディタが作成したバッファの ID です。
- media_type は、送信された要求の contents 引き数の vtype です。

- `new_contents` と `new_len` は、`contents` 引き数の値です。

要求が送信されると、`app2run` と `ms_timeout` は、応答を待つために、`tttk_block_while()` 関数に渡されます。

表 A-21 `ttmedia_Deposit` が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
<code>TT_ERR_NOMP</code>	<code>ttsession</code> プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、 <code>ttsession</code> が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか、正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
<code>TT_ERR_PROCID</code>	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。
<code>TT_ERR_NOMEM</code>	オペレーションを実行するのに十分なメモリがありません。
<code>TT_ERR_OVERFLOW</code>	ToolTalk サービスが受信したメッセージの数が、正しく処理可能なアクティブ・メッセージの最大数 (2000) に達しました。
<code>TT_ERR_DBAVAIL</code>	ToolTalk サービスが、このオペレーションに必要な ToolTalk データベースにアクセスできませんでした。
<code>TT_ERR_DBEXIST</code>	ToolTalk サービスが、指定された ToolTalk データベースを予期した場所で見つけることができませんでした。
<code>TT_DESKTOP_ETIMEOUT</code>	指定されたタイムアウト時間内に応答を受信しませんでした。
<code>TT_ERR_POINTER</code>	パス名が NULL、または ToolTalk エラー・ポインタです。

ttmedia_load

```
Tt_message (*Ttmedia_load_msg_cb) ( Tt_message      msg,
                                     void *          clientdata,
                                     Tttk_op         op,
                                     unsigned char *  contents,
                                     int              len,
                                     char *          file );
```



```

Tt_message ttmedia_load(  Tt_message      context,
                          Ttmedia_load_msg_cb cb,
                          void *          clientdata,
                          Tttk_op        op,
                          const char *    media_type,
                          const unsigned char* contents,
                          int             len,
                          const char *    file,
                          const char *    docname,
                          int             send );

```

ttmedia_load() 関数は、ドキュメントの表示、編集、作成を行う Media Exchange 要求を作成し、必要に応じて送信します。この関数は、Display、Edit、Compose のいずれかの要求を作成して送信します。

注 - 要求のハンドラとの標準的な対話を管理するには、このメッセージで作成した要求の送信後すぐに ttdt_subcontract_manage() 関数を使用してください。

context 引き数の値がゼロ以外るとき、このルーチンによって作成されるメッセージは、スロット名が ENV_ で始まるすべてのコンテキストを継承します。

clientdata 引き数は、応答を受信する場合、またはドキュメントの中間のバージョンが Deposit 要求によってチェックポイントを設定される場合に cb 引き数に渡されます。

op 引き数は、TTME_DISPLAY、TTME_EDIT、TTME_COMPOSE のいずれかでなければなりません。

media_type 引き数は、ドキュメントのデータ形式に名前を付けます。通常、この引き数により、要求を処理するためにどのアプリケーションを選択するか決定します。

contents 引き数と len 引き数はドキュメントを指定します。これら両方の引き数の値がゼロで、file 引き数の値がゼロでない場合、ドキュメントは指定のファイルに格納されていると想定されます。

docname 引き数が NULL でないとき、その値はドキュメントのタイトルとして使用されます。

send 引き数が true のとき、メッセージは返される前に送信されます。

表 A-22 は、Ttmedia_load_msg_cb メッセージが取るパラメータの一覧です。

表 A-22 Ttmedia_load_msg_cb が取るパラメータ

パラメータ	説明
Tt_message msg	<p>要求に対する応答、または読み込み要求の tt_message_id を指定する messageID 引き数が指定された Deposit 要求</p> <p>このパラメータの値が Deposit 要求である場合、クライアント・プログラムは要求に応答するか、無視しなければなりません。</p> <hr/> <p>注 - メッセージ msg は処理後に破棄してください。</p>
Tttk_op op	メッセージのオペレーション (TTME_DEPOSIT あるいは ttmedia_load() メッセージに渡されたオペレーション)
unsigned char * contents	到着中のドキュメントの内容
int len	len 引き数がゼロのとき、ドキュメントは指定のファイルに格納されています。contents 引き数または file 引き数が NULL でない場合は、ToolTalk 関数 tt_free() を使用してそれらの引き数を解放してください。
char *file	
void *clientdata	ttmedia_load() メッセージに渡されたクライアント・データ

メッセージが正常に処理されると、コールバックはゼロを返します。処理中にエラーが発生した場合は、コールバックは Tt_message に伝えられたエラー・ポインタを返します。

コールバックがメッセージ msg を処理しない場合、コールバックはメッセージを返し、TT_CALLBACK_CONTINUE ルーチン呼び出しスタックに渡してメッセージを他のコールバックに提供するか、メッセージを tt_message_receive() 関数に返します。

終了時に、ttmedia_load() 関数は、構築するように要求された要求を返します。エラーが発生した場合、この関数はエラー・ポインタを返します。Tt_status を調べるには、tt_ptr_error を使用します。表 A-23 は、返される可能性のあるエラーの一覧です。

表 A-23 ttmedia_load が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか、正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
TT_ERR_PROCID	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。
TT_ERR_NOMEM	オペレーションを実行するのに十分なメモリがありません。
TT_ERR_OVERFLOW	ToolTalk サービスが受信したメッセージの数が、正しく処理可能なアクティブ・メッセージの最大数 (2000) に達しました。

ttmedia_load_reply

```
Tt_message      ttmedia_load_reply (Tt_message
                                   const unsigned char *
                                   int
                                   int
                                   contract,
                                   new_contents,
                                   new_len,
                                   reply_and_destroy);
```

ドキュメントの表示、編集、作成を行う Media Exchange 要求に対して応答するには、ttmedia_load_reply() 関数を使用します。

new_contents 引き数と new_len 引き数の両方がゼロでない場合、それらの値は contract 引き数の適切な出力引き数にドキュメントの新しい内容を設定するのに使用されます。reply_and_destroy 引き数が true の場合、contract 引き数に対して応答が行われ、その後メッセージは破棄されます。

表 A-24 は、返される可能性のあるエラーの一覧です。

表 A-24 ttmedia_load_reply が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか、正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
TT_ERR_PROCID	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。
TT_ERR_NUM	
TT_ERR_NOTHANDLER	

ttmedia_ptype_declare

```

Tt_message      (*Ttmedia_load_pat_cb) ( Tt_message      msg,
                                          void *          clientdata,
                                          Tttk_op         op,
                                          Tt_status       diagnosis,
                                          unsigned char *  contents,
                                          int             len,
                                          char *          file,
                                          char *          docname );
Tt_status        ttmedia_ptype_declare( const char *    ptype,
                                          int             base_opnum,
                                          Ttmedia_load_pat_cb cb,
                                          void *          clientdata,
                                          int             declare );

```

ttmedia_ptype_declare() 関数は、Media Exchange メディア・エディタの ptype を宣言します。この関数は、特定のメディア型用の Media Exchange メッセージ・インタフェースを実装するエディタを初期化します。

- エディタが ptype でサポートされる種類のドキュメントを編集するように要求される場合、この関数は cb 引き数を呼び出します。
- この関数は、ptype が含まれていると想定される一連のシグニチャーに、ツールキット内部のオペレーション番号 (opnum) コールバックをインストールします。ツールキット内部の opnum コールバックは、これらのシグニチャーのいずれ

かに一致する要求を受信すると、clientdata を cb 引き数に渡します。opnum は、base_opnum から始まり、ゼロか 1000 の倍数でなければなりません。

- declare 引き数が true のとき、この関数は次を呼び出します。

```
tt_ptype_declare( ptype )
```

ptype が複数の異なるメディア型を実現する場合、ttmedia_ptype_declare() 関数を 2 回以上呼び出すことができます。base_opnum には、各呼び出しで異なる値を指定しなければなりません。

注 - ttmedia_ptype_declare() 関数は何回も呼び出すことができますが、declare 引き数を「true」に設定できるのは 1 回だけです。

表 A-25 は、Ttmedia_load_pat_cb メッセージが取るパラメータの一覧です。

表 A-25 Ttmedia_load_pat_cb メッセージが取るパラメータ

パラメータ	説明
Tt_message msg	送信された要求 クライアント・プログラムは、この要求を無視または拒否する、あるいは要求に応答しなければなりません。
Tttk_op op	着信中の要求のオペレーション (TTME_COMPOSE、TTME_EDIT、TTME_DISPLAY のいずれか)
Tt_status diagnosis	ツールキットが要求を無視するように勧告するときに使用するエラー・コード (たとえば、TT_DESKTOP_ENODATA) diagnosis が TT_OK ではなく、コールバック・ルーチンがメッセージ msg を返す場合、ツールキットはメッセージ msg を無視し破棄します。
unsigned char * contents	到着中のドキュメントの内容
int len	len 引き数がゼロのとき、ドキュメントは指定のファイルに格納されています。contents 引き数または file 引き数が NULL でない場合は、ToolTalk 関数 tt_free を使用して、それらの引き数を解放します。
char *file	

表 A-25 Ttmedia_load_pat_cb メッセージが取るパラメータ 続く

パラメータ	説明
char * docname	ドキュメントに名前が付けられている場合はその名前
void * clientdata	ttmedia_ptype_declare() メッセージに渡すクライアント・データ

メッセージが正常に処理されると、コールバックはゼロを返します。処理中にエラーが発生した場合は、コールバックは Tt_message に伝えられたエラー・ポインタを返します。

コールバックがメッセージ msg を処理せず、diagnosis 引き数の値が TT_OK でない場合、コールバックはメッセージを返し、ツールキットは TT_CALLBACK_CONTINUE ルーチン呼び出しスタックに渡してメッセージを他のコールバックに提供するか、メッセージを tt_message_receive() 呼び出しに返します。

エラーが発生すると、この関数は表 A-26 にあるエラーのうちのいずれかを返します。

表 A-26 ttmedia_ptype_declare が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか、正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
TT_ERR_PROCID	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。
TT_ERR_PTYPE	ToolTalk サービスが、指定された ptype を検出することができません。
TT_ERR_POINTER	渡されたポインタが、このオペレーションに適した型のオブジェクトを指していません。たとえば、文字列が必要なときにポインタは整数を指している場合などです。

tttk_block_while

```
Tt_status      tttk_block_while(  const int      *blocked,  
                                int          ms_timeout);
```

tttk_block_while 関数は、ms_timeout で指定されたタイムアウト時間中にプログラムが応答を待っている間プログラムをブロックします。

tttk_message_abandon

```
Tt_status      tttk_message_abandon ( Tt_message      msg );
```

tttk_message_abandon() 関数は、要求を放棄した後に破棄します。

注・プログラムは、メッセージを理解できずに処分したいときはメッセージを放棄しなければなりません。

エラーが発生すると、この関数は表 A-27 にあるエラーのうちのいずれかを返します。

表 A-27 tttk_message_abandon が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか、正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
TT_ERR_POINTER	渡されたポインタが、このオペレーションに適した型のオブジェクトを指していません。たとえば、文字列が必要なときにポインタは整数を指している場合などです。
TT_ERR_NOTHANDLER	

tttk_message_create

```
Tt_message tttk_message_create(    Tt_message    context,  
                                   Tt_class         the_class,  
                                   Tt_scope         the_scope,  
                                   const char *     handler,  
                                   const char *     op,  
                                   Tt_message_callback callback);
```

tttk_message_create() 関数は、規約に従ったメッセージを作成します。この関数を使用すれば、継承されたコンテキストをあるメッセージから別のメッセージに伝達するメッセージを簡単に作成できます。

tttk_message_create() 関数はメッセージを作成し、スロット名が ENV_ で始まる context からすべてのコンテキスト・スロットを新しいメッセージ上にコピーします。作成されたメッセージには、the_class パラメータに指定された Tt_class 値と the_scope パラメータに指定された Tt_scope 値が設定されます。

handler パラメータが NULL の場合、メッセージには TT_PROCEDURE の Tt_address が設定されます。handler パラメータが NULL でない場合は、メッセージは TT_HANDLER を経由して procid に送信されます。

op 引き数が NULL でない場合、その値にはメッセージの op 引き数が設定されません。

コールバック引き数が NULL でない場合、その値がメッセージ・コールバックとしてメッセージに追加されます。

正常終了時には、tttk_message_create() 関数は作成した Tt_message を返します。これは、他の Tt_message と同じ方法で変更、送信、および破棄できます。

エラーが発生すると、エラー・ポインタが返されます。Tt_status を調べるには、tt_ptr_error を使用します。表 A-28 は、返される可能性のあるエラーの一覧です。

表 A-28 tttk_message_create が返す可能性のあるエラー

エラーの値	説明
TT_ERR_NOMP	ttsession プロセスを使用できません。ToolTalk サービスは、ttsession が実行されていない場合はその再起動を試みます。このエラーは、ToolTalk サービスがインストールされていないか、正しくインストールされていないかのどちらかを示します。
TT_ERR_PROCID	指定されたプロセス識別子が旧式か、無効です。
TT_ERR_NOMEM	オペレーションを実行するのに十分なメモリがありません。

tttk_message_destroy

```
Tt_status tttk_message_destroy ( Tt_message msg );
```

tttk_message_destroy() 関数は、規約に従うすべてのメッセージを破棄します。

注 - このメッセージは、tt_message_destroy() メッセージの代わりに使用できます。

tttk_message_destroy() 関数は、tttdt_message_accept() 関数あるいは tttdt_subcontract_manage() 関数によってメッセージに格納されたパターンを破棄し、その後メッセージ msg を tt_message_destroy() 関数に渡します。

この関数は、tt_message_destroy() 関数によって返された値を返します。

tttk_message_fail

```
Tt_status tttk_message_fail( Tt_message msg,
                             Tt_status status,
                             const char *status_string,
                             int destroy );
```

tttk_message_fail() 関数は、メッセージ msg を無視した後で破棄します。

注・プログラムは、メッセージを理解できずに処分したいときは、メッセージを放棄しなければなりません。

状態が `TT_SENT` であるメッセージは無視できます。メッセージが、ハンドラが宛先指定されているメッセージ、あるいは `TT_WRN_START_MESSAGE` の `tt_message_status` を持つ場合、そのメッセージは無視できます。

この関数は、`TT_DESKTOP_ENOTSUP` を返します。

tttk_message_receive

```
Tt_status  tttk_message_receive(  const char*  procid );
```

`tttk_message_receive()` 関数は、`tt_message_receive()` 関数を呼び出し、次の ToolTalk メッセージを取り出します。

`procid` がゼロでない場合、この関数は次を呼び出します。

```
tt_default_procid_set( procid )
```

tttk_message_reject

```
Tt_status  tttk_message_reject(  Tt_message  msg,  
                                Tt_status  status,  
                                const char*  status_string,  
                                int  destroy );
```

`tttk_message_reject()` 関数は、メッセージ `msg` を拒否した後で破棄します。

注・プログラムは、メッセージを理解できずに処分したいときは、メッセージを放棄しなければなりません。

状態が `TT_SENT` であるメッセージは拒否できます。メッセージが、ハンドラが宛先指定されているメッセージでない、あるいは `TT_WRN_START_MESSAGE` 以外の `tt_message_status` を持つ場合、そのメッセージを拒否できます。

この関数は、`TT_DESKTOP_ENOTSUP` を返します。

tttk_op_string

```
char          *tttk_op_string(      Tttk_op          op);
```

tttk_op_string() 関数は、正常終了する場合はオペレーション op に対する文字列を返します。そうでない場合、この関数はゼロを返します。

注 - 返された文字列を解除するには、tt_free() 関数を使用してください。

```
Tttk_op          tttk_string_op( const char *          opstring );
```

tttk_string_op() 関数は、指定の文字列に対するオペレーションを保持している文字列を返します。エラーが発生すると、この関数は TTDT_OP_NONE を返します。

tttk_Xt_input_handler

```
void          tttk_Xt_input_handler(  XtPointer          procid,
                                       int *              source,
                                       XtInputId *        id );
```

tttk_Xt_input_handler() 関数は、Xt クライアントのための ToolTalk イベントを処理します。一部のメッセージがコールバックで処理されないと予想される場合を除き、この関数を Xt 入力ハンドラとして使用します。

この関数は、procid 引き数を tttk_message_receive() 関数に渡し、すべての返されたメッセージ (つまり、コールバックで処理されないメッセージ) を tttk_message_abandon() 関数に渡します。

この関数がエラー TT_ERR_NOMP を返すと、tttk_Xt_input_handler() 関数は id パラメータを XtRemoveInput() 関数に渡します。

CoEd デモンストレーション・プログラム

この付録には、CoEd と呼ばれる ToolTalk デモンストレーション・プログラムのための ToolTalk 関連コードを示すファイルとソースコードの一覧があります。CoEd デモ・プログラムは、ToolTalk デスクトップ・サービス・メッセージ・セットを使用します。エディタの複数のインスタンスが同時に同じファイルを編集しているときに、エディタが ToolTalk サービスを使用して、ユーザが加えたすべての変更の同期を取る方法について説明します。

CoEd ptype ファイル

CoEd ptype ファイルについて、例 B-1 に示します。

例 B-1 CoEd ptype ファイル

```
ptype DT_CoEd {
    start    "CoEd;
    handle:
    /*
    * Display ISO_Latin_1
    */
    session  Display( in    ISO_Latin_1 contents) => start opnum = 1;
            /* Signature */
    session  Display( in    ISO_Latin_1 contents,
                       in    messageID counterfoil) => start opnum = 2;
    session  Display( in    ISO_Latin_1 contents,
                       in    title      docName) => start opnum = 3;
    session  Display( in    ISO_Latin_1 contents,
                       in    messageID counterfoil,
                       in    title      docName) => start opnum = 4;
    /*
    * Edit ISO_Latin_1
```

```

    */
session    Edit(    inout ISO_Latin_1 contents) => start opnum = 101;
session    Edit(    inout ISO_Latin_1 contents,
                  in    messageID counterfoil) => start opnum = 102;
session    Edit(    inout ISO_Latin_1 contents,
                  in    title      docName) => start opnum = 103;
session    Edit(    inout ISO_Latin_1 contents,
                  in    messageID counterfoil,
                  in    title      docName) => start opnum = 104;
/*
 * Compose ISO_Latin_1
 */
session    Edit(    out   ISO_Latin_1 contents) => start opnum = 201;
session    Edit(    out   ISO_Latin_1 contents,
                  in    messageID counterfoil) => start opnum = 202;
session    Edit(    out   ISO_Latin_1 contents,
                  in    title      docName) => start opnum = 203;
session    Edit(    out   ISO_Latin_1 contents,
                  in    messageID counterfoil,
                  in    title      docName) => start opnum = 204;
/*
 * Open an ISO_Latin_1 buffer
 */
session    Open(    in    ISO_Latin_1 contents,
                  out   bufferID   docBuf,
                  in    boolean    readOnly ) => start opnum = 400;
session    Open(    in    ISO_Latin_1 contents,
                  out   bufferID   docBuf,
                  in    boolean    readOnly,
                  in    boolean    mapped ) => start opnum = 401;
session    Open(    in    ISO_Latin_1 contents,
                  out   bufferID   docBuf,
                  in    boolean    readOnly,
                  in    boolean    mapped,
                  in    integer    shareLevel) => start opnum = 402;
session    Open(    in    ISO_Latin_1 contents,
                  out   bufferID   docBuf,
                  in    boolean    readOnly,
                  in    boolean    mapped,
                  in    integer    shareLevel,
                  in    locator    initialPos) => start opnum = 403;
};

```

CoEd.C ファイル

例 B-2 に示す CoEd.C ファイルは、各アプリケーションに組み込む必要がある ToolTalk コードを示します。これにより、ツールキットの初期化、ToolTalk セッションへの参加、パターンの登録、ToolTalk サービスのイベント・ループへの追加を実行できます。

注 - このファイルには、エディタ・アプリケーションとして機能する場合の CoEd に固有の ToolTalk コードも入っています。このコードには、ptype の宣言と起動メッセージの処理も含まれています。

例 B-2 CoEd.C ファイル

```
/*
 * CoEd.cc
 *
 * Copyright (c) 1991,1993 by Sun Microsystems.
 */

#include <stdlib.h>
#include <desktop/tttk.h>          // Include the ToolTalk messaging toolkit
#include <CoEd.h>
#include "CoEditor.h"
#include "CoEdTextBuffer.h"

XtAppContext    myContext;
Widget          myTopWidget = 0;
Display         *myDpy;
int             abortCode    = 0;
Tt_pattern     *sessPats    = 0;          // Patterns returned when session joined
int             timeOutFactor = 1000;
int             maxBuffers   = 1000;
int             *pArgc;
char            **globalArgv;

const char      *ToolName = "CoEd";
const char      *usage    =
"Usage: CoEd [-p01] [-w n] [-t n] [file]\n"
"-p          print ToolTalk procid\n"
"-0          do not open an initial composition window\n"
"-1          be a single-buffer editor\n"
"-w          sleep for n seconds before coming up\n"
"-t          use n as timeout factor, in milliseconds (default: 1000)\n"
;

void main(      int    argc,
               char   **argv
)
{
    static const char *here = "main()";

    int    delay    = 0;
    int    printid  = 0;
    int    compose  = 1;
    char   *file    = 0;

    OlToolkitInitialize( 0 );
    XtToolkitInitialize();
    myContext = XtCreateApplicationContext();
    //
    // This display may get closed, and another opened, inside
    // CoEditor::_init(), if e.g. our parent is on a different screen
    //
}
```

```

pArgc = &argc;
globalArgv = argv;
myDpy = XtOpenDisplay( myContext, 0, 0, "CoEd", 0, 0, &argc, argv );
int c;
while ((c = getopt( argc, argv, "p0lw:t:" )) != -1) {
    switch (c) {
        case 'p':
            printid = 1;
            break;
        case '0':
            compose = 0;
            break;
        case 'l':
            maxBuffers = 1;
            break;
        case 'w':
            delay = atoi( optarg );
            break;
        case 't':
            timeOutFactor = atoi( optarg );
            break;
        default:
            fputs( usage, stderr );
            exit( 1 );
    }
}
if (optind < argc) {
    file = argv[ optind ];
}
while (delay > 0) {
    sleep( 1 );
    delay--;
}
int myTtFd; // Obtain process identifier
// Initialize toolkit and create a ToolTalk communication endpoint
char *myProcID = ttdt_open( &myTtFd, ToolName, "SunSoft", "%I", 1 );

// Declare ptype
ttmedia_ptype_declare( "DT_CoEd", 0, CoEditor::loadISOLatin1_,
    (void *)&myTopWidget, 1 );

// Process the message that started us, if any
tttk_Xt_input_handler( 0, 0, 0 );
if (abortCode != 0) {
    // Error in message that caused us to start.
    exit( abortCode );
}

if (CoEditor::numEditors == 0) {
    // started by hand, not by ToolTalk
    if (file == 0) {
        if (compose) {
            new CoEditor( &myTopWidget );
        }
    } else {
        new CoEditor( &myTopWidget, file );
    }
}
//
// If sessPats is unset, then we have not joined the desktop

```



```

// session yet.      So join it.
//
if (sessPats == 0) {
    Widget session_shell = CoEditor::editors[0]->shell;
    if (maxBuffers > 1) {
        //
        // In multi-window mode, no single window is the
        // distinguished window.
        //
        session_shell = myTopWidget;
    }
    sessPats = ttdt_session_join( 0, 0, session_shell, 0, 1 );
}

XtAppAddInput( myContext, myTtFd, (XtPointer)XtInputReadMask,
               ttk_Xt_input_handler, myProcID );
XtAppMainLoop( myContext );
}

```

Coeditor.C ファイル

例 B-3 に示す Coeditor.C ファイルは、各エディタ・アプリケーションに組み込む必要がある ToolTalk コードを示します。これにより、メディア・コールバックを渡し、要求の完了時に応答できます。エディタ・アプリケーションに組み込むことができるその他のオプションの ToolTalk コードも示します。

注 - 省略符号 (...) は、省略されたコードを示します。

例 B-3 CoEditor.C ファイル

```

...

CoEditor::CoEditor(
    Widget *parent
)
{
    _init();
    _init( parent );
}

CoEditor::CoEditor(
    Widget      *parent,
    const char  *file
)
{
    _init();
    _init( parent );
    _load( file );
}

```

```

CoEditor::CoEditor(
    Widget      *parent,
    Tt_message  msg,
    const char  *      /*docname*/,
    Tt_status   &status
)
{
    _init();
    status = _init( msg );
    if (status != TT_OK) {
        return;
    }
    _init( parent );
    status = _acceptContract( msg );
}

CoEditor::CoEditor(
    Widget      *parent,
    Tt_message  msg,
    int         /*readOnly*/,
    const char  *file,
    const char  *      /*docname*/,
    Tt_status   &status
)
{
    _init();
    status = _init( msg );
    if (status != TT_OK) {
        return;
    }
    _init( parent );
    status = _load( file );
    if (status != TT_OK) {
        return;
    }
    status = _acceptContract( msg );
}

CoEditor::CoEditor(
    Widget      *parent,
    Tt_message  msg,
    int         /*readOnly*/,
    unsigned char *contents,
    int         /*len*/,
    const char  *      /*docname*/,
    Tt_status   &status
)
{
    _init();
    status = _init( msg );
    if (status != TT_OK) {
        return;
    }
    _init( parent );
    XtVaSetValues( (Widget)_text,
                  XtNsourceType,      (XtArgVal)OL_STRING_SOURCE,
                  XtNsource,          (XtArgVal)contents,
                  NULL );
    _textBuf = OlTextEditTextBuffer( _text );
}

```

```

        RegisterTextBufferUpdate( _textBuf, CoEditor::_textUpdateCB_,
                                (caddr_t)this );
        status = _acceptContract( msg );
    }

CoEditor::~CoEditor()
{
    //
    // No need for a separate save if we are sending the document
    // back in a reply.
    //
    if ( _contract == 0 ) {
        if ( _modifiedByMe ) {
            // we revert before quitting if we don't want to save
            _save();
        }
    } else {
        int len;
        char *contents = _contents( &len );

        // Reply to media load callback with edited contents of text
        ttmedia_load_reply( _contract, (unsigned char *)contents,
                           len, 1 );
        if ( contents != 0 ) {
            XtFree( contents );
        }
        _contract = 0;
    }
    numEditors--; // XXX assumes user destroys windows LIFO!
}

Tt_message
CoEditor::loadISOLatin1_(
    Tt_message msg,
    Tt_op op,
    Tt_status diagnosis,
    unsigned char *contents,
    int len,
    char *file,
    char *docname,
    void *pWidget
)
{
    static const char *here = "CoEditor::loadISOLatin1_()";

    Tt_status status = TT_OK;
    CoEditor *coEditor = 0;
    if (diagnosis != TT_OK) {
        // toolkit detected an error
        if (tt_message_status( msg ) == TT_WRN_START_MESSAGE) {
            //
            // Error is in start message! We now have no
            // reason to live, so tell main() to exit().
            //
            abortCode = 2;
        }

        // let toolkit handle the error
        return msg;
    }
}

```

```

if ((op == TTME_COMPOSE) & (file == 0)) {
    coEditor = new CoEditor( (Widget *)pWidget, msg, docname, status );
} else if (len > 0) {
    coEditor = new CoEditor( (Widget *)pWidget, msg,
                             (op == TTME_DISPLAY),
                             contents, len, docname, status );
} else if (file != 0) {
    coEditor = new CoEditor( (Widget *)pWidget, msg,
                             (op == TTME_DISPLAY),
                             file, docname, status );
} else {
    // Fail a message
    ttk_message_fail( msg, TT_DESKTOP_ENODATA, 0, 1 );
}
tt_free( (caddr_t)contents );
tt_free( file );
tt_free( docname );
return 0;
}

void
CoEditor::_init()
{
    _baseFrame          = 0;
    _controls           = 0;
    _fileBut            = 0;
    _editBut            = 0;
    _scrolledWin        = 0;
    _text               = 0;
    _textBuf            = 0;
    _modifiedByMe       = FALSE;
    _modifiedByOther    = 0;
    _contract           = 0;
    _contractPats       = 0;
    _filePats           = 0;
    _file               = 0;
    _x                  = INT_MAX;
    _y                  = INT_MAX;
    _w                  = INT_MAX;
    _h                  = INT_MAX;
}

Tt_status
CoEditor::_init(
    Tt_message msg
)
{
    int width, height, xOffset, yOffset;

    width = height = xOffset = yOffset = INT_MAX;
    _contract = msg;
    tttdt_sender_imprint_on( 0, msg, 0, &_w, &_h, &_x, &_y,
                             10 * timeOutFactor );

    return TT_OK;
}

typedef enum {
    Open,
    Save,

```

```

        SaveAs,
        Revert
    } FileOp;

static const char *fileButs[] = {
    "Open...",
    "Save",
    "Save as...",
    "Revert",
};

const int numFileButs = sizeof( fileButs ) / sizeof( const char * );

typedef enum {
    Undo,
    Cut,
    Copy,
    Paste,
    Delete,
    SelText,
    SelAppt
} EditOp;

static const char *editButs[] = {
    "Undo",
    "Cut",
    "Copy",
    "Paste",
    "Delete",
    "Text as ISO_Latin_1",
    "Text as Appointment";
};

const int numEditButs = sizeof( editButs ) / sizeof( const char * );

void
CoEditor::_init(
    Widget *parent
)
{
    if (*parent == 0) {
        if (_contract != 0) {
            //
            // Re-open display, since $DISPLAY may have changed by
            // ttdt_sender_imprint_on().
            //
            XtCloseDisplay( myDpy );
            myDpy = XtOpenDisplay( myContext, 0, 0, "CoEd", 0, 0,
                pArgc, globalArgv );
        }
        *parent = XtAppCreateShell( 0, "CoEd",
            applicationShellWidgetClass, myDpy, 0, 0 );
        XtVaSetValues( *parent,
            XtNmappedWhenManaged, False,
            XtNheight, 1,
            XtNwidth, 1,
            0 );
        XtRealizeWidget( *parent );
    }
    shell = XtCreatePopupShell( "CoEd",

```

```

                                applicationShellWidgetClass, *parent, 0, 0 );
XtVaSetValues( shell, XtNuserData, this, 0 );
// Pop up next to our parent
if (( _x != INT_MAX) && ( _y != INT_MAX) && ( _w != INT_MAX)) {
    // XXX Be smarter about picking a geometry
    Dimension x      = _x + _w;
    Dimension y      = _y;
    XtVaSetValues( shell, XtNx, x, XtNy, y, 0 );
}
XtAddCallback( shell, XtNdestroyCallback, CoEditor::_destroyCB_, this );

OAddCallback( shell, XtNwmProtocol, CoEditor::_wmProtocolCB_, this );
_baseFrame = XtVaCreateManagedWidget( "baseFrame", rubberTileWidgetClass,
                                        shell, 0 );

_controls = XtVaCreateManagedWidget( "controls",
                                       controlAreaWidgetClass, _baseFrame,
                                       XtNweight, (XtArgVal)0, 0 );
_fileBut = XtVaCreateManagedWidget( "File", menuButtonWidgetClass,
                                       _controls, 0 );
Widget menuPane;
XtVaGetValues( _fileBut, XtNmenuPane, &menuPane, 0 );
for (int i = 0; i < numFileButs; i++) {
    Widget but = XtVaCreateManagedWidget( fileButs[i],
                                           oblongButtonWidgetClass,
                                           menuPane, XtNuserData, i, 0 );
    XtAddCallback( but, XtNselect, CoEditor::_fileButsCB_, this );
}
_editBut = XtVaCreateManagedWidget( "Edit", menuButtonWidgetClass,
                                       _controls, 0 );
XtVaGetValues( _editBut, XtNmenuPane, &menuPane, 0 );
for (i = 0; i < numEditButs; i++) {
    Widget but = XtVaCreateManagedWidget( editButs[i],
                                           oblongButtonWidgetClass,
                                           menuPane, XtNuserData, i, 0 );
    XtAddCallback( but, XtNselect, CoEditor::_editButsCB_, this );
}
_scrolledWin = XtVaCreateManagedWidget(
    "scrolledWin", scrolledWindowWidgetClass,
    _baseFrame,
    XtNforceVerticalSB, (XtArgVal)True,
    0 );
_text = (TextEditWidget)XtVaCreateManagedWidget(
    "text", textEditWidgetClass, _scrolledWin,
    0 );
XtVaSetValues( (Widget)_text, XtNuserData, this, 0 );
XtRealizeWidget( shell );
XtPopup( shell, XtGrabNone );
if (numEditors < MaxEditors) {
    editors[ numEditors ] = this;
    numEditors++;
}
if (numEditors >= maxBuffers) {
    tt_ptype_undeclare( "DT_CoEd" );
}
}
Tt_status
CoEditor::_unload()
{
    Tt_status status = TT_OK;

```

```

    if ( _filePats != 0 ) {
        // Unregister interest in ToolTalk events and destroy patterns
        status = ttdt_file_quit( _filePats, 1 );
        _filePats = 0;
    }
    if ( _file != 0 ) {
        free( _file );
        _file = 0;
    }

    return status;
}

Tt_status
CoEditor::_load(
    const char *file
)
{
    int reloading = 1;
    if (file != 0) {
        if (( _file != 0 ) && (strcmp( file, _file ) != 0)) {
            reloading = 0;
            _unload();
        } else {
            _file = strdup( file );
        }
    }
    // Join a file Can be called recursively, below
    if ( _filePats == 0 ) {
        _filePats = ttdt_file_join( _file, TT_SCOPE_NONE, 1,
                                   CoEditor::_fileCB_, this );
    }
    XtVaSetValues( (Widget)_text,
                   XtNsourceType,          (XtArgVal)OL_DISK_SOURCE,
                   XtNsource,              (XtArgVal)_file,
                   NULL );
    _textBuf = OlTextEditTextBuffer( _text );
    RegisterTextBufferUpdate( _textBuf, CoEditor::_textUpdateCB_,
                              (caddr_t)this );
    if ( _modifiedByMe && reloading ) {
        ttdt_file_event( _contract, TTDT_REVERTED, _filePats, 1 );
    }
    _modifiedByMe = 0;
    // Does the file have any changes pending?
    _modifiedByOther = ttdt_Get_Modified( _contract, _file, TT_BOTH,
                                          10 * timeOutFactor );
    if ( _modifiedByOther ) {
        int choice = userChoice( myContext, _baseFrame,
                                "Another tool has modifications pending for ",
                                "this file.\nDo you want to ask it to save ",
                                "or revert the file?", 3, "Save",
                                "Revert", "Ignore" );
        Tt_status status = TT_OK;
        switch (choice) {
            case 0:
                // Save pending changes
                status = ttdt_Save( _contract, _file, TT_BOTH,
                                   10 * timeOutFactor );
                break;
            case 1:

```

```

        // Revert file to last version
        status = ttdt_Revert( _contract, _file, TT_BOTH,
                             10 * timeOutFactor );
        break;
    }
    if (status != TT_OK) {
        char *s = tt_status_message( status );
        userChoice( myContext, _baseFrame, s, 1, "Okay" );
        tt_free( s );
    } else if (choice == 0) {
        // file was saved, so reload
        return _load( 0 );
    } else if (choice == 1) {
        // file was reverted
        _modifiedByOther = 0;
    }
}

return TT_OK;
}

Tt_status
CoEditor::_load(
    unsigned char *contents,
    int //len
)
{
    _unload();
    XtVaSetValues( (Widget)_text,
                   XtNsourceType, (XtArgVal)OL_DISK_SOURCE,
                   XtNsource, (XtArgVal)contents,
                   NULL );
    _textBuf = OlTextEditTextBuffer( _text );
    RegisterTextBufferUpdate( _textBuf, CoEditor::_textUpdateCB,
                              (caddr_t)this );

    _modifiedByMe = 0;
    _modifiedByOther = 0;
    return TT_OK;
}

//
// Caller responsible for reporting any errors to user
//
Tt_status
CoEditor::_save()
{
    Tt_status status;
    if (_file != 0) {
        if (SaveTextBuffer( _textBuf, _file ) != SAVE_SUCCESS) {
            return TT_DESKTOP_EIO;
        }
        _modifiedByMe = 0;
        _modifiedByOther = 0;
        // File has been saved
        ttdt_file_event( _contract, TTDT_SAVED, _filePats, 1 );
    }
    if (_contract != 0) {
        int len = 0;
        char * contents = 0;
        if (_file == 0) {

```



```

        // If you worry that the buffer might be big,
        // you could instead try a temp file to
        // transfer the data "out of band".
        contents = _contents( &len );
    }
    status = ttmedia_Deposit( _contract, 0, "ISO_Latin_1",
                             (unsigned char *)contents,
                             len, _file, 10 * timeOutFactor );

    if (status != TT_OK) {
        return status;
    }
    _modifiedByMe = 0;
    _modifiedByOther = 0;
    if (contents != 0) {
        XtFree( contents );
    }
}
return status;
}

Tt_status
CoEditor::_revert() // XXX how about we always just send Revert? :-
{
    if (! _modifiedByMe) {
        return TT_OK;
    }
    return _load( 0 ); // XXX what if it's not a file? keep last deposit
}

void
CoEditor::_destroyCB_(
    Widget      w,
    XtPointer   coEditor,
    XtPointer   call_data
)
{
    ((CoEditor *)coEditor)->_destroyCB( w, call_data );
}

void
CoEditor::_destroyCB(
    Widget      w,
    XtPointer   //call_data
)
{
    delete this;
}

void
CoEditor::_wmProtocolCB_(
    Widget      w,
    XtPointer   coEditor,
    XtPointer   wmMsg
)
{
    ((CoEditor *)coEditor)->_wmProtocolCB( w, (OlWMProtocolVerify*)wmMsg );
}

void
CoEditor::_wmProtocolCB(

```

```

Widget          w,
OlWMPProtocolVerify *wmMsg
)
{
    switch (wmMsg->msgtype) {
        case OL_WM_DELETE_WINDOW:
            if (_modifiedByMe) {
                int choice =
                    userChoice( myContext, _baseFrame,
                                "The text has unsaved changes.",
                                3, "Save, then Quit",
                                "Discard, then Quit",
                                "Cancel" );

                switch (choice) {
                    case 0:
                        break;
                    case 1:
                        _revert();
                        break;
                    case 2:
                        return;
                }
            }
            if (umEditors > 1) {
                XtDestroyWidget( shell );
            } else {
                // XXX OlWmProtocolAction() doesn't call destructor?!
                delete this;
                OlWMPProtocolAction( w, wmMsg, OL_DEFAULTACTION );
            }
            break;
        default:
            OlWMPProtocolAction( w, wmMsg, OL_DEFAULTACTION );
            break;
    }
}

void
CoEditor::_fileButsCB_(
    Widget      button,
    XtPointer   coEditor,
    XtPointer   call_data
)
{
    ((CoEditor *)coEditor)->_fileButsCB( button, call_data );
}

void
CoEditor::_fileButsCB(
    Widget      button,
    XtPointer   //call_data
)
{
    FileOp op;

    XtVaGetValues( button, XtNuserData, &op, 0 );
    Tt_status status = TT_OK;
    switch (op) {
        case Open:
            break;
    }
}

```

```

        case Revert:
            status = _revert();
            break;
        case Save:
            status = _save();
            break;
        case SaveAs:
            break;
    }
    if (status != TT_OK) {
        _adviseUser( status );
    }
}

void
CoEditor::_editButsCB(
    Widget      button,
    XtPointer   coEditor,
    XtPointer   call_data
)
{
    ((CoEditor *)coEditor)->_editButsCB( button, call_data );
}

void
CoEditor::_editButsCB(
    Widget      button,
    XtPointer   //call_data
)
{
    EditOp op;
    XtVaGetValues( button, XtNuserData, &op, 0 );
    Tt_status status = TT_OK;
    switch (op) {
        int      len;
        char     *contents;
        const char *mediaType;
        Tt_message msg;
        Tt_pattern *pats;
    case SelText:
    case SelAppt:
        if (op == SelText) {
            mediaType = "ISO_Latin_1";
        } else {
            mediaType = "DT_CM_Appointment";
        }
        //contents = _selection( &len );
        contents = _contents( &len );
        if (len <= 0) {
            return;
        }
        // Media load callback
        msg = ttmedia_load( _contract, CoEditor::_mediaLoadMsgCB_,
                           this, TTME_EDIT, mediaType,
                           (unsigned char *)contents, len, 0, 0, 1 );
        if (contents != 0) {
            XtFree( contents );
        }
        status = tt_ptr_error( msg );
        if (status != TT_OK) {

```

```

        break;
    }
    pats = ttdt_subcontract_manage( msg, 0, shell, this );
    status = tt_ptr_error( pats );
    if (status != TT_OK) {
        break;
    }
    break;
}
if (status != TT_OK) {
    char *s = tt_status_message( status );
    char buf[ 1024 ];
    sprintf( buf, "%d: %s", status, s );
    tt_free( s );
    userChoice( myContext, _baseFrame, buf, 1, "Okay" );
}
}

char *
CoEditor::_contents(
    int *len
)
{
    _textBuf = OlTextEditTextBuffer( _text );
    TextLocation start = { 0, 0, 0 };
    TextLocation end = LastTextBufferLocation( _textBuf );
    char *contents = GetTextBufferBlock( _textBuf, start, end );
    *len = 0;
    if (contents != 0) {
        *len = strlen( contents );
    }
    return contents;
}

Tt_status
CoEditor::_acceptContract(
    Tt_message msg
)
{
    static const char *here = "CoEditor::_acceptContract()";
    _contract = msg;
    if (tt_message_status( msg ) == TT_WRN_START_MESSAGE) {
        //
        // Join session before accepting start message,
        // to prevent unnecessary starts of our ptype
        //
        Widget session_shell = shell;
        if (maxBuffers > 1) {
            //
            // If we are in multi-window mode, just use
            // our unmapped toplevel shell as our session
            // shell, since we do not know if any particular
            // window will exist the whole time we are in
            // the session.
            //
            session_shell = XtParent(shell );
        }
        // Join the session and register patterns and callbacks
        sessPats = ttdt_session_join( 0, 0, session_shell,
            this, 1 );
    }
}

```

```

    }
    // Accept responsibility to handle a request
    _contractPats = ttdt_message_accept(
        msg, CoEditor::_contractCB_, shell, this,
        1, 1 );
Tt_status status = tt_ptr_error( _contractPats );
    if (status != TT_OK) {
        return status;
    }
    return status;
}

Tt_message
CoEditor::_contractCB_(
    Tt_message, //msg,
    Ttk_op, //op,
    Widget, //shell,
    void*, //coEditor,
    Tt_message //Contract
)
{
    return 0;
}

void
CoEditor::_editButCB_(
    Widget w,
    XtPointer coEditor,
    XtPointer call_data
)
{
    ((CoEditor *)coEditor)->_editButCB( w, call_data );
}

void
CoEditor::_editButCB(
    Widget ,
    XtPointer //call_data
)
{
    int len;
    char *contents = _contents( &len );

    // Media Load Callback
    Tt_message msg = ttmedia_load( _contract, CoEditor::_mediaLoadMsgCB_,
        this, TTME_EDIT, "ISO_Latin_1",
        (unsigned char *)contents,
        len, 0, 0, 1 );

    if (contents != 0) {
        Xtfree( contents );
    }
    Tt_pattern *pats = ttdt_subcontract_manage( msg, 0, shell, this );
}

Tt_message
CoEditor::_mediaLoadMsgCB_(
    Tt_message msg,
    Ttk_op op,
    unsigned char *contents,
    int len,
    char *file,

```

```

        void                *clientData
    )
    {
        return ((CoEditor *)clientData)->_mediaLoadMsgCB( msg, op,
            contents, len, file ); }

Tt_message
CoEditor::_mediaLoadMsgCB(
    Tt_message    msg,
    Ttk_op,
    unsigned char *contents,
    int           len,
    char          *file
)
{
    if (len > 0) {
        XtVaSetValues( (Widget)_text,
            XtNsourceType, (XtArgVal)OL_STRING_SOURCE,
            XtNsource,    (XtArgVal)contents,
            NULL );
        _textBuf = OlTextEditTextBuffer( _text );
        RegisterTextBufferUpdate( _textBuf, CoEditor::_textUpdateCB_,
            (caddr_t)this );
        // ReplaceBlockInTextBuffer
    } else if (file != 0) {
    }
    tt_message_destroy( msg );
    return 0;
}

void
CoEditor::_textUpdateCB_(
    XtPointer    coEditor,
    XtPointer    pTextBuffer,
    EditResult   status
)
{
    if (coEditor == 0) {
        return;
    }
    ((CoEditor *)coEditor)->_textUpdateCB( (TextBuffer *)pTextBuffer,
        status );
}

void
CoEditor::_textUpdateCB(
    TextBuffer    *textBuf,
    EditResult    //editStatus
)
{
    //Tt_status status;
    if (_textBuf != textBuf) {
        fprintf( stderr, "_textBuf != textBuf" );
    }
    if ((! _modifiedByMe) && TextBufferModified( _textBuf )) {
        _modifiedByMe = TRUE;
        // File has changes pending
        ttdt_file_event( _contract, TTDT_MODIFIED, _filePats, 1 );
    }
}

```

```

Tt_message
CoEditor::_fileCB_(
    Tt_message      msg,
    Tttk_op         op,
    char            *pathname,
    void            *coEditor,
    int             trust,
    int             me
)
{
    tt_free( pathname );
    if (coEditor == 0) {
        return msg;
    }
    return ((CoEditor *)coEditor)->_fileCB( msg, op, pathname,
                                             trust, me );
}

Tt_message
CoEditor::_fileCB(
    Tt_message      msg,
    Tttk_op         op,
    char            *pathname,
    int,            //trust
    int             //me
)
{
    tt_free( pathname );
    Tt_status status = TT_OK;
    switch (op) {
        case TTDI_MODIFIED:
            if (_modifiedByMe) {
                // Hmm, the other editor either doesn't know or
                // doesn't care that we are already modifying the
                // file, so the last saver will win.
                // XXX Or: a race condition has arisen!
            } else {
                // Interrogate user if she ever modifies the buffer
                _modifiedByOther = 1;
                XtAddCallback( (Widget)_text, XtNmodifyVerification,
                              (XtCallbackProc)CoEditor::_textModifyCB_, 0 );
            }
            break;
        case TTDI_GET_MODIFIED:
            tt_message_arg_ival_set( msg, 1, _modifiedByMe );
            tt_message_reply( msg );
            break;
        case TTDI_SAVE:
            status = _save();
            if (status == TT_OK) {
                tt_message_reply( msg );
            } else {
                // Fail message
                tttk_message_fail( msg, status, 0, 0 );
            }
            break;
        case TTDI_REVERT:
            status = _revert();
            if (status == TT_OK) {

```

```

        tt_message_reply( msg );
    } else {
        // Fail message
        tttk_message_fail( msg, status, 0, 0 );
    }
    break;
case TTDT_REVERTED:
case TTDT_SAVED:
case TTDT_MOVED:
case TTDT_DELETED:
    printf( "CoEditor::_fileCB(): %s\n", tttk_op_string( op ) );
    break;
}
tt_message_destroy( msg );
return 0;
}

void CoEditor::_textModifyCB(
    TextEditWidget      text,
    XtPointer            ,
    OlTextModifyCallData *mod
)
{
    CoEditor *coEditor = 0;
    XtVaGetValues( (Widget)text, XtUserData, &coEditor, 0 );
    if (coEditor == 0) {
        return;
    }
    coEditor->_textModifyCB( mod );
}

void
CoEditor::_textModifyCB(
    OlTextModifyCallData *mod
)
{
    if ( _modifiedByOther != 1 ) {
        return;
    }
    int cancel = userChoice( myContext, _baseFrame,
        "Another tool has modifications pending for this file.\n",
        "Are you sure you want to start modifying the file?",
        2, "Modify", "Cancel" );
    if (cancel) {
        mod->ok = FALSE;
    }
    _modifiedByOther = 2;
}

void
CoEditor::_adviseUser(
    Tt_status status
)
{
    char *s = tt_status_message( status );
    char buf[ 1024 ];
    sprintf( buf, "%d: %s", status, s );
    tt_free( s );
    userChoice( myContext, _baseFrame, buf, 1, "Okay" );
}

```


新規の ToolTalk 関数

この章では、今回のリリースで新規に作成された ToolTalk 関数について説明します。これらの関数を使用するには、次のような ToolTalk ヘッダ・ファイルを組み込む必要があります。

```
#include <Tt/tt_c.h>
```

tt_error

```
void tt_error(const char *funcname, Tt_status status)
```

tt_error() 関数は、一般的によく知られている NULL 関数です。この関数は、TT_OK 以外のステータスを持っている ToolTalk API 呼び出しから返される直前に ToolTalk ライブラリによって呼び出されます。返されようとしている関数名とステータス・コードが渡されます。この呼び出しを使って、tt_error() にデバッガのブレークポイントを設定し、ToolTalk エラーをすばやくキャッチして追跡できます。また、たとえば stderr に ToolTalk エラーのログを取るために、この関数を割り込み処理することもできます。次のコード・サンプルは、アプリケーションが上記の動作を行う方法を示しています。

```
void
tt_error(const char *funcname, Tt_status status)
{
    fprintf(stderr, "ToolTalk function %s returned %s.\n",
            funcname, tt_status_message(status));
}
```

tt_file_netfile

```
char *      tt_file_netfile( const char * filename );
```

tt_file_netfile() 関数は、ローカル・パス名と正規のパス名とを対応づけます。filename で指定したファイルを、ネットワーク上の他のホストに渡すことができる netfilename に変換します。filename は、ローカル・ホストで有効な絶対パス名または相対パス名です。filename の最後のコンポーネントは必須ではありませんが、filename のその他の各コンポーネントは必ず存在しなければなりません。

注・この関数を使用する前に tt_open 関数を呼び出す必要はありません。

この関数は、エラー・ポインタを返すか、正常終了した場合は未指定の書式の新たに割り当てられた NULL で終了する文字列を返します。この文字列は tt_netfile_file 関数に渡されます。

エラー・ポインタからステータスを取り出すには、tt_ptr_error を使用します。返される可能性のあるエラーを表 C-1 に示します。

表 C-1 tt_file_netfile が返す可能性のあるエラー

エラー	説明
TT_ERR_PATH	filename はこのホスト上では有効でないパスです。
TT_ERR_DBAVAIL	ホスト上の rpc.ttdbserverd に到達できませんでした。
TT_ERR_DBEXIST	rpc.ttdbserverd はホストに適切にインストールされていない可能性があります。

割り当てられた文字列を解除するには、tt_free または tt_release 呼び出しを使用します。

ファイル名を同じファイルのローカル・ファイル名に戻すには、tt_netfile_file 関数を使用します。

tt_host_file_netfile

```
char * tt_host_file_netfile(  const char *  host,
                             const char *  filename );
```

tt_host_file_netfile() 関数は、リモート・ホスト上のローカル・パス名と正規のパス名とを対応づけます。host で指定したファイルを、ネットワーク上の他のホストに渡すことができる netfilename に変換します。filename は、リモート・ホストで有効な絶対パス名または相対パス名です。filename の最後のコンポーネントは必須ではありませんが、その他の各コンポーネントは必ず存在しなければなりません。

注・この関数を使用する前に tt_open 関数を呼び出す必要はありません。

この関数は、エラー・ポインタを返すか、正常終了した場合は未指定の書式の新たに割り当てられた NULL で終了する文字列を返します。この文字列は tt_netfile_file 関数に渡されます。

エラー・ポインタからステータスを取り出すには、tt_ptr_error を使用します。返される可能性のあるエラーを表 C-2 に示します。

表 C-2 tt_host_file_netfile が返す可能性のあるエラー

エラー	説明
TT_ERR_PATH	filename はリモート・ホスト上では有効でないパスです。
TT_ERR_DBAVAIL	ホスト上の rpc.ttdbserverd に到達できませんでした。
TT_ERR_DBEXIST	rpc.ttdbserverd はホストに適切にインストールされていない可能性があります。
TT_ERR_UNIMP	rpc.ttdbserverd バージョンは、tt_host_file_netfile() 関数をサポートしていません。

- 割り当てられた文字列を解除するには、tt_free または tt_release 呼び出しを使用します。

ファイル名を同じファイルのローカル・ファイル名に戻すには、`tt_host_netfile_file()` 関数を使用します。

tt_host_netfile_file

```
char * tt_host_netfile_file( const char * host,
                             const char * netfilename );
```

`tt_host_file_netfile()` 関数は、リモート・ホスト上のローカル・パス名と正規のパス名とを対応づけます。`netfilename` で指定したファイルを、リモート・ホスト上で有効なパス名に変換します。`netfilename` は、`tt_netfile_file` 関数によって返される `NULL` で終了する文字列のコピーです。

注・この関数を使用する前に `tt_open` 関数を呼び出す必要はありません。

指定されたファイルが現在ローカル・ホストにマウントされていない場合、次のような書式のパス名が作成されます。

/DTMOUNTPOINT/host/filepath

`DTMOUNTPOINT` は、オートマウントのホスト・マップのために作成されたマウント・ポイントです。環境変数 `DTMOUNTPOINT` で、このマウント・ポイントを指定することもできます。

`host` は、ファイルを格納しているホストです。

`filepath` は、ホストに格納されているファイルに対するパスです。

この関数は、エラー・ポインタを返すか、正常終了した場合は新たに割り当てられた `NULL` で終了するローカル・ファイル名を返します。

エラー・ポインタからステータスを取り出すには、`tt_ptr_error` を使用します。返される可能性のあるエラーを表 C-3 に示します。

表 C-3 `tt_host_netfile_file` が返す可能性のあるエラー

エラー	説明
<code>TT_ERR_PATH</code>	<code>netfilename</code> は有効なネットファイル名ではありません。
<code>TT_ERR_DBAVAIL</code>	ホスト上の <code>rpc.ttdbserverd</code> に到達できませんでした。

表 C-3 tt_host_netfile_file が返す可能性のあるエラー 続く

エラー	説明
TT_ERR_DBEXIST	rpc.ttdbserverd はホストに適切にインストールされていない可能性があります。
TT_ERR_UNIMP	rpc.ttdbserverd バージョンは、tt_host_netfile_file() 関数をサポートしていません。

割り当てられた文字列を解除するには、tt_free または tt_release 呼び出しを使用します。

ファイル名を同じファイルのローカル・ファイル名に戻すには、tt_host_file_netfile() 関数を使用します。

tt_message_print

```
char * tt_message_print(Tt_message m);
```

tt_message_print 関数により、理解しないまま受信したメッセージを出力できます。

割り当てられた文字列を解除するには、tt_free または tt_release 呼び出しを使用します。

この関数は、エラー TT_ERR_POINTER を返すか、正常終了した場合は (tt_x_session などの他の ToolTalk API 呼び出しで行われているのと同様の方法で) ToolTalk によって割り当てられたバッファにあるメッセージ m を返します。

tt_netfile_file

```
char * tt_netfile_file( const char * netfilename );
```

tt_netfile_file 関数は、ローカル・パス名と正規のパス名とを対応づけます。netfilename で指定したファイルを、ローカル・ホスト上で有効なパス名に

変換します。netfilename は、tt_netfile_file 関数によって返される NULL で終了する文字列のコピーです。

注・この関数を使用する前に tt_open 関数を呼び出す必要はありません。

指定されたファイルが現在ローカル・ホストにマウントされていない場合、次のような形式のパス名が作成されます。

/DTMOUNTPOINT/host/filepath

DTMOUNTPOINT は、オートマウントのホスト・マップのために作成されたマウント・ポイントです。環境変数 DTMOUNTPOINT でこのマウント・ポイントを指定することもできます。

host は、ファイルを格納しているホストです。

filepath は、ホストに格納されているファイルに対するパスです。

この関数は、エラー・ポインタを返すか、正常終了した場合は新たに割り当てられた NULL で終了するローカル・ファイル名を返します。

エラー・ポインタからステータスを取り出すには、tt_ptr_error を使用します。返される可能性のあるエラーを表 C-4 に示します。

表 C-4 tt_netfile_file が返す可能性のあるエラー

エラー	説明
TT_ERR_PATH	netfilename は有効なネットファイル名ではありません。
TT_ERR_DBAVAIL	ホスト上の rpc.ttdbserverd に到達できませんでした。
TT_ERR_DBEXIST	rpc.ttdbserverd はホストに適切にインストールされていない可能性があります。

割り当てられた文字列を解除するには、tt_free または tt_release 呼び出しを使用します。

ファイル名を同じファイルのネット・ファイル名に戻すには、tt_file_netfile() 関数を使用します。

tt_pattern_print

```
char * tt_message_print(Tt_pattern p);
```

tt_pattern_print() 関数により、パターンを出力できます。

割り当てられた文字列を解除するには、tt_free または tt_release 呼び出しを使用します。

この関数は、エラー TT_ERR_POINTER を返すか、正常終了した場合は (tt_X_session などの他の ToolTalk API 呼び出しで行われているのと同様の方法で) ToolTalk によって割り当てられたバッファにあるパターン p を返します。

例

Ttdt_contract_cb の例

例 D-1 は、アプリケーションのための Ttdt_contract_cb コールバックの典型的なアルゴリズムの例です。このアプリケーションは、Pause 要求、Resume 要求、Quit 要求を処理しますが、ツールキットには X11 関連の要求しか処理させません。

注 - この例にあるコールバックは、contract パラメータがゼロ以外の値を持っている場合に処理します。したがって、tttdt_message_accept に渡される Ttdt_contract_cb コールバックとして使用することもできます。

例 D-1 Ttdt_contract_cb の典型的なアルゴリズム

```
Tt_message myContractCB(
    Tt_message msg,
    void *clientdata,
    Tt_message contract
)
{
    char *opString = tt_message_op( msg );
    Tttk_op op = tttk_string_op( opString );
    tt_free( opString );
    int silent = 0;
    int force = 0;
    Boolean cancel = False;
    Boolean sensitive = True;
    char *status, command;
    switch (op) {
        case TTDI_QUIT:
            tt_message_arg_ival( msg, 0, &silent );
            tt_message_arg_ival( msg, 1, &force );
```

```

if (contract == 0) {
    /* Quit entire application */
    cancel = ! myQuitWholeApp( silent, force );
} else {
    /* Quit just the specified request being worked on */
    cancel = ! myCancelThisRequest(contract, silent, force);
}
if (cancel) {
    /* User canceled Quit; fail the Quit request */
    tttk_message_fail( msg, TT_DESKTOP_ECANCELED, 0, 1 );
} else {
    tt_message_reply( msg );
    tttk_message_destroy( msg );
}
return 0;
case TTDT_PAUSE:
    sensitive = False;
case TTDT_RESUME:
    if (contract == 0) {
        int already = 1;
        if (XtIsSensitive( myTopShell ) != sensitive) {
            already = 0;
            XtSetSensitive( myTopShell, sensitive );
        }
        if (already) {
            tt_message_status_set(msg,TT_DESKTOP_EALREADY);
        }
        else {
            if (XtIsSensitive( thisShell ) == sensitive) {
                tt_message_status_set(msg,TT_DESKTOP_EALREADY);
            } else {
                XtSetSensitive( thisShell, sensitive );
            }
        }
        tt_message_reply( msg );
        tttk_message_destroy( msg );
        return 0;
case TTDT_GET_STATUS:
    if (contract == 0) {
        status = "Message about status of entire app";
    } else {
        status = "Message about status of this request";
    }
    tt_message_arg_val_set( msg, 0, status );
    tt_message_reply( msg );
    tttk_message_destroy( msg );
    return 0;
case TTDT_DO_COMMAND:
    if (! haveExtensionLanguage) {
        tttk_message_fail( msg, TT_DESKTOP_ENOTSUP, 0, 1 );
        return 0;
    }
    command = tt_message_arg_val( msg, 0 );
    result = myEval( command );
    tt_free( command );
    tt_message_status_set( msg, result );
    if (tt_is_err( result )) {
        tttk_message_fail( msg, result, 0, 1 );
    } else {
        tt_message_reply( msg );
        tttk_message_destroy( msg );
    }
}

```

```

    }
    return 0;
}
/* Unrecognized message; do not consume it */
return msg;
}

```

Ttdt_file_cb の例

例 D-2 は、このコールバックの典型的なアルゴリズムの例です。

例 D-2 Ttdt_file_cb の典型的なアルゴリズム

```

Tt_message myFileCB(
    Tt_message      msg,
    Tttk_op         op,
    char            *pathname,
    int             trust,
    int             isMe
)
{
    tt_free( pathname );
    Tt_status status = TT_OK;
    switch (op) {
        case TTDI_MODIFIED:
            if ((_modifiedByMe) && (! isMe)) {
                // Hmm, the other editor either does not know or
                // does not care that we are already modifying the
                // file, so the last saver will win.
            } else {
                // Interrogate user if she ever modifies the buffer
                _modifiedByOther = 1;
                XtAddCallback( myTextWidget, XmNmodifyVerifyCallback,
                               myTextModifyCB, 0 );
            }
            break;
        case TTDI_GET_MODIFIED:
            tt_message_arg_ival_set( msg, 1, _modifiedByMe );
            tt_message_reply( msg );
            break;
        case TTDI_SAVE:
            status = mySave( trust );
            if (status == TT_OK) {
                tt_message_reply( msg );
            } else {
                tttk_message_fail( msg, status, 0, 0 );
            }
            break;
        case TTDI_REVERT:
            status = myRevert( trust );
            if (status == TT_OK) {
                tt_message_reply( msg );
            } else {

```

```

        tttk_message_fail( msg, status, 0, 0 );
    }
    break;
case TTDT_REVERTED:
    if (! isMe) {
        _modifiedByOther = 0;
    }
    break;
case TTDT_SAVED:
    if (! isMe) {
        _modifiedByOther = 0;
        int choice = myUserChoice( myContext, myBaseFrame,
                                   "Another tool has saved "
                                   "this file.", 2, "Ignore",
                                   "Revert" );

        switch (choice) {
            case 1:
                myRevert( 1 );
                break;
        }
    }
    break;
case TTDT_MOVED:
case TTDT_DELETED:
    // Do something appropriate
    break;
}
tttk_message_destroy( msg );
return 0;
}

```

Ttmedia_load_msg_cb の例

例 D-3 は、このコールバックの典型的なアルゴリズムの例です。

例 D-3 Ttmedia_load_msg_cb の典型的なアルゴリズム

```

Tt_message
myLoadMsgCB(
    Tt_message    msg,
    void          *clientData,
    Tttk_op       op,
    unsigned char *contents,
    int           len,
    char          *file
)
{
    if (len > 0) {
        // Replace data with len bytes in contents
    } else if (file != 0) {
        // Replace data with data read from file
    }
}

```

```

    if (op == TTME_DEPOSIT) {
        tt_message_reply( msg );
    }
    tttk_message_destroy( msg );
    return 0;
}

```

Ttmedia_load_pat_cb の例

例 D-4 は、このコールバックの典型的なアルゴリズムの例です。

例 D-4 TTtmedia_load_pat_cb の典型的なアルゴリズム

```

Tt_message
myAcmeSheetLoadCB(
    Tt_message      msg,
    void            *client_data,
    Tttk_op         op,
    Tt_status       diagnosis,
    unsigned char   *contents,
    int             len,
    char            *file,
    char            *docname
)
{
    Tt_status status = TT_OK;
    if (diagnosis != TT_OK) {
        // toolkit detected an error
        if (tt_message_status( msg ) == TT_WRN_START_MESSAGE) {
            //
            // Error is in start message!   We now have no
            // reason to live, so tell main() to exit().
            //
            myAbortCode = 2;
        }
        // let toolkit handle the error
        return msg;
    }
    if ((op == TTME_COMPOSE) && (file == 0)) {
        // open empty new buffer
    } else if (len > 0) {
        // load contents into new buffer
    } else if (file != 0) {
        if (ttdt_Get_Modified( msg, file, TT_BOTH, myCntxt, 5000 )) {
            switch (myUserChoice( "Save, Revert, Ignore?" )) {
                case 0:
                    ttdt_Save( msg, file, TT_BOTH, myCntxt, 5000 );
                    break;
                case 1:
                    ttdt_Revert( msg, file, TT_BOTH, myCntxt, 5000);
                    break;
            }
        }
    }
}

```

```

    }
    // load file into new buffer
} else {
    tttk_message_fail( msg, TT_DESKTOP_ENODATA, 0, 1 );
    tt_free( contents ); tt_free( file ); tt_free( docname );
    return 0;
}
int w, h, x, y = INT_MAX;
ttdt_sender_imprint_on( 0, msg, 0, &w, &h, &x, &y, myCntxt, 5000 );
positionMyWindowRelativeTo( w, h, x, y );
if (maxBuffersAreNowOpen) {
    // Un-volunteer to handle future requests until less busy
    tt_ptype_undeclare( "Acme_Calc" );
}
if (tt_message_status( msg ) == TT_WRN_START_MESSAGE) {
    //
    // Join session before accepting start message,
    // to prevent unnecessary starts of our ptype
    //
    ttdt_session_join( 0, myContractCB, myShell, 0, 1 );
}
ttdt_message_accept( msg, myContractCB, myShell, 0, 1, 1 );
tt_free( contents ); tt_free( file ); tt_free( docname );
return 0;
}

```

Ttmedia_ptype_declare 関数の ptype シグニチャーの例

例 D-5 は、メディア ptype のシグニチャーレイアウトの例です。

例 D-5 メディア ptype のシグニチャーレイアウトの例

```

ptype Acme_Calc {
    start "acalc";
    handle:
    /*
     * Display Acme_Sheet
     * Include in tool's ptype if tool can display a document.
     */
    session Display( in    Acme_Sheet    contents    ) => start opnum = 1;
    session Display( in    Acme_Sheet    contents,
                        in    messageID    counterfoil ) => start opnum = 2;
    session Display( in    Acme_Sheet    contents,
                        in    title       docName     ) => start opnum = 3;
    session Display( in    Acme_Sheet    contents,
                        in    messageID    counterfoil,
                        in    title       docName     ) => start opnum = 4;
    /*
     * Edit Acme_Sheet
     * Include in tool's ptype if tool can edit a document.
     */
}

```

```

    */
    session Edit(    inout Acme_Sheet    contents    ) => start opnum = 101;
    session Edit(    inout Acme_Sheet    contents,
                    in    messageID      counterfoil ) => start opnum = 102;
    session Edit(    inout Acme_Sheet    contents,
                    in    title          docName     ) => start opnum = 103;
    session Edit(    inout Acme_Sheet    contents,
                    in    messageID      counterfoil,
                    in    title          docName     ) => start opnum = 104;
/*
 * Compose Acme_Sheet
 * Include in tool's ptype if tool can compose a document from scratch.
 */
    session Edit(    out    Acme_Sheet    contents    ) => start opnum = 201;
    session Edit(    out    Acme_Sheet    contents,
                    in    messageID      counterfoil ) => start opnum = 202;
    session Edit(    out    Acme_Sheet    contents,
                    in    title          docName     ) => start opnum = 203;
    session Edit(    out    Acme_Sheet    contents,
                    in    messageID      counterfoil,
                    in    title          docName     ) => start opnum = 204;
/*
 * Mail Acme_Sheet
 * Include in tool's ptype if tool can mail a document.
 */
    session Mail(    in    Acme_Sheet    contents    ) => start opnum = 301;
    session Mail(    inout Acme_Sheet    contents    ) => start opnum = 311;
    session Mail(    inout Acme_Sheet    contents,
                    in    title          docName     ) => start opnum = 313;
    session Mail(    out    Acme_Sheet    contents    ) => start opnum = 321;
    session Mail(    out    Acme_Sheet    contents,
                    in    messageID      counterfoil ) => start opnum = 323;
};

```

Xt 入力処理関数の例

例 D-6 は、Xt 入力処理関数の例です。

例 D-6 Xt 入力処理関数の例

```

int myTtFd;
char *myProcID;
myProcID = ttdt_open( &myTtFd, "WhizzyCalc", "Acme", "1.0", 1 );
/* ... */
/* Process the message that started us, if any */
tttk_Xt_input_handler( myProcID, 0, 0 );
/* ... */
XtAppAddInput( myContext, myTtFd, (XtPointer)XtInputReadMask,
               tttk_Xt_input_handler, myProcID );

```


索引

C

CoEd.C ファイル 101, 102
Coeditor.C ファイル 105
CoEditor.h ファイル 30
CoEd デモ・プログラム 101
CoEd デモンストレーション・プログラム 101
Compose 要求 89
CORBA 準拠のシステム 18, 26
Created 通知 68

D

Deleted 通知 66, 68
Deposit 要求 89, 90
\$DISPLAY 80
Display 要求 89
Do_Command 要求 83
DTMOUNTPOINT 124, 126

E

Edit 要求 89
environ (5) 76
ENV_ 65, 89

F

filepath 124, 126

G

Get_Environment 要求 82
Get_Geometry 要求 74, 80, 82, 86
Get_Iconified 要求 74, 82
Get_Locale 要求 82
Get_Mapped 要求 74, 82
Get_Modified 要求 65, 72
Get_Situation 要求 82
Get_Status 要求 75, 83
Get_Sysinfo 要求 82
Get_XInfo 要求 74, 83, 86

L

libtt 48
Lower 要求 74, 83
-ltt オプション 30

M

makefile 30
Modified 通知 65, 66, 68
Moved 通知 66, 68

N

netfilename 124, 122 - 123

P

Pause 要求 74, 83
procid 36
ptype 19
ptype のインストール 35
ptype のマージ 36
ptype ファイル 35

Q

Quit 要求 75, 83

R

Raise 要求 74, 83
Resume 要求 74, 83
Reverted 通知 65, 66, 68
Revert 要求 65, 77
rpc.ttdbserverd 122

S

Saved 通知 65, 66, 68
Save 要求 65, 78
Session_Trace 要求 49
Set_Environment 要求 82
Set_Geometry 要求 74, 81, 82
Set_Iconified 要求 74, 82
Set_Locale 要求 82
Set_Mapped 要求 74, 82
Set_Situation 要求 82
Set_XInfo 要求 74, 83
Signal 要求 82
Started 通知 76
Status 通知 86
Stopped 通知 64

T

ToolTalk 型コンパイラ 34, 35
ToolTalk 型データベース 34
ToolTalk 関数
 tttrace 51
 tt_close 64
 tt_default_procid_set 64
 tt_file_netfile 126
 tt_free 66, 76, 80, 90, 93, 125 - 124
 tt_netfile_file 124

tt_open 76, 124, 122 - 123
tt_ptr_error 124, 122 - 123
tt_release 125 - 124
tt_X_session 125, 127

ToolTalk コマンド

 tttrace 47

ToolTalk サービス 16

ToolTalk サービスを使用するためのアプ
 リケーションの変更 27

ToolTalk のセッションの概念 26

ToolTalk の特徴 24

ToolTalk ヘッダ・ファイル 29, 121

ToolTalk メッセージ 24

ToolTalk メッセージ・セット
 デスクトップ 18

 ドキュメント・メディア交換 21

ToolTalk メッセージ・ツールキットのヘッ
 ダ・ファイル 63

ToolTalk メッセージの受信 25

ToolTalk メッセージの送信 23

ToolTalk ライブラリ 30

truss コマンド 47

ttdt_close 64

Ttdt_contract_cb 84, 129

Ttdt_contract_cb 引き数 73

Ttdt_file_cb 66, 131

ttdt_file_event 64, 68

ttdt_file_join 59, 65, 66, 70

ttdt_file_notice 68

ttdt_file_quit 67, 69

ttdt_file_request 70

TTDT_GET_MODIFIED 71

ttdt_Get_Modified 71, 72

ttdt_message_accept 72

TTDT_MODIFIED 65

ttdt_open 75, 76

ttdt_Revert 71, 77

TTDT_REVERTED 65

ttdt_Save 71, 78

TTDT_SAVED 65

ttdt_sender_imprint_on 80

ttdt_session_join 81

ttdt_session_quit 84 - 86

ttdt_subcontract_manage 86, 89

ttmedia_Deposit 87

ttmedia_load 88, 90

Ttmedia_load_msg_cb 132

Ttmedia_load_msg_cb メッセージ 89
 Ttmedia_load_pat_cb 133
 Ttmedia_load_pat_cb メッセージ 93
 ttmedia_load_reply 91
 ttmedia_ptype_declare 92
 Ttmedia_ptype_declare 134
 TTME_COMPOSE 89, 93
 TTME_DEPOSIT 90
 TTME_DISPLAY 89, 93
 TTME_EDIT 89, 93
 ttsession トレース 47
 TTSnoop 41
 ttsnoop コマンドの -t オプション 42
 tttk_block_while 72, 77, 79, 81, 95
 tttk_message_abandon 95, 99
 tttk_message_create 96
 tttk_message_destroy 97
 tttk_message_fail 97
 tttk_message_receive 98
 tttk_message_reject 98
 tttk_op_string 99
 tttk_patterns_destroy 75
 tttk_Xt_input_handler 99, 135
 tttrace 47
 tttrace 関数 48, 51
 tttrace コマンド 47
 TT_BOTH 67, 72, 77, 79
 tt_close 関数 64
 tt_default_procid_set (new_procid) 64
 tt_default_procid_set (procid) 64
 tt_default_procid_set 関数 64
 TT_DESKTOP_EINVAL 65, 69
 TT_DESKTOP_ENODATA 93
 TT_DESKTOP_ENOTSUP 74, 75, 82, 83
 TT_DESKTOP_EPROTO 78, 80
 TT_DESKTOP_ETIMEOUT 78, 79, 81, 88
 tt_error 関数 121
 TT_ERR_APPFIRST + EACCES 51
 TT_ERR_APPFIRST + EEXIST 51
 TT_ERR_APPFIRST + EISDIR 51
 TT_ERR_APPFIRST + ENOSPC 51
 TT_ERR_DBAVAIL 67, 69 - 71, 78, 79, 88, 124,
 122 - 123
 TT_ERR_DBEXIST 67, 69 - 71, 78, 79, 88, 125
 - 123
 TT_ERR_EINVAL 87
 TT_ERR_NOMEM 67, 69, 71, 78, 79, 81, 85,
 87, 88, 91, 97
 TT_ERR_NOMP 65, 67, 69 - 71, 76, 77, 79, 81,
 84, 85, 87, 88, 91, 92, 94, 95,
 97, 99
 TT_ERR_NOTHANDLER 92, 95
 TT_ERR_NO_MATCH 51
 TT_ERR_NUM 92
 TT_ERR_OVERFLOW 65, 69, 71, 78, 79, 81,
 88, 91
 TT_ERR_PATH 67, 124, 122 - 123
 TT_ERR_POINTER 65, 69 - 71, 76, 78, 80, 85 -
 88, 94, 95
 TT_ERR_PROCID 69 - 71, 77, 79, 81, 84, 85,
 87, 88, 91, 92, 94, 97
 TT_ERR_PTYPE 94
 TT_ERR_SESSION 85, 86
 TT_ERR_UNIMP 76, 125, 123
 tt_fd 76
 TT_FILE_IN_SESSION 67, 72, 77, 79
 tt_file_join (pathname) 67
 tt_file_netfile 関数 122, 126
 tt_file_quit (pathname) 69
 tt_free 66
 tt_free 関数 76, 80, 90, 93, 125 - 124
 tt_host_file_netfile 関数 123
 tt_host_netfile_file 関数 124
 tt_message_accept (contract) 75
 tt_message_destroy メッセージ 97
 tt_message_id 90
 tt_message_print 125
 tt_message_receive 98
 tt_message_receive 関数 99
 tt_message_status 77, 79
 tt_netfile_file 関数 124 - 124
 tt_open 52
 tt_open 関数 76, 124, 122 - 123
 tt_pattern_print 127
 TT_PROCEDURE 96
 tt_ptr_error 67, 75, 84, 86, 90, 96
 tt_ptr_error 関数 124, 122 - 123
 tt_ptype_declare (ptype) 93
 tt_release 関数 125 - 124
 TT_SCOPE_NONE 67, 72, 77, 79
 tt_trace_control 関数 48
 \$TT_TRACE_SCRIPT 48
 TT_TRACE_SCRIPT 環境変数 52
 tt_type_comp 34

TT_WRN_START_MESSAGE 75, 98
tt_X_session 125, 127

U

/usr/dt/bin/ttsnoop 42

X

XtRemoveInput 関数 99

あ

アプリケーション統合 34
アプリケーションの ToolTalk メッセージの使
用方法 23
アプリケーション・プログラミング・インタ
フェース (API) 27

い

イベント 31

え

エラー

TT_ERR_APPFIRST + EACCES 51
TT_ERR_APPFIRST + EEXIST 51
TT_ERR_APPFIRST + EISDIR 51
TT_ERR_APPFIRST + ENOSPC 51
TT_ERR_DBAVAIL 124, 126, 123
TT_ERR_DBEXIST 125 - 123
TT_ERR_NO_MATCH 51
TT_ERR_PATH 124, 126, 123
TT_ERR_UNIMP 125, 123

エラーの値

TT_DESKTOP 93
TT_DESKTOP_EINVAL 65, 69
TT_DESKTOP_ENOTSUP 74, 75, 82, 83
TT_DESKTOP_EPROTO 78, 80
TT_DESKTOP_ETIMEOUT 78, 79, 81, 88
TT_ERR_DBAVAIL 67, 69 - 71, 78, 79, 88
TT_ERR_DBEXIST 67, 69 - 71, 78, 79, 88
TT_ERR_EINVAL 87
TT_ERR_NOMEM 67, 69, 71, 78, 79, 81,
85, 87, 88, 91, 97

TT_ERR_NOMP 65, 67, 69 - 71, 76, 77,
79, 81, 84, 85, 87, 88, 91, 92,
94, 95, 97, 99

TT_ERR_NOTHANDLER 92, 95

TT_ERR_NUM 92

TT_ERR_OVERFLOW 65, 69, 71, 78, 79,
81, 88, 91

TT_ERR_PATH 67

TT_ERR_POINTER 65, 69 - 71, 76, 78, 80,
85 - 87, 94

TT_ERR_PROCID 69 - 71, 77, 79, 81, 84,
85, 87, 88, 91, 92, 94, 97

TT_ERR_PTYPE 94

TT_ERR_SESSION 85, 86

TT_ERR_UNIMP 76

お

オブジェクト指向メッセージ 26
オペレーション 31

か

開始文字列 35

型機構 34

型情報

マージ 36

型情報のマージ 36

環境変数

\$DISPLAY 80

DTMOUNTPOINT 124, 126

\$TT_TRACE_SCRIPT 48

き

既存の ptype に対するテスト 35

く

クライアント・モード 47

こ

固定表示オブジェクト 18

コンパイルされた ToolTalk 型ファイルを実行
中の ttssession にマージす
る 36

さ

サーバ・モード 47

し

シグニチャ 35

自動起動 17

受信側 23

受信側の判別 24

使用中の ToolTalk サービスを示すシナリオ 18

新規の ToolTalk 関数

tt_error 121

tt_file_netfile 122

tt_host_file_netfile 123

tt_host_netfile_file 124

tt_message_print 125

tt_netfile_file 125 - 123

tt_pattern_print 127

ttdt_open 75, 76

ttdt_sender_imprint_on 80

ttdt_session_join 81

ttdt_session_quit 84 - 86

ttdt_subcontract_manage 86, 89

ttmedia_Deposit 87

ttmedia_load 88, 90

ttmedia_load_reply 91

ttmedia_ptype_declare 92

tttk_Xt_input_handler 99

tttk_block_while 72, 77, 79, 81, 95

tttk_message_abandon 95

tttk_message_create 96

tttk_message_destroy 97

tttk_message_fail 97

tttk_message_receive 98

tttk_message_reject 98

tttk_op_string 99

tttk_patterns_destroy 75

せ

正規のパス名とローカル・パス名との対応づけ 126

制御統合 17

静的メッセージ・パターン 34

セッション識別子 (sessid) 26

そ

相互運用の問題 16

送信側 23

つ

通知 31

ツールキット・メッセージ

ttdt_Get_Modified 72

ttdt_Revert 77

ttdt_Save 78

ttdt_close 64

ttdt_contract_cb 84

ttdt_file_event 64, 68

ttdt_file_join 65, 66, 70

ttdt_file_notice 68

ttdt_file_quit 67, 69

ttdt_file_request 70

ttdt_message_accept 72

て

デスクトップ・サービス・メッセージ・セット 18

と

ドキュメント・メディア交換メッセージ・セット 21

ね

ネットワーク透過イベント 17

は

パス名 124, 126

ふ

ファイル

CoEd.C ファイル 101, 102

CoEditor.h ファイル 30

Coeditor.C ファイル 105

ToolTalk のファイルの概念 26

ToolTalk ヘッダ 29, 121

ToolTalk メッセージ・ツールキットのヘッダ 63

メッセージ・ツールキットのヘッダ 29
ファイルの配信範囲指定機能の制限 27
プラグ・アンド・プレイ 16
プロセス型 (ptype) 34
プロセス型識別子 (ptid) 34
プロセス指向メッセージ 25
分散オブジェクト・システム 17

ほ

ホスト 124, 126
本リリースに付いているツール用の ptype 34
本リリースには含まれていないツール用の
ptype 34

め

メッセージ
オブジェクト指向メッセージ 26
監視 24
受信 25
処理 24
送信 23
プロセス指向メッセージ 25
メッセージの受信者の判別 26

メッセージを配布する方式 25
メッセージ・セット
ツールキット 64 - 70, 72, 75 - 81, 84 - 92,
95 - 99
メッセージ・ツールキットの組み込み 30
メッセージ・ツールキットのヘッダ・ファイ
ル 29
メッセージ・パターン 24
メッセージ・プロトコル 27
メッセージを配布する方式 25

よ

要求 31
要求の識別 31

ら

ライブラリ
ToolTalk 30

ろ

ローカル・パス名と正規のパス名との対応づ
け 122 - 124